

主要地方道溝口伯太線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡会見町

TURUTAHAKANOUÉ

鶴田墓ノ上遺跡

TURUTAŌMITIBATA

鶴田大道端遺跡

TURUTANAKAMINEYAMA

鶴田中峯山遺跡

1997

財団法人 鳥取県教育文化財団

# 序

鳥取県西部、秀峰大山の西に位置する会見町は、四季折々の美しい景観を眺望することのできる自然豊かな地域です。また、この地域は、古くから遺跡の宝庫としても知られており、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が多数見つかった越敷山遺跡群、西伯耆最大の前方後円墳である三崎殿山古墳、三角縁神獣鏡が出土した普段寺1・2号墳、人物埴輪の出土した後塔山古墳など古代人の生活や当時の人々の活発な交流を物語る貴重な遺跡・遺物が数多く存在しています。

財団法人鳥取県教育文化財団では、平成7年度から鳥取県の委託を受け、主要地方道溝口伯太線の改築工事に伴って、失われる遺跡について記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。平成8年度は会見町の東側を占める越敷台地上に位置する鶴田墓ノ上遺跡・鶴田大道端遺跡・鶴田中峯山遺跡の3遺跡の発掘調査を実施しました。

発掘調査においては、縄文時代の落とし穴、弥生時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、中世や近世の土坑・土壇墓などの遺構や遺物が見つかりました。その結果、これまで不明な点が多かった越敷台地における郷土の先人たちの足跡の一端を明らかにすることができ、郷土の歴史を解明するうえでの貴重な資料を得ることができました。

本書は、この発掘調査の結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめたものです。本書の「記録」が、文化財に対する認識と理解を深めるとともに、教育及び学術研究のために広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後に、調査に際しまして、多大な御理解と御協力をいただいた地元の方々をはじめとする関係各位に対し、心から感謝し、厚くお礼を申し上げます。

平成9年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団  
理事長 田 淵 康 允

# 例 言

1. 本報告書は、「主要地方道溝口伯太線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査委託」に伴い平成8(1996)年度に調査を実施した鶴田墓ノ上遺跡・鶴田大道端遺跡・鶴田中峯山遺跡の埋蔵文化財発掘調査記録である。

遺跡の所在地は下記の通りである。

つるた はかのうえ

鶴田墓ノ上遺跡：西伯郡会見町鶴田字墓ノ上762、769

つるた おおみちばた

鶴田大道端遺跡：西伯郡会見町鶴田字大道端425-1、425-4

つるた なかみねやま

鶴田中峯山遺跡：西伯郡会見町鶴田字中峯山384-3、字中屋敷358-1

3遺跡は近接しており、北緯35度20分30秒、東経133度25分付近に位置する。

2. 調査地には、株式会社ウエスコに委託して国土座標第V系に対応する10m単位のグリッドを設定し、東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で図示しグリッド名とした。方位は国土座標第V系に基づく座標北であり、レベルは海拔標高を表す。なお、国土座標およびグリッド名については各遺跡の全体遺構図に記載した。
3. 本報告書に掲載の周辺遺跡分布図には国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」(平成3年修正版)および「根雨」(平成2年修正版)を使用した。
4. 本報告書の作成は調査員の討議に基づく。本文は調査員が分担して執筆し、目次に執筆者を記載した。なお、編集は西川が行った。  
遺構図の浄写・遺物の実測並びに浄写は鳥取県埋蔵文化財センターで実施した。  
遺構・遺物写真は調査員が撮影した。
5. 遺構実測は調査員が行ったが、鶴田中峯山遺跡の調査後測量を除く調査前および調査後の地形測量を株式会社ウエスコに委託して行った。
6. 鶴田中峯山遺跡のラジコンヘリコプターによる遺構空中写真撮影を、写測エンジニアリング株式会社に委託して行った。
7. 出土した石製品の石材鑑定を鳥取大学教育学部の赤木三郎教授にお願いし、御教示をいただいた。
8. 周辺地域の地質について鳥取大学教育学部の岡田昭明助教授に現地指導をいただいた。
9. 鶴田中峯山遺跡SK-36出土の人骨について鳥取大学医学部の井上貴央教授に取り上げおよび鑑定をお願いし、玉稿をいただいた。
10. 鶴田大道端遺跡SK-01および鶴田中峯山遺跡SK-21の土坑埋土のリン・カルシウム分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
11. 出土遺物・図面・写真等は鳥取県埋蔵文化財センターで保管している。
12. 現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々に指導・協力を頂いた。(五十音順、敬称略)

新井 宏則 岡田 龍平



# 凡 例

- 出土遺物にネーミングした遺跡名は下記の略称を用いた。  
鶴田中峯山遺跡：中ミネ
- 本報告書における遺構記号は下記のように表す。  
S I：竪穴住居跡      S B：掘立柱建物跡      S K：土坑・土壇墓      S D：溝状遺構  
S S：段状遺構      P：柱穴・ピット（全体遺構図中では遺構記号「P」を省略）  
S X：不明遺構
- 本報告書における遺物記号は下記のように表す。  
P o：土器・土製品      S：石製品      F：鉄製品      C：古銭
- 遺構図中における表示は下記のように表す。  
■：焼土面      ●：土器・土製品      ▲：石製品      ■：鉄製品
- 遺物実測図中における記号は以下の通りとする。  
→：ケズリの方向（砂粒の動き）    |----|：擦り範囲    |——|：敲打範囲
- 遺物観察表における法量の欄の番号は次の通りとする。なお、数値の後についた※は復元値、△は残存値、◎は推定値であることを表す。  
①口径    ②器高    ③底部径    ④脚径・高台径    ⑤最大長    ⑥最大幅    ⑦最大厚
- 遺物観察表の備考欄に記載した「清水-1」等の番号は実測者番号である。実測者番号はテープに記したものを実測個体ごとに貼り付けるとともに実測原図にも記載した。
- 発掘調査時における遺構番号と本報告書における遺構番号は基本的には一致するが、下記のものは変更したものである。

## 鶴田中峯山遺跡

調査時	報告時
SK-07	SB-01
SD-06	SD-25

挿表1 遺構番号対照表



調査参加者



# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 調査の経緯	
第1節 発掘調査に至る経緯	(西川) 1
第2節 調査の経過と方法	(西川) 1
第3節 調査体制	(西川) 3
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	(宮石) 4
第2節 歴史的環境	(宮石) 5
第3章 鶴田墓ノ上遺跡の調査	
第1節 土坑	(西川) 11
第2節 まとめ	(西川) 19
第4章 鶴田大道端遺跡の調査	
第1節 掘立柱建物跡	(宮石) 23
第2節 土坑	(宮石) 24
第3節 溝状遺構	(宮石) 26
第4節 ピット	(宮石) 26
第5節 まとめ	(宮石) 27
第5章 鶴田中峯山遺跡の調査	
第1節 竪穴住居跡	(西川) 35
第2節 掘立柱建物跡	(西川) 39
第3節 土坑・土壇墓	(西川・宮石) 41
第4節 溝状遺構	(宮石) 63
第5節 段状遺構	(西川) 84
第6節 窯状遺構	(西川) 85
第7節 集石遺構	(西川) 87
第8節 不明遺構	(宮石) 88
第9節 ピット	(西川) 90
第10節 遺構外の遺物	(西川) 90
第11節 まとめ	(西川) 96
附論 1 鶴田大道端遺跡SK-01の遺体埋葬の可能性	パリノ・サーヴェイ株式会社 107
2 鶴田中峯山遺跡SK-21のリン・カルシウム分析	パリノ・サーヴェイ株式会社 109
3 鶴田中峯山遺跡から検出された人骨について	井上貴央 111

# 插图目次

插图1	調査地位置図	2	插图34	SK-02 遺構図	42
插图2	遺跡位置図	4	插图35	SK-03 遺構図	43
插图3	周辺遺跡分布図	7	插图36	SK-04 遺構図	43
<b>鶴田墓ノ上遺跡</b>					
插图4	鶴田墓ノ上遺跡調査前地形測量図	9	插图37	SK-05 遺構図	44
插图5	鶴田墓ノ上遺跡全体遺構図	10	插图38	SK-06 遺構図	45
插图6	SK-01 遺構図	11	插图39	SK-07 遺構図	45
插图7	SK-02 遺構図	12	插图40	SK-08 遺構図	46
插图8	SK-03 遺構図	13	插图41	SK-09 遺構図	47
插图9	SK-04 遺構図	14	插图42	SK-09 遺物実測図	47
插图10	SK-05 遺構図	15	插图43	SK-10 遺構図	48
插图11	SK-06 遺構図	16	插图44	SK-11 遺構図	48
插图12	SK-07 遺構図	17	插图45	SK-11 遺物実測図	48
插图13	SK-08 遺構図	19	插图46	SK-12 遺構図	49
<b>鶴田大道端遺跡</b>					
插图14	鶴田大道端遺跡調査前地形測量図	21	插图47	SK-12 遺物実測図	49
插图15	鶴田大道端遺跡全体遺構図	22	插图48	SK-13 遺構図	50
插图16	SB-01 遺構図	23	插图49	SK-14 遺構図	50
插图17	SB-02 遺構図	24	插图50	SK-15 遺構図	51
插图18	SK-01 遺構図	24	插图51	SK-16 遺構図	51
插图19	SK-02 遺構図	25	插图52	SK-17 遺構図	52
插图20	SK-03 遺構図	25	插图53	SK-18 遺構図	52
插图21	SK-04 遺構図	26	插图54	SK-19 遺構図	52
插图22	SD-01 遺構図	26	插图55	SK-20 遺構図	53
插图23	南壁東西土層断面図	27	插图56	SK-20 遺物実測図	53
<b>鶴田中峯山遺跡</b>					
插图24	鶴田中峯山遺跡調査前地形測量図	31・32	插图57	SK-21 遺構図	54
插图25	鶴田中峯山遺跡全体遺構図	33・34	插图58	SK-21 遺物実測図	54
插图26	SI-01 遺物実測図	35	插图59	SK-22 遺構図	55
插图27	SI-01 遺構図	36	插图60	SK-23 遺構図	55
插图28	SI-02 遺構図	37	插图61	SK-24 遺構図	56
插图29	SI-02 遺物実測図	38	插图62	SK-24 遺物実測図	56
插图30	SB-01 遺構図	39	插图63	SK-25 遺構図	56
插图31	SB-02 遺構図	40	插图64	SK-25 遺物実測図	56
插图32	SB-03 遺構図	41	插图65	SK-26 遺構図	57
插图33	SK-01 遺構図	42	插图66	SK-27 遺構図	57
			插图67	SK-28 遺構図	58
			插图68	SK-29 遺構図	58
			插图69	SK-30 遺構図	58
			插图70	SK-31 遺構図	59
			插图71	SK-32 遺構図	59
			插图72	SK-33 遺構図	60

挿図73	SK-34 遺構図	60	挿図92	SD-18 遺物実測図	79
挿図74	SK-35 遺構図	61	挿図93	SD-20 遺物実測図	80
挿図75	SK-36 遺構図	62	挿図94	SD-22 遺構図	80
挿図76	SK-37 遺構図	63	挿図95	SD-23 遺構図	81
挿図77	SK-37 遺物実測図	63	挿図96	SD-24 遺構図	81
挿図78	SD-01 遺物実測図	64	挿図97	SD-25 遺構図	81
挿図79	SD-02 遺物実測図	64	挿図98	SS-01 遺物実測図	83
挿図80	SD-01・02・03・04 ・05・07 遺構図	65・66	挿図99	SS-01 遺構図	84
挿図81	SD-06・08・09・10 遺構図	69・70	挿図100	SS-02 遺構図	85
挿図82	SD-11 遺構図	72	挿図101	SS-02 遺物実測図	85
挿図83	SD-13 遺物実測図	72	挿図102	窯状遺構遺構図	86
挿図84	SD-12 遺構図	73・74	挿図103	窯状遺構遺物実測図	87
挿図85	SD-13 遺構図	73・74	挿図104	集石遺構遺構図	87
挿図86	SD-15 遺構図	73・74	挿図105	SX-01 遺構図	89
挿図87	SD-14 遺構図	75	挿図106	P103遺構図	90
挿図88	SD-15 遺物実測図	75	挿図107	P103遺物実測図	90
挿図89	SD-16 遺構図	75	挿図108	ピット位置図	91・92
挿図90	SD-17 遺構図	76	挿図109	遺構外出土遺物実測図(1)	93
挿図91	SD-18・19・20・21 遺構図	77・78	挿図110	遺構外出土遺物実測図(2)	94
			挿図111	遺構外出土遺物実測図(3)	95

## 挿表目次

挿表1	遺構番号対照表	凡例
-----	---------	----

### 鶴田墓ノ上遺跡

挿表2	土坑一覧表	20
-----	-------	----

### 鶴田大道端遺跡

挿表3	掘立柱建物跡一覧表	27
挿表4	土坑一覧表	28
挿表5	ピット一覧表	28

### 鶴田中峯山遺跡

挿表6	竪穴住居跡一覧表	97
挿表7	掘立柱建物跡一覧表	97
挿表8	土坑・土墳墓一覧表	98
挿表9	溝状遺構一覧表	99
挿表10	ピット一覧表	99
挿表11	土器・土製品観察表	102
挿表12	石製品観察表	106
挿表13	鉄製品観察表	106



# 図版目次

## 鶴田墓ノ上遺跡

- 図版1 調査後全景（南より）  
SK-01 土層断面（北より）  
SK-03 土層断面（南西より）  
SK-04 土層断面（西より）
- 図版2 SK-05 底面ピット断面（西より）  
SK-06 土層断面（南より）  
SK-07 土層断面（西より）  
SK-07 底面ピット断面（西より）

## 鶴田大道端遺跡

- 図版3 調査後全景（西より）  
SB-01 完掘状況（北より）  
SB-02 完掘状況（東より）  
SK-01 完掘状況（東より）  
SK-02 完掘状況（南東より）  
SK-02 土層断面（南東より）
- 図版4 SK-03 完掘状況（北より）  
SK-04 完掘状況（東より）  
SD-01 完掘状況（南より）  
SD-01 土層断面（南東より）

## 鶴田中峯山遺跡

- 図版5 調査後全景（南より）  
SI-01 完掘状況（北東より）  
SI-02 完掘状況（北東より）
- 図版6 SB-01 完掘状況（南より）  
SB-02 完掘状況（東より）  
SB-03 完掘状況（南東より）
- 図版7 SK-05 土層断面（南西より）  
SK-08 土層断面（西より）  
SK-09 土層断面（南より）  
SK-09 土器出土状況（南より）
- 図版8 SK-12 土器出土状況（南より）  
SK-20 鉄鎌出土状況（南東より）  
SK-21 礫検出状況（北西より）  
SK-21 土器出土状況（西より）

- 図版9 SK-35 人骨片出土状況（南より）  
SK-36 人骨出土状況（南より）  
SK-37 鉄鍋出土状況（南より）
- 図版10 溝状遺構検出状況（南西より）  
SD-01 土器出土状況（西より）  
SD-15 土層断面（南より）
- 図版11 SS-01 穴3 土層断面（北東より）  
SS-01 穴5 土層断面（北東より）  
SS-02 完掘状況（西より）
- 図版12 窯状遺構土層断面（東より）  
窯状遺構完掘状況（東より）  
SX-01・SD-18 土層断面（南より）  
P103 石斧出土状況（東より）
- 図版13 SI-01 出土遺物  
SI-02 出土遺物  
SK-09 出土遺物  
SK-11 出土遺物  
SK-12 出土遺物  
SK-20 出土遺物
- 図版14 SK-21 出土遺物  
SK-24 出土遺物  
SK-25 出土遺物  
SK-37 出土遺物  
SD-01 出土遺物
- 図版15 SD-02 出土遺物  
SD-13 出土遺物  
SD-15 出土遺物  
SD-18 出土遺物  
SD-20 出土遺物  
SS-01 出土遺物  
SS-02 出土遺物
- 図版16 窯状遺構出土遺物  
P103 出土遺物  
遺構外出土遺物（1）
- 図版17 遺構外出土遺物（2）
- 図版18 遺構外出土遺物（3）

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 発掘調査に至る経緯

鳥取県では住民の生活環境の向上のため順次道路改良工事を行っているが、その一環として主要地方道溝口伯太線の道路改築工事が実施されることになった。このうち、西伯郡会見町鶴田地域周辺には、会見町の越敷山遺跡や鶴田合清水遺跡などの遺跡が点在しており、道路工事に先立って予定地内の遺跡・遺構の有無を確認する必要性が生じた。

平成5～7年度にかけて会見町教育委員会によって試掘調査が実施された。その結果、いくつかのトレンチから土坑などの遺構が出土し、遺跡の存在が確認された。そこで、鳥取県土木部道路課および鳥取県米子土木事務所は、鳥取県教育委員会と協議し、財団法人鳥取県教育文化財団に発掘調査の委託をした。西部埋蔵文化財溝口伯太調査事務所が発掘調査を担当することとなり、鶴田墓ノ上遺跡・鶴田大道端遺跡・鶴田中峯山遺跡の3遺跡を調査することとなった。

## 第2節 調査の経過と方法

調査地は鶴田墓ノ上遺跡・鶴田大道端遺跡・鶴田中峯山遺跡の3遺跡である。調査は平成8年度の単年度実施である。

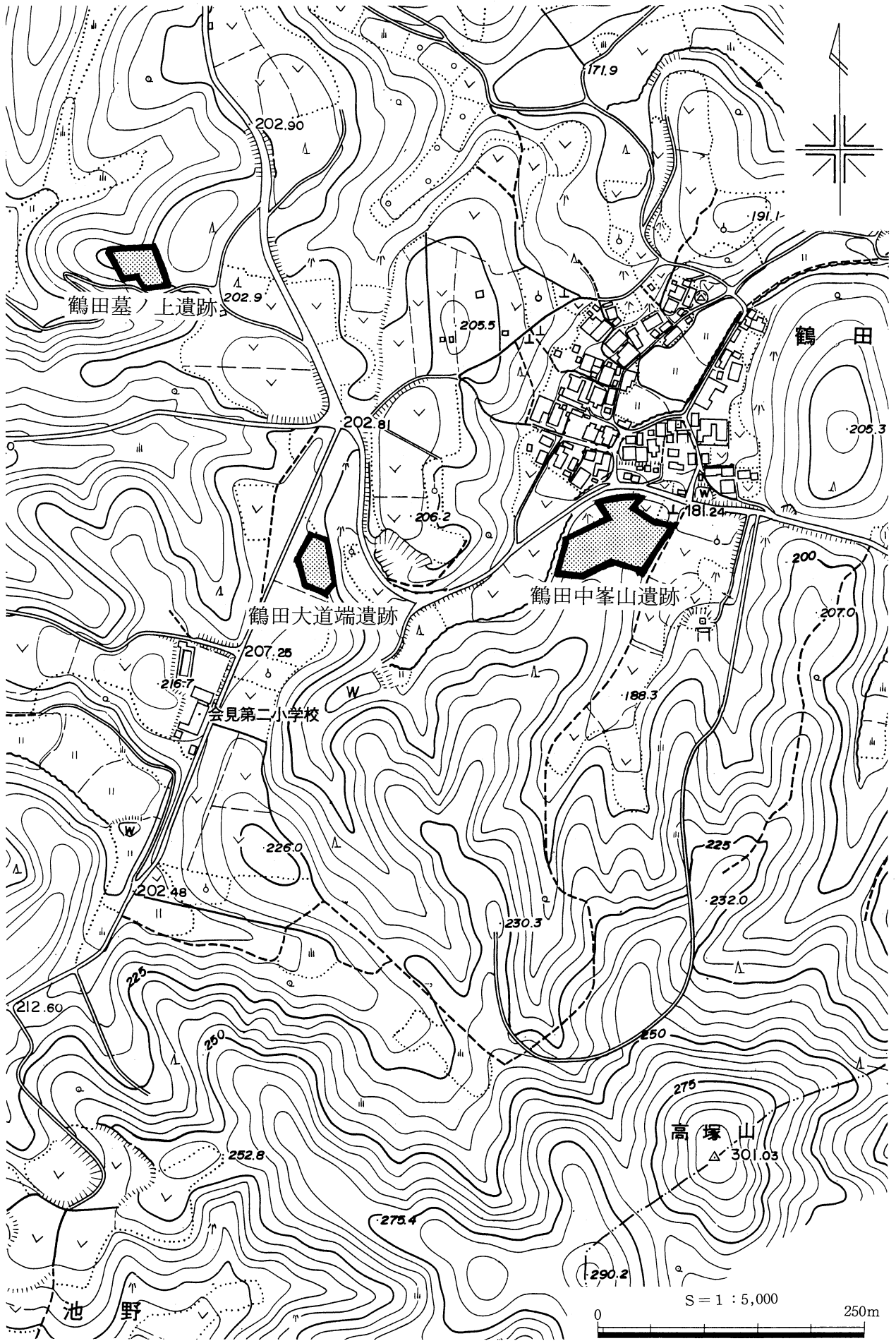
鶴田墓ノ上遺跡の調査は、調査前地形測量終了後の4月4日から重機による表土剥ぎを開始した。作業員は4月8日から稼働を開始した。表土剥ぎ終了後、国土座標第V系に対応する10mグリッドを設定するための基準杭を打った。検出した遺構は落とし穴と考えられる土坑8基である。土坑の調査では断面の観察を最優先に考え、最初に土坑の半分を掘り上げて平面図を取り、土坑の半分を破壊することになるが掘り上げ部分を掘り抜いて断面観察に十分なスペースを確保し、断面図・写真を取ったのち土坑の残り半分を完掘した。そのため、最終的な土坑完掘写真は本来の土坑の半分となったが、土坑を破壊しない調査では、不十分なものと成らざるを得ない底面ピットを含めた埋土の堆積状態について、より多くの情報を得ることが出来た。その後、調査後地形測量を実施し、調査後の全体写真を6月3日に撮影して調査を終了した。

鶴田大道端遺跡の調査は、調査前の地形測量を実施したのち、4月9日から重機による表土剥ぎを開始し、表土剥ぎ終了後、国土座標第V系に対応する10mグリッドを設定するための基準杭を打った。作業員は4月18日から稼働を開始した。検出した遺構は掘立柱建物跡2棟と土坑4基と溝状遺構1条およびピットである。その後、調査後地形測量を実施し、調査後の全体写真を6月3日に撮影して、調査を終了した。

鶴田中峯山遺跡の調査は、調査前の地形測量を実施したのち、5月13日から調査地の境界部分に沿って土層確認を目的としてトレンチを設定して掘り下げを開始した。5月17日からは重機による表土剥ぎも開始し、表土剥ぎ終了後には国土座標第V系に対応する10mグリッドを設定した。検出した遺構は建て替えの認められる竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡3棟、土坑・土壙墓37基、溝状遺構25条、段状遺構2基、窯状遺構1基、集石遺構1、ピットである。

調査地の全体写真は9月3日にラジコンヘリコプターを使用して撮影し、9月27日には、地元の方々を対象に現地見学会を実施した。

調査は、10月1日に鳥取大学医学部の井上貴央教授にお願いしてSK-36で出土した人骨の取り上げを実施し、全ての調査を終了した。



挿図1 調査地位置図



### 第3節 調査体制

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	田 淵 康 允 (鳥取県教育長)
常務理事	森 田 哲 彦 (鳥取県教育次長)
事務局長	岩 本 武 夫

財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター

所 長	宮 谷 正 信 (鳥取県教育委員会文化課長)
次 長	八木谷 昇
調整係長	久 保 穰二郎 (鳥取県埋蔵文化財センター調査指導係長)
調 査 員	亀 井 照 人
	小 谷 修 一
庶務係主任事務職員	矢 部 美 恵
主任事務職員	橋 崎 康 春

○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財溝口伯太調査事務所

所 長	後 藤 篤 治
主任調査員	西 川 徹
調 査 員	宮 石 雄 士
整 理 員	杉 田 千 津 子

○調査指導 鳥取県教育委員会文化課 鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力 会見町教育委員会 会見町鶴田部落

主な発掘作業従事者 (敬称略、五十音順)

秋里 登志子	安藤 伸一	生田 忠徳	入江 龍三	入沢 沢子	遠藤 傳
木下 恒代	小谷 敏子	澤田 昭義	澤田 末子	柴田 才知	杉原 功
妹尾 貴美江	田中 重子	田邊 藤一	西脇 りよ	野口 勝子	野口 キヨノ
野口 辰枝	野口 文恵	野口 ほなみ	野口 百合子	秦 美香	東 都枝
千村 澄子	松下 和枝	三上 興蔵	山崎 博	山下 操	山科 牧子
山中 敏朗					

整理作業従事者 (敬称略、五十音順)

表 明美	清水 房子	厨子 彰子	南條 孝子
------	-------	-------	-------

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

#### 鳥取県

鳥取県は、本州の西部、中国地方の北東部に位置する。東は兵庫県、西は島根県、南は岡山県・広島県とそれぞれ接し、北は日本海に面している。中国地方は、標高1200mを越える山々を擁する中国山地を隔てて、瀬戸内海に面する山陽地方と、日本海に面する山陰地方に分けられ、特に冬季の気候環境に大きな違いがみられる。晴れの日が多く雪のほとんど降らない山陽地方に対し、山陰地方では、どんよりとした曇り空が続き雪がかなり積もる。鳥取県は、このような山陰地方に属している。

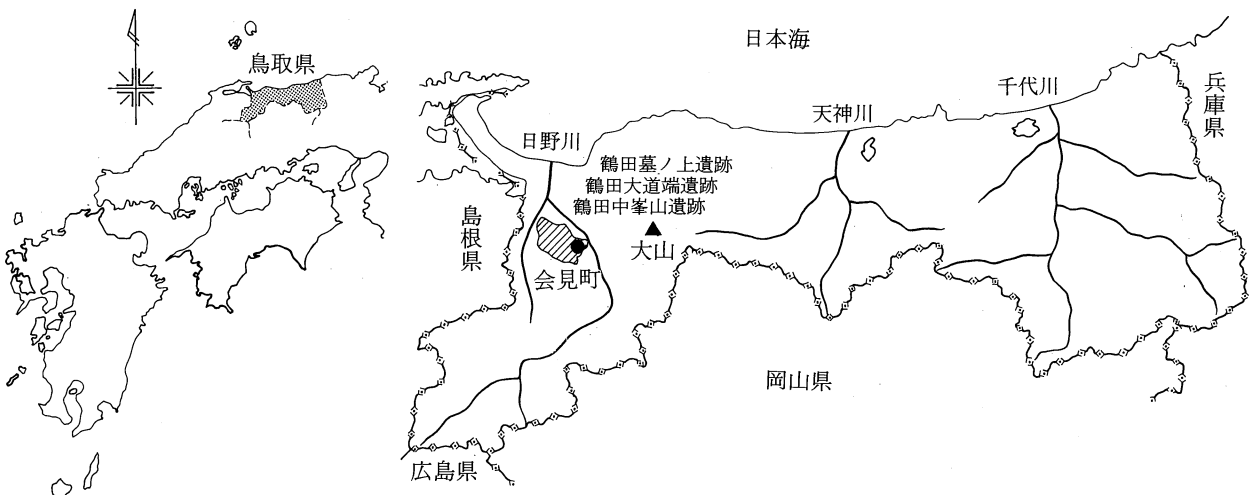
鳥取県の県域は、東西126km、南北61.85km、面積3,506.96km<sup>2</sup>で、日本全体の約1%を占める。県内は、鳥取市周辺を中心とする東部地域、倉吉市周辺を中心とする中部地域、米子市・境港市周辺を中心とする西部地域に大きく分けられる。各地域とも地勢は山がちであり、山地が県総面積の86.3%を占める。それぞれの地域には、県下を代表する三大河川である千代川（東部）、天神川（中部）、日野川（西部）が流れ、その下流域には、鳥取平野（東部）、倉吉・北条・羽合平野（中部）、米子平野（西部）が発達している。各平野の海岸線には、全国的にも有名な鳥取砂丘をはじめとして、河川によって運ばれた多量の砂により大小の砂丘・砂州が発達している。

人々の生活領域は、山間の谷奥平野と海岸に開けた沖積平野に展開している。鳥取平野には、江戸時代に鳥取池田藩三十二万五千石の城下町として発展し、現在県庁所在地である鳥取市が位置する。天神川中流域には、かつての律令時代には「伯耆国」の国府が置かれていた倉吉市が位置している。米子平野には、「山陰の商都」と呼ばれ商業の町として発展してきた米子市が位置し、現在も交通の要所として発展している。米子市の北西に延びる弓が浜半島の突端部には、国内有数の漁業基地である境港市が位置している。

現在鳥取県は、前述した4市を中心として39市町村により構成されている。人口は、615,408人（平成8年12月1日現在）と47都道府県で最少であるが、自然の多い美しい景観を残している。

#### 会見町

会見町は、鳥取県の最西端にある西伯郡の西部に位置し、東は岸本町、西は西伯町、南は日野郡溝口町、北は米子市に接している。東・西・南の三方を、手間山・滝谷山・栗津山・高塚山・越敷山などの標高200~300m級の低い山地に囲まれ、傾斜が緩やかな東部は果樹園や畑地が多い。南部の山々を源とする小松谷川や同川支流



挿図2 遺跡位置図

の朝鍋川が町の中央部を北流して沖積平野を形成し、おもに水田として利用されている。現在当町の基幹産業は農業であり、特に富有柿は富有の里として町の名を県内外に知らしめている。そして商工業の振興策がはかられてきていると同時に、岸本町・溝口町にまたがる南東部の県営フラワーパーク（平成11年開園予定）を核とした観光振興策がはかられ、それに伴い道路整備が急がれている。現在主要道路は町内北部で交錯しているが、道路整備完了後にはさらに周辺市町村との交通の利便性は高まるであろう。そして諸木・天万地区には住宅用地が造成されており、さらに米子市近郊の住宅地区としての役割を果たしていくことが期待されている。同町は、面積30.95km<sup>2</sup>、人口は4,062人（平成9年1月1日現在）である。

## 調査地域

調査地域は、県道溝口伯太線沿いの会見町と溝口町の町境付近の高塚山北東麓で、日野川左岸の台地上に位置している。

鶴田墓ノ上遺跡は標高200m付近に、鶴田大道端遺跡は標高200m付近に、鶴田中峯山遺跡は標高190m付近に位置する。

## 第2節 歴史的環境

**旧石器時代** 会見町域に限らず、鳥取県内には旧石器時代の遺構とされるものは確認されていないが、大山山麓一帯を中心としていくつかの旧石器が発見されている。淀江町小波出土の東山・杉久保型系統の黒曜石製ナイフ型石器、米子市泉中峰遺跡出土の玉髓製ナイフ型石器、溝口町長山馬籠遺跡(65)出土の細石刃様の石器などが発見されている。旧石器時代～縄文時代草創期とされる有舌尖頭器は、黒曜石製のものが淀江町中西尾から、サヌカイト製のものが米子市奈喜良遺跡・会見町諸木遺跡(2)・岸本町貝田原遺跡(52)・江府町山神脇遺跡などでも発見されている。

**縄文時代** 鳥取県内から草創期の土器は発見されていない。しかし、大山山麓の縁辺部で有舌尖頭器が出土していることを考えると、今後この時代の遺構・遺物が大山山麓を中心に発見される可能性は高い。

早期になると大山山麓を中心に押型文土器を伴う遺跡が発見されている。米子市の上福万遺跡では多くの土坑や配石墓と考えられる集石が発見されている。土器や石器も多く出土しており、早期の拠点的な遺跡となっている。尾高御建山遺跡や泉前田遺跡からも若干の押型文土器が出土している。また、溝口町の井後草里遺跡では県内では珍しい燃糸文を施した尖り底の深鉢が出土した。

前期になると遺跡も増えてくる。前期から中期を中心とする米子市の目久美遺跡からはドングリを蓄えた多くの貯蔵穴が検出されている。溝口町の長山馬籠遺跡(65)では多くの土坑や集石とともに県内では出土例の少ない竪穴住居跡が検出されており、近接する下山南通遺跡(61)からも土坑や集石が見つかった。

中期の遺跡としては岸本町の林ヶ原遺跡(56)で遺体を土器片で覆った土壇墓が見つかった。

後・晩期になると再び遺跡の数も増えてくる。会見町では田住地区の圃場整備に際して晩期の土器に伴って山陰地方で唯一の人面土器が出土しており、口朝金遺跡(14)では多くの後・晩期の土器とともに完形に近い注口土器が出土している。溝口町では井後草里遺跡から貯蔵穴や炉跡が見つかった。調査地の周辺地域では、溝口町の宇代横平遺跡(77)で貯蔵穴が検出され、三部野遺跡(79)では突帯文土器が出土している。また、この時期の狩猟用の落とし穴と考えられている土坑が青木遺跡・越敷山遺跡群(13)をはじめ小町第1遺跡(44)・田住松尾平遺跡(10)・鶴田荒神ノ峯遺跡(25)等の丘陵上の遺跡で数多く検出されている。



弥生時代 弥生時代になると遺跡の数も多くなる。

前期の遺跡には、米子市の目久美遺跡や会見町の諸木遺跡(2)・口朝金遺跡(14)が挙げられる。目久美遺跡は前期から中期にかけての低湿地遺跡であり、3層の水田跡と多くの木製農具が見つかった。口朝金遺跡(14)でも水田跡が検出され、その構造が近年までの谷間水田と同じであったことが注目される。諸木遺跡(2)では全体が明らかではないが幅1～2mの溝による環濠らしき遺構が検出された。またこの時期の環濠は天王原遺跡(18)・宮尾遺跡でも検出されている。

中期には米子市の青木遺跡や福市遺跡、会見町の天王原遺跡(18)・越敷山遺跡群(13)、岸本町の貝田原遺跡(52)・林ヶ原遺跡(56)、溝口町の下山南通遺跡(61)・長山馬籠遺跡(65)などが現れる。青木遺跡・福市遺跡は後期以降も続く大規模集落である。天王原遺跡(18)や越敷山遺跡群(13)では多くの竪穴住居跡や土坑が見つかった。貝田原遺跡(52)・林ヶ原遺跡(56)・下山南通遺跡(61)・長山馬籠遺跡(65)などでも数棟から十数棟の竪穴住居跡などが検出されている。会見町にはこのほかにも宮前遺跡(3)・浅井土居敷遺跡(4)・鶴田合清水遺跡(28)などの集落遺跡がある。

後期には米子市の池ノ内遺跡・尾高浅山遺跡・日下寺山遺跡などがある。池ノ内遺跡からは古墳時代後期までの5面の水田層が検出された。尾高浅山遺跡は一部に三重の環濠がめぐる集落と四隅突出型墳丘墓が近接して存在する遺跡である。また日下寺山遺跡でも、環濠をもつ集落と四隅突出型墳丘墓を含む弥生から古墳時代の墳墓群が近接している。会見町でも朝金小チャ遺跡(16)で四隅突出型墳丘墓と考えられる遺構が検出されている。

古墳時代 会見町域における前期古墳の様相は明確でない。

前期古墳としては会見町の普段寺1・2号墳が特筆される。普段寺1号墳は墳長約23mの小型の前方後方墳である。正式な調査は行われていないが三角縁唐草文帯二神二獣鏡が出土したことが知られている。また、1辺約21mの方墳である普段寺2号墳からも三角縁四神四獣鏡が出土しており、両古墳とも規模はあまり大きくないが、その被葬者は西伯耆において大きな勢力を持った首長であった事がわかる。

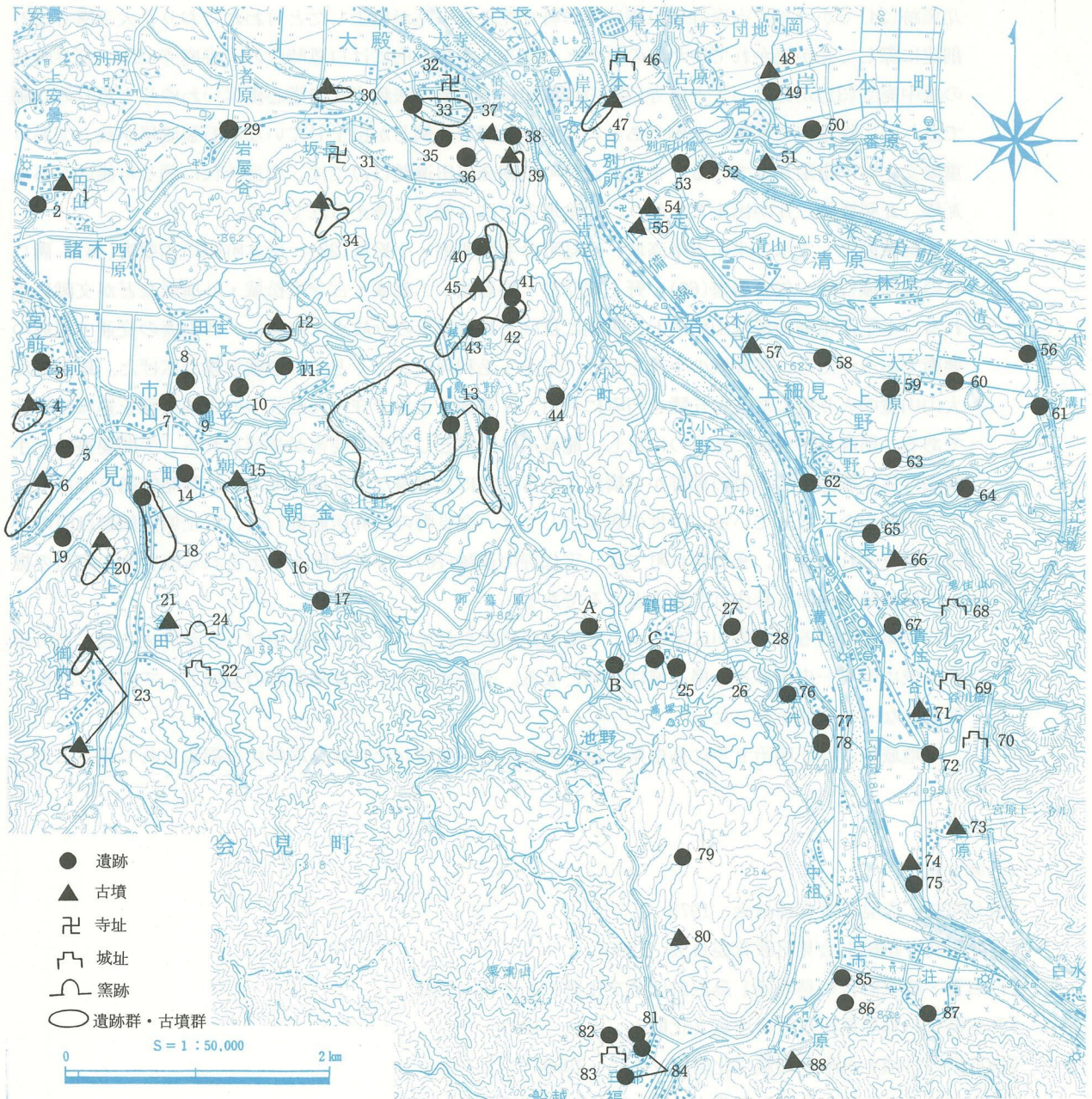
中期になると会見町では三崎殿山古墳・後塔山古墳(1)・浅井11号墳(4)などが、岸本町では吉定1号墳(55)などが築造される。三崎殿山古墳は全長約108mを測り、県下でも屈指の規模を誇る前方後円墳である。埋葬主体などは不明であるが円筒埴輪が採集されている。後塔山古墳(1)は全長約55mの前方後円墳である。埋葬主体などは不明であるが円筒埴輪や2個体の人物埴輪などが出土している。浅井11号墳(4)は全長約40mの前方後円墳であり、後円部から画文帯環状乳四神四獣鏡が出土している。吉定1号墳(55)は径約10mの円墳である。左片袖式の横穴式石室は割石小口積みであり、横穴式石室受容期を考えると重要な古墳である。

後期になると多くの群集墳が形成される。会見町の朝金古墳群(15)・井上古墳群(20)・田住古墳群(12)・高姫古墳群(6)・御内谷古墳群(23)・金田古墳群(21)、岸本町の長者原古墳群(30)・坂長古墳群(34)・越敷山古墳群(45)・岸本古墳群(47)、溝口町の宮原神社古墳群(74)・長山古墳群(66)などである。これらの古墳群に属する古墳は径が10m前後の小規模なものがほとんどであり、6～7世紀にかけて築造されたと考えられる。

歴史時代 律令制の施行によって、現在の鳥取県域は西側の伯耆国と東側の因幡国という2つの国に編成される。伯耆国は6郡よりなるが、現在の会見町域は会見郡に該当する。会見郡衙は、圍場整備に伴って調査が行われ大型の掘立柱建物群と炭化米が見つかった岸本町の長者屋敷遺跡(29)であろうと考えられている。

白鳳時代になると寺院の建立が始まる。会見町内でこの時期の寺院跡は見つかっていないが、金田





- |             |                |             |             |
|-------------|----------------|-------------|-------------|
| A. 鶴田墓ノ上遺跡  | 21. 金田古墳群      | 44. 小町第1遺跡  | 67. 長山第2遺跡  |
| B. 鶴田大道端遺跡  | 22. 小松城        | 45. 越敷山古墳群  | 68. 鬼住山城    |
| C. 鶴田中峯山遺跡  | 23. 御内谷古墳群     | 46. 岸本要害    | 69. 矢倉要害    |
| 1. 後峪山古墳    | 24. 金田瓦窯跡      | 47. 岸本古墳群   | 70. 谷川城     |
| 2. 諸木遺跡     | 25. 鶴田荒神ノ峯遺跡   | 48. 長塚原古墳群  | 71. 谷川屋敷古墳  |
| 3. 宮前遺跡     | 26. 鶴田堤ヶ谷遺跡    | 49. 久古北田山遺跡 | 72. 谷川遺跡    |
| 4. 浅井古墳群    | 27. 鶴田東山遺跡     | 50. 番原第1遺跡  | 73. 宮原屋敷古墳  |
| 5. 浅井土居敷遺跡  | 28. 鶴田合清水遺跡    | 51. 久古墳群    | 74. 宮原神社古墳群 |
| 6. 高姫古墳群    | 29. 長者屋敷遺跡     | 52. 貝田原遺跡   | 75. 宮原遺跡    |
| 7. 田住第8遺跡   | 30. 長者原古墳群     | 53. 久古第3遺跡  | 76. 宇代寺中遺跡  |
| 8. 田住桶川遺跡   | 31. 坂中廃寺       | 54. 口別所古墳群  | 77. 宇代横平遺跡  |
| 9. 朝金第2遺跡   | 32. 大寺廃寺       | 55. 吉定古墳群   | 78. 代遺跡     |
| 10. 田住松尾平遺跡 | 33. 越敷ヶ丘遺跡     | 56. 林ヶ原遺跡   | 79. 三部野遺跡   |
| 11. 田住滝山遺跡  | 34. 坂長古墳群      | 57. 大平古墳群   | 80. 中ノ平古墳群  |
| 12. 田住古墳群   | 35. 坂長宮田ノ上遺跡   | 58. 大平ル原遺跡  | 81. 中山遺跡    |
| 13. 越敷山遺跡群  | 36. 坂長第5遺跡     | 59. 大平原第1遺跡 | 82. 長龍寺谷遺跡  |
| 14. 口朝金遺跡   | 37. 大寺原古墳群     | 60. 大平原第2遺跡 | 83. 野上城     |
| 15. 朝金古墳群   | 38. 越敷野原遺跡     | 61. 下山南通遺跡  | 84. 三部道の下遺跡 |
| 16. 朝金小チャ遺跡 | 39. 越敷野原古墳群    | 62. 上野貝塚遺跡  | 85. 下大奈瀬遺跡  |
| 17. 朝金天田遺跡  | 40. 坂長佛谷遺跡     | 63. 竹原遺跡    | 86. 海蔵寺遺跡   |
| 18. 天王原遺跡   | 41. 小町越敷野原第2遺跡 | 64. 川平遺跡    | 87. 長瀬の前遺跡  |
| 19. 高姫根小松遺跡 | 42. 小町越敷野原第1遺跡 | 65. 長山馬籠遺跡  | 88. 父原古墳群   |
| 20. 井上古墳群   | 43. 小町石橋ノ上遺跡   | 66. 長山古墳群   |             |

挿図3 周辺遺跡分布図



瓦窯跡(24)でかつて大寺廃寺(32)創建時の軒丸瓦と軒平瓦が出土したと言われており、大寺廃寺(32)創建に際して瓦が焼かれていたものと考えられる。岸本町内には白鳳時代の大寺廃寺(32)、奈良時代の坂中廃寺(31)がある。大寺廃寺(32)の伽藍配置は変形の法起寺式で塔心礎はいわゆる三重孔の心礎であり、山陰地方では唯一の例である。なお、全国で2例しか出土していない石製鴟尾が残っており重要文化財に指定されている。また、会見町の朝金天田遺跡(17)では、奈良時代に遡る可能性がある瓦塔(瓦製塔婆)片が出土しており、山陰地方では2例目と考えられている。

中世城館としては、米子市尾高城、会見町の手間要害・小松城(22)、岸本町の岸本要害(46)、溝口町の谷川城(70)・矢倉要害(69)・野上城(83)・福島城・二部城・古寺生松城・外構城などが文献に現れる。米子市尾高地域は山陰道と山陽側に抜ける日野道との分岐点に位置し、西伯者の交通・流通の要衝であったため、尾高城の争奪をかけて尼子・毛利両氏がいくどもの激戦を繰り広げた。尾高城は大山山麓の入り組んだ谷と丘陵を巧みに利用し、空堀と土塁で守られた8つの主要な郭を連ねる構造である。尾高城が里城であるのに対し、籠城用の山城として手間要害が挙げられる。手間要害は、手間山全体に展開する複数の郭群から構成される非常に大規模な中世城郭であり、戦略的拠点であったことが明らかになっている。中世の居館としては、会見町の浅井居館群(5)、天王原居館群(18)の一端が調査されており、また溝口町では、宇代寺中遺跡(76)で中世段階と考えられる庇付きの大型の掘立柱建物跡が検出され注目される場所である。

江戸時代になると、吉川広家によって築城が始められていた米子城を中村一忠が完成させ、1601年米子城に中村一忠が移ると尾高城は廃城となる。その後、米子城は鳥取藩の支城として存続したが、明治になって廃城となった。

本地域周辺は、明治9年に鳥根県に編入されたが、明治14年には鳥取県に再編入されて現在に至っている。

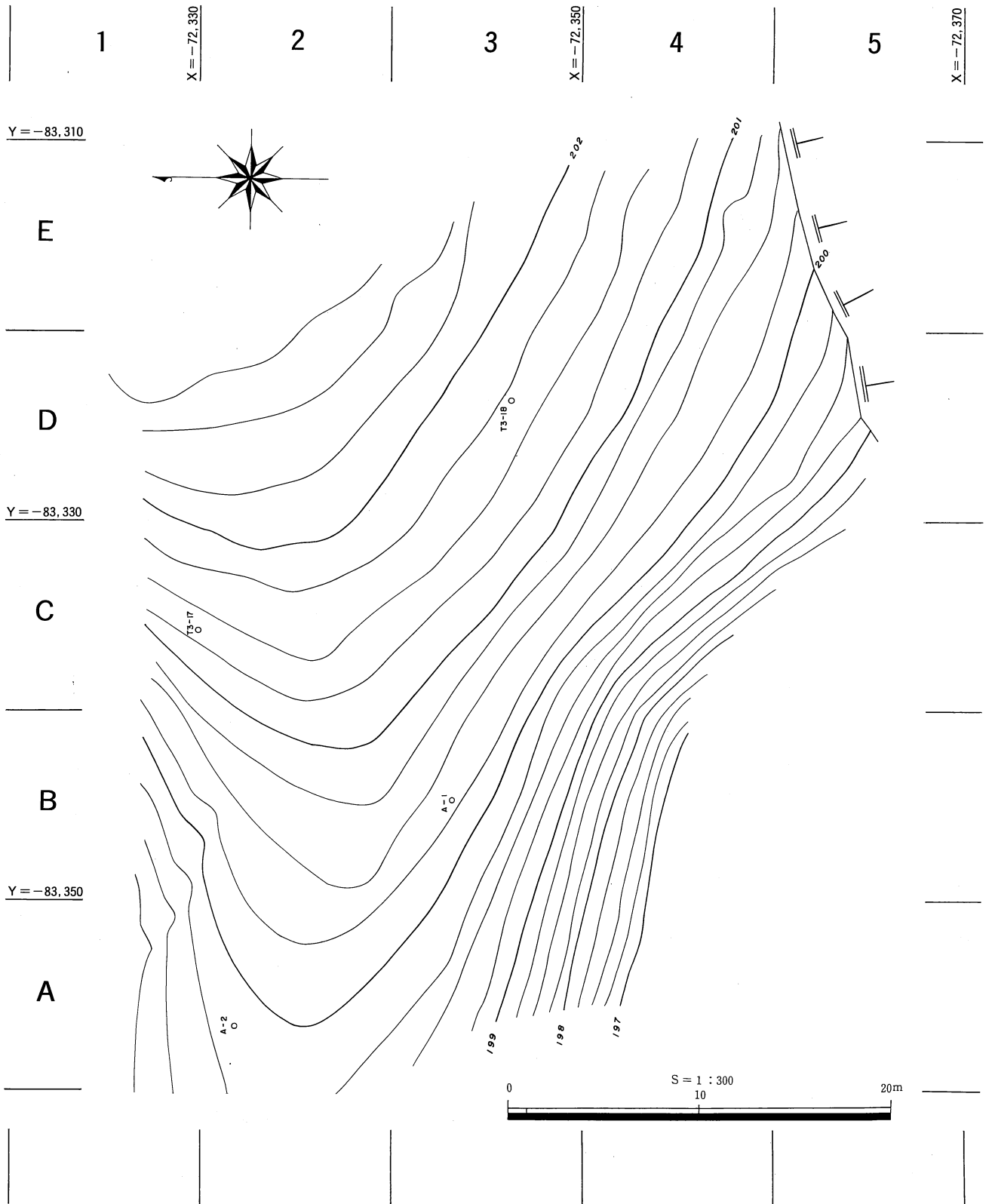
#### (参考文献)

- 『会見町誌』会見町教育委員会 1973
- 『会見町誌 続編』会見町教育委員会 1995
- 『旧石器・縄文時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター 1988
- 『弥生時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター 1987
- 『鳥取県の古墳』鳥取県埋蔵文化財センター 1986
- 『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター 1989
- 『下山南通遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団 1986
- 『鶴田東山遺跡・鶴田合清水遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団 1995
- 『鶴田荒神ノ峯遺跡・鶴田堤ヶ谷遺跡・宇代横平遺跡・宇代寺中遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団 1996
- 『小町第1遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団 1996
- 『口朝金遺跡』会見町教育委員会 1988
- 『手間要害発掘調査報告書Ⅱ』会見町教育委員会 1991
- 『天王原遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1993
- 『越敷山遺跡群1～3』会見町教育委員会・岸本町教育委員会 1992・1994
- 『田住松尾平遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1996
- 『朝金天田遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1996
- 『長山馬籠遺跡』溝口町教育委員会 1989
- 『三部野遺跡発掘調査報告書』溝口町教育委員会 1990
- 『代遺跡』溝口町教育委員会 1993



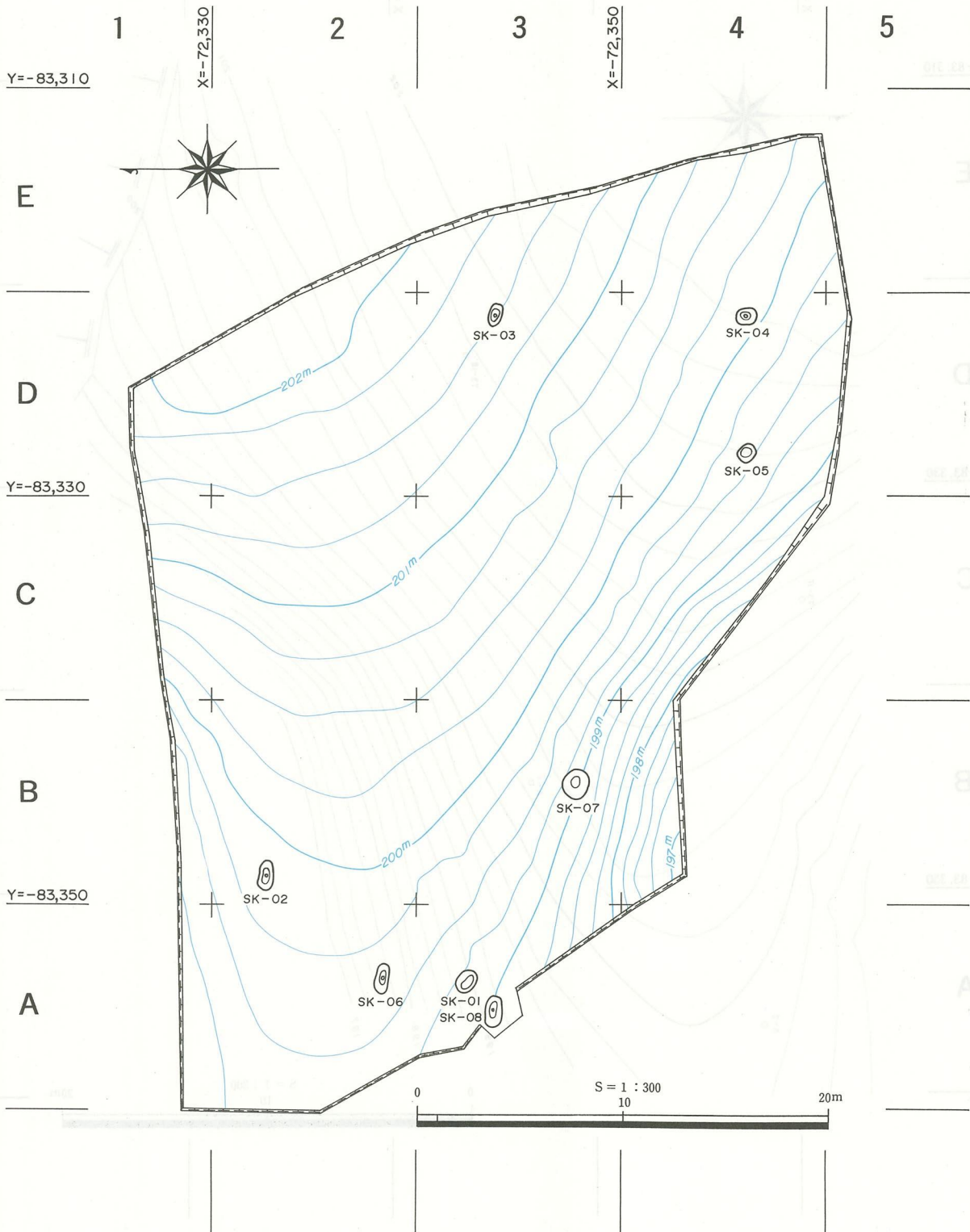
# 鶴田墓ノ上遺跡

### 第3章 鶴田墓ノ上遺跡の調査



挿図4 鶴田墓ノ上遺跡調査前地形測量図

鶴田墓ノ上遺跡は、平野部に向けて急な崖となる標高190m前後の台地状地形の西端付近にあたり、浸食によって形成された尾根状地形の頂部に位置する。検出した遺構は、縄文時代の落とし穴と考えられる土坑8基である。ここでは、各遺構について調査の結果を述べる。



挿図5 鶴田墓ノ上遺跡全体遺構図

# 第1節 土坑

## SK-01 (挿図6 図版1)

**位置** 土坑は調査地の西端近く、A-3グリッド北寄りの標高199.2m付近に位置する。

土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が北側に斜交する。

本遺構の北側約4mにSK-06、南西側約1mにSK-08が位置する。

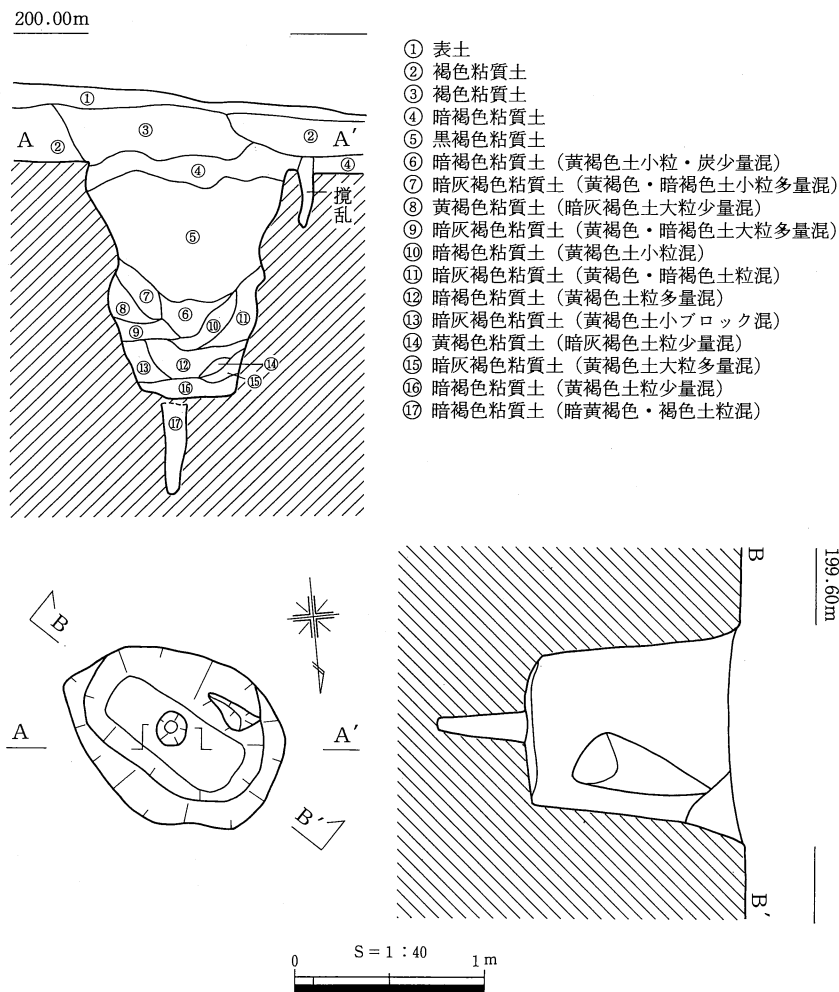
本遺構は平成7年度に会見町教育委員会が行なった試掘調査におけるトレンチ26から検出された土坑(SK-01)と同じ土坑である。

**形態** 会見町教育委員会が実施した試掘調査においては、土坑を半截掘り下げして底面・底面ピットまで検出したように報告されている(会見町報告書 挿図8)。しかし、調査の結果掘り下げは不十分であることが判明した。

平面形は検出面が楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。しかし、検出面は埋土中に地山土が多く認められることから土坑肩部の土が崩落したため楕円形状になったのであり、本来の平面形は隅丸長方形を呈していたと考えられる。規模は、検出面で長軸1.18m×0.93m、短軸0.78m×0.30m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.25mを測る。

底面の中央からピットを検出した。その規模は検出面で長軸0.18m×短軸0.16m、深さ0.47mを測る。

**埋土** 土坑の埋土を④~⑰層の14層に分層した。このうち、⑥層以下は地山土の粒を多少とも含む層であり、



挿図6 SK-01遺構図

特に⑧層は地山土が崩落したと考えられる層である。

埋土に杭痕跡を認めることは出来なかった。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落し穴と考える。

時期 遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑のなかで遺物等から時期の判明した土坑は縄文時代後・晩期に位置付けられていること<sup>註(2)</sup>から、同様に縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

註

(1) 「主要地方道溝口伯太線付け替え工事に伴う発掘調査」『町内遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1996

(2) 稲田孝司「西日本の縄文時代落し穴猟」『論苑考古学』1993

尾高御建山遺跡のSK-39・77内出土の炭化物の炭素14年代測定結果では縄文時代後期後半に相当する値が得られている。

山田 治「尾高御建山遺跡2区の液体シンチレーションC14年代測定結果」

山田 治「尾高御建山遺跡3区の液体シンチレーションC14年代測定結果」

『尾高御建山遺跡 尾高古墳群』財団法人鳥取県教育文化財団 1994

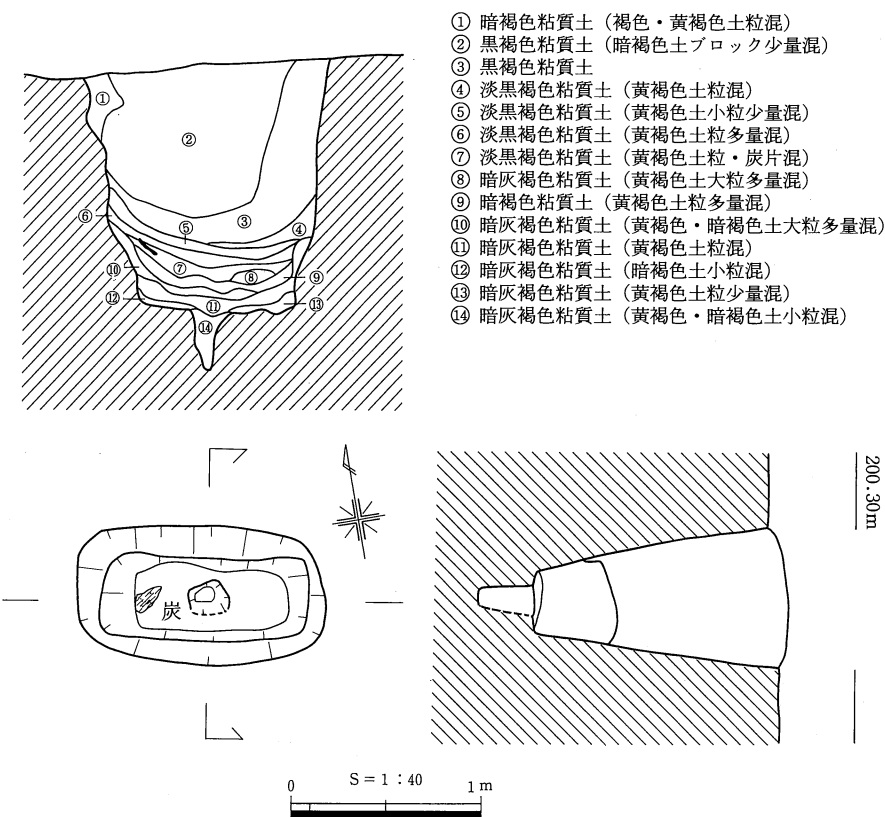
### SK-02 (挿図7)

位置 土坑は調査地北西側、B-2グリッド北西寄りの標高199.9m付近に位置する。

土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の南西側約7mにSK-06が位置する。

200.30m



挿図7 SK-02遺構図

形態 平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸1.32m×短軸0.75m、底面で長軸0.87m×短軸0.33mで、短軸側はかなり狭い。残存する部分での底面までの最大の深さは1.36mを測る。

底面の中央からピットを検出した。残存部の平面形はいびつな楕円形状で、その規模は検出面で長軸0.21m×残存短軸0.13m、深さ0.31mを測る。

埋土 埋土を14層に分層した。このうち、底面ピット埋土の⑭層を除く13層は上・中・下の3つのブロックに大別出来る。上層ブロックは②・③層からなり、「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土で地山土の粒をほとんど含まない。中層ブロックには淡黒褐色系の土に地山土の粒が若干混じる。下層ブロックは暗灰褐色系の土に地山土の粒が大きめのものも含め多量に混じるものである。各ブロック間の地山土粒の多寡は土坑壁面からの崩落量に由来すると考えてよく、土坑掘り上げ直後は乾燥が始まるのに伴い崩落量が多く、乾燥が進行し壁面が安定するに伴い崩落量は減少していくと考えられる。よって、各ブロック間の堆積にはブロック内での堆積に比較して大きな時間差が存在したことが考えられる。

⑦層中から樹皮状の炭化物が出土した。

埋土に杭痕跡を認めることは出来なかった。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落とし穴と考える。

時期 遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落とし穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

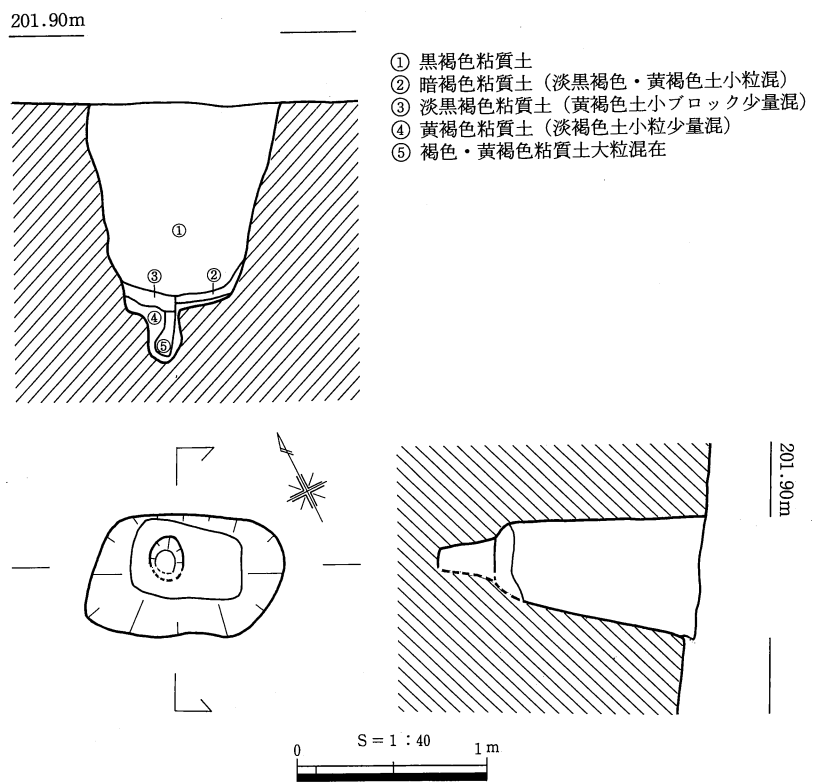
#### SK-03 (挿図8 図版1)

位置 土坑は調査地東側、D-3グリッド東寄りの標高201.5m付近に位置する。土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。本遺構の南側約12mにSK-04が位置する。

形態 平面形は、検出面・底面とも隅丸長方形を呈するが、検出面ではややいびつになっている。断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸0.97m×短軸0.65m、底面で長軸0.55m×短軸0.40m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.11mを測る。

底面の西寄りからピットを検出した。残存部の平面形は円形状で、その規模は検出面で長軸0.18m×残存短軸0.17m、深さ0.31mを測る。

埋土 埋土を5層に分層した。このうち、底面ピットの埋土を除く①～③層は大きく①層と②・③層に区別できるが、②・③層を合わせてもその土量



挿図8 SK-03遺構図

はわずかで、含まれる地山土の粒の量も多くなく、その違いは小さい。よって、両者にSK-02で考えた時間差の存在を考えるのは難しいであろう。

埋土に杭痕跡が認められた。⑤層が杭の痕跡を示すと考えられ、土坑底面にやや大きめの底面ピットを掘った後、杭を地山土とほぼ類似した④層の土によって固定したことが分かる。④層の土は土坑底面にも一部及んでおり、杭の固定を高めている。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落し穴と考える。

時期 遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

#### SK-04 (挿図9 図版1)

位置 土坑は調査地南東側、D-4グリッド東寄りの標高200.1m付近に位置する。

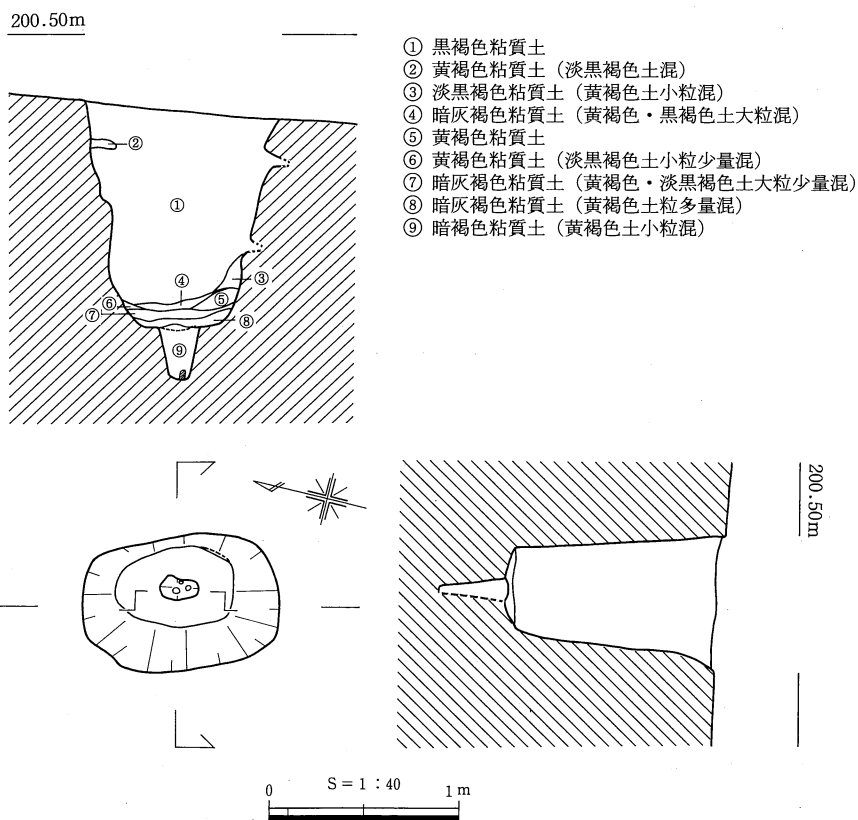
土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構の北側約12mにSK-03が位置する。

形態 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸1.03m×短軸0.71m、底面で長軸0.61m×短軸0.40m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.20mを測る。

底面の中央からピットを検出した。平面形は括れた楕円形状で、その規模は検出面で長軸0.21m×短軸0.12m、深さ0.28mを測る。

埋土 埋土を9層に分層した。このうち、底面ピット埋土の⑨層を除く8層は上・中・下の3つのブロックに大別出来る。上層ブロックは①層で「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土で地山土の粒をほとんど含まない。中層ブロックは崩落土である⑤層を含む③～⑦層で暗褐色系の土に地山土の粒が若干混じるも



挿図9 SK-04遺構図



の。下層ブロックは灰褐色系の土に地山土の粒がきわめて多量に混じるものである。各ブロック間の地山土粒の多寡は土坑壁面からの崩落量に由来すると考えられ、各ブロック間の堆積にはブロック内での堆積に比較して大きな堆積停止期間が存在したことが推測される。

底面ピット内の埋土に杭痕跡と考えられるものが認められた。土色では区別が付かなかったが、ピットの底に残る3つの窪みから続くしまりの悪い部分がやや放射状に開きながらピットの壁に沿って上方に伸びていた。これは土層確認のため断ち割った西側にさらに存在した可能性もある。これより、大きめの底面ピットを掘り下げた後に径3cm前後の3本以上の杭を放射状に設置し、⑨層の土で杭を固定したことが分かる。同様の底面ピットが田住松尾平遺跡B区SK-1・7<sup>註(1)</sup>他で報告されている。

- 遺物 遺物の出土は認められなかった。
- 性格 土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落とし穴と考える。
- 時期 遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落とし穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

註

(1) 『田住松尾平遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1996

SK-05 (挿図10 図版2)

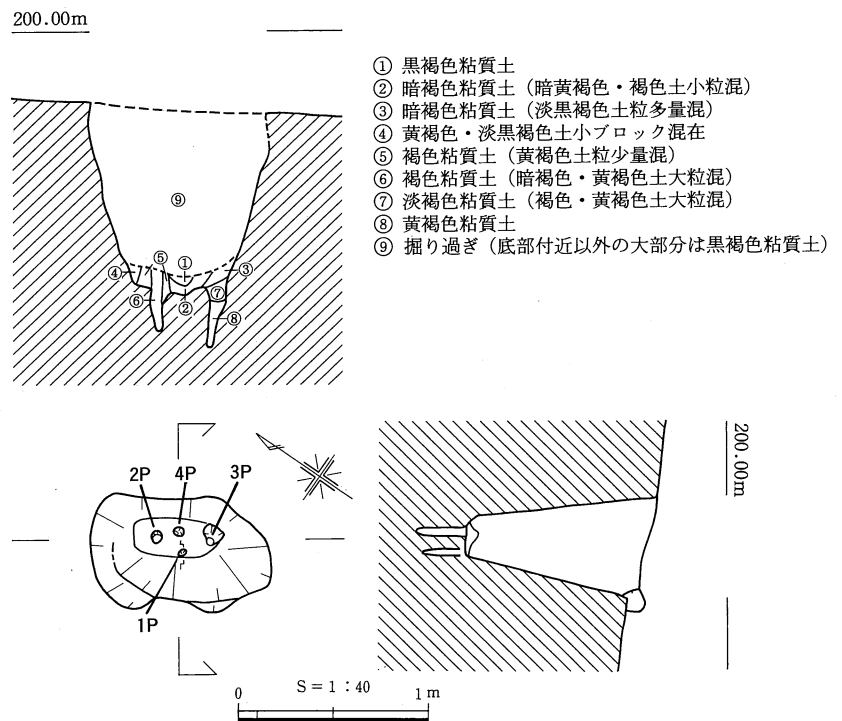
位置 土坑は調査地南東側、D-4グリッド西寄りの標高199.6m付近に位置する。  
土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が北側に斜交する。  
本遺構の東側約6mにSK-04が位置する。

形態 平面形は、検出面は不整形であるがこれは崩落によるものであり、土坑中位部分の形から本来は楕円形であったことが推測される。底面は楕円形を呈する。断面形は逆台形状である。規模は、検出面で長軸0.99m×短軸0.52mであるが、底面では長軸0.48m×短軸0.20mとかなり狭くなっている。残存する部分での底面までの最大の深さは1.03mを測る。

底面から4つのピットを検出した。第1ピット(1P)は径0.04mの円形で深さ0.21m、第2ピット(2P)は径0.06mの円形で深さ0.20m、第3ピット(3P)は長軸0.10m×短軸0.07mの楕円形状で深さ0.32m、第4ピット(4P)は径0.05mの円形で深さ0.25mを測る。

埋土 埋土を8層に分層した。⑨部分は掘り過ぎのため土色は確実ではないが、掘り下げ時の観察では底部付近を除く大部分は黒褐色粘質土であった。①層は黒褐色粘質土で⑨部分につながる可能性が強いが、②・④・⑤・⑦層は黄褐色系土の粒が目立つもので、③層は暗褐色系の強い土である。

埋土に杭痕跡が認められた。  
⑥層が第2ピットの杭痕跡を示



挿図10 SK-05遺構図

し、ピットの規模と埋土から杭を直接土坑底面に打ち込んでいることがうかがえる。⑤層は第2ピットの杭を固定するために人為的に使われた可能性が考えられる。⑦・⑧層部分が第3ピットの杭痕跡を示す。ピットの規模と埋土から杭を直接土坑底面に打ち込んでいることがうかがえる。挿図中には記載できなかったが、第1ピットの埋土は上下2層に分かれ、上層は褐色粘質土（黄褐色土大粒混）、下層は黄褐色粘質土である。やはり、杭を直接土坑底面に打ち込んでいることがうかがわれた。第4ピットの埋土については十分な土色観察が出来なかったが⑥層に類似するものであり、他のピットと同じく杭を直接土坑底面に打ち込んでいると考えられるものである。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落とし穴と考える。

時期 遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落とし穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

### SK-06 (挿図11 図版2)

位置 土坑は調査地西側、A-2グリッド南寄りの標高199.6m付近に位置する。

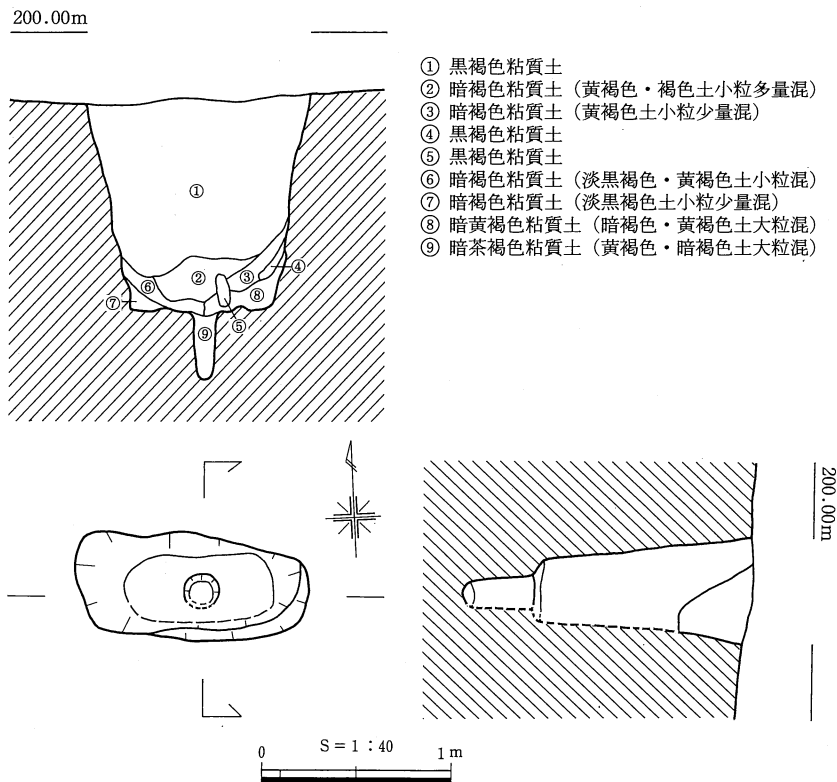
土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の南側約4mにSK-01、北東側約7mにSK-02が位置する。

形態 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈するが、検出面ではややいびつになっている。断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸1.23m×短軸0.55m、底面で長軸0.78m×短軸0.34m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.17mを測る。

底面の中央からピットを検出した。残存部の平面形は円形状で、その規模は検出面で長軸0.18m×残存短軸0.14m、深さ0.38mを測る。

埋土 埋土を9層に分層した。このうち、底面ピット埋土を除く①～⑧層は上層の①層と下層の②～⑧層に大別できる。上層の①層は「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土で地山土の黄褐色土の粒をほとんど含



挿図11 SK-06遺構図

まないもの。下層の②～⑧層は暗褐色系の土に地山土の粒が混じるものである。このうち、④・⑤層は①層と同質なもの、⑧層は黄褐色土が多量に含まれるものであり、古く堆積したもののほど黄褐色土が含まれる比率が高まる傾向が認められる。この地山土の黄褐色土粒の多寡は土坑壁面からの崩落量に由来すると考えられ、②～⑧層の堆積は比較的連続して進行したが、①層の堆積開始までにはやや時間差が存在したことが推測される。

埋土に杭痕跡を認めることは出来なかった。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落とし穴と考える。

時期 遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落とし穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

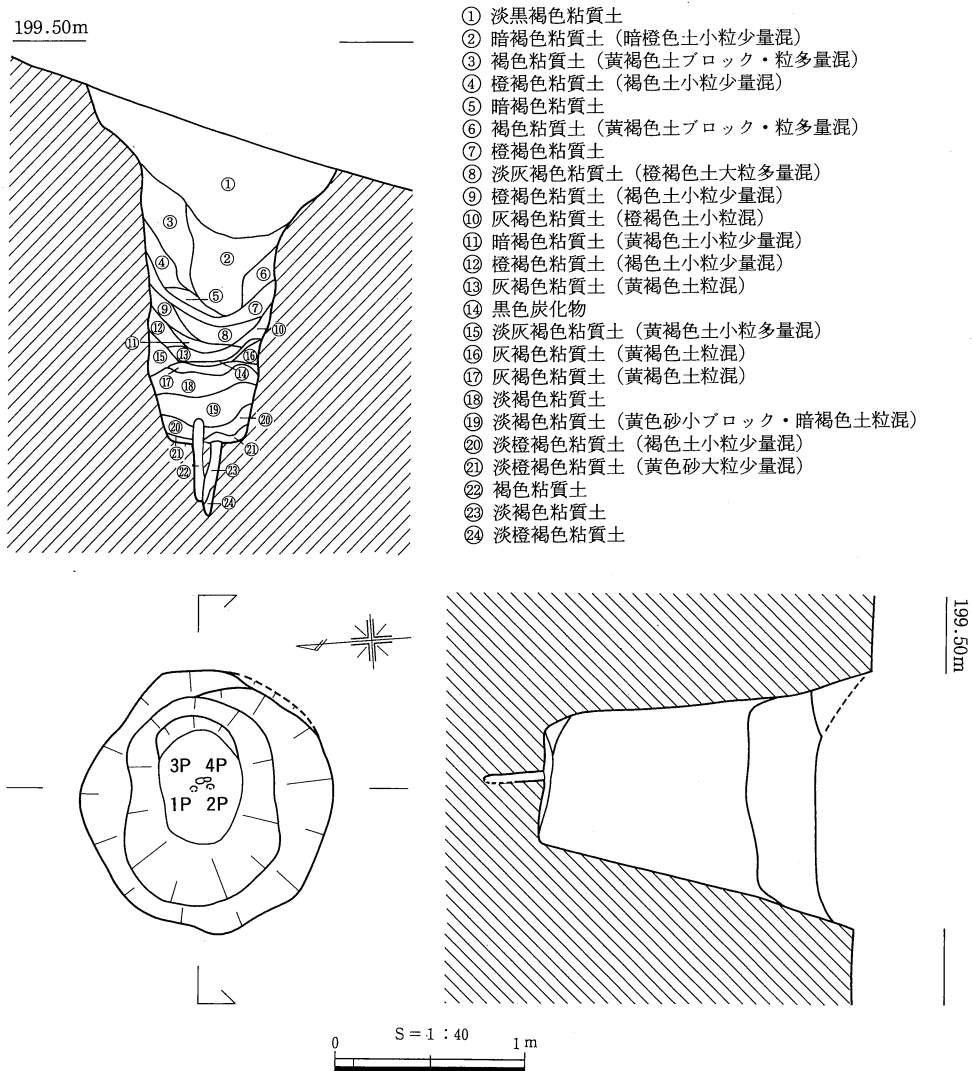
SK-07 (挿図12 図版2)

位置 土坑は調査地南西側、B-3グリッド南寄りの標高199.2m付近に位置する。

土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が北側に斜交する。

本遺構の北西側約11mにSK-01・08が位置する。

形態 平面形は、検出面は円形、底面では楕円形を呈する。検出面は土坑肩部が崩落した結果と考えられ、本来は底面形と同じ楕円形状であったと推測される。断面形は上部が開いた漏斗状である。規模は、検



挿図12 SK-07遺構図

出面で長軸1.40m×短軸1.34m、底面で長軸0.60m×短軸0.43m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.92mを測る。

底面の中央から集中する4つのピットを検出した。各ピットの平面形は楕円形状であり、その規模は第1ピット(1P)が径約0.04mで深さ0.30m、第2ピット(2P)も径約0.04mで深さ0.35m、第3ピット(3P)は径約0.04mの円形状で深さ約0.32m、第4ピット(4P)は長軸0.04m×短軸0.03mの楕円形状で深さは0.30m前後を測る。なお、底面ピット杭は土層の杭痕跡や底面ピットの軸方向から上方がやや開き気味であったと考えられる。

埋土 埋土を24層に分層した。このうち、底面ピット埋土の②～④層を除く21層は上から第1～第4の4つのブロックに大別出来る。第1ブロックは①～⑥層で「クロボク」に由来すると考えられる土が中心となるものである。第2ブロックは土坑肩部の地山崩落土と考えられる⑦～⑨層である。第3ブロックは褐色系の土に地山土の粒が混じった⑩～⑬層である。第4ブロックは第2ブロックと同じく地山土に由来すると考えられ、ほとんど褐色系の土が混じらない⑭・⑮層である。これらの各ブロックの土質の違いから土坑の堆積過程を復元するならば、土坑外からは土砂の流入がほとんどなく、壁体の剝離土・粒で第4ブロックが形成され、徐々に流入を始めた遺構外の土と壁体剝離土・粒が混ざり第3ブロックを形成した。その後、⑫層で始まっていた土坑肩部の崩落が起こり、短期間に第2ブロックが形成された。そして、④層のような小規模な崩落もあったが壁体は安定状態となり、土坑外の土の流入が進行した結果第1ブロックが形成されたと考えられる。これより、第2ブロックと第3ブロックは連続する可能性が高いが、第1ブロックと第2ブロック間・第3ブロックと第4ブロック間の堆積開始には時間的な非連続が考えられる。

埋土に杭痕跡が認められた。②層が第1ピットの杭痕跡を示し、ピットの規模と埋土から杭を直接土坑底面に打ち込んでいることがうかがえる。⑭・⑮層が第2ピットの杭痕跡を示す。ピットの規模と埋土から杭を直接土坑底面に打ち込んでいることがうかがえる。第3・第4ピットについては十分な土層・土色観察が出来なかったが、褐色系の土であり共に杭を直接土坑底面に打ち込んでいるようである。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落し穴と考える。

時期 遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

#### SK-08 (挿図13)

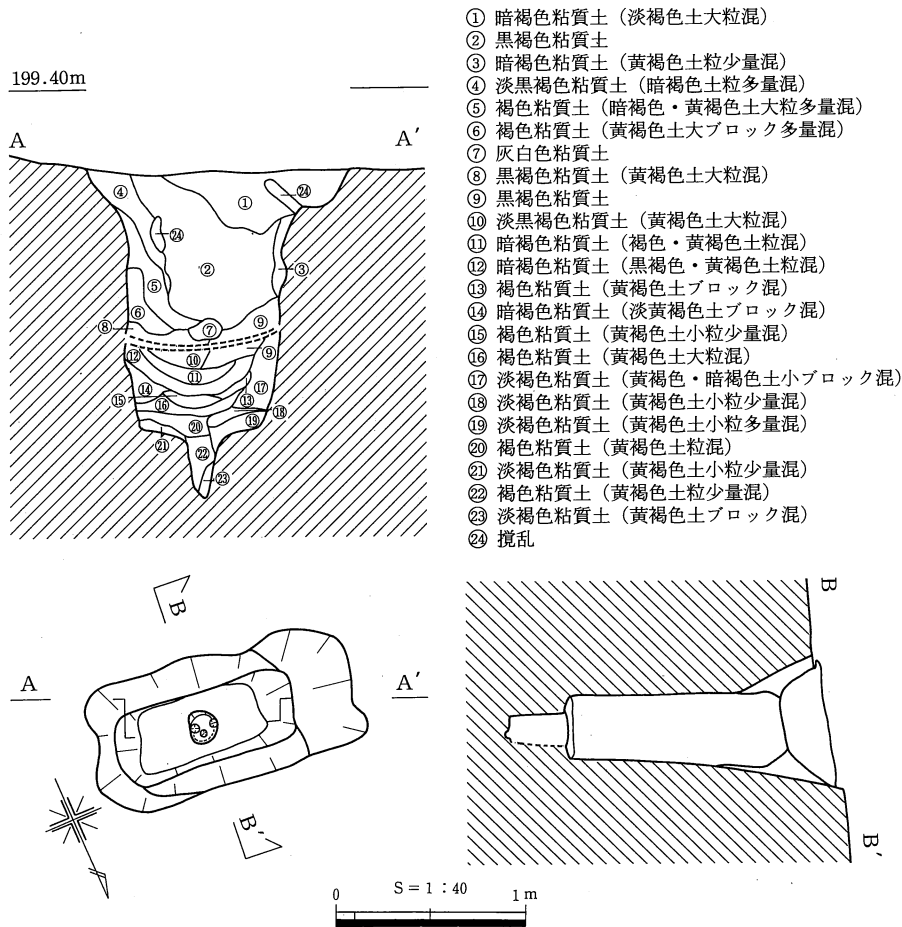
位置 土坑は調査地西端、A-3グリッド中央の標高199.0m付近に位置する。

土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の北東側約1mにSK-01が位置する。

形態 平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は上部が開く漏斗状である。検出面では土坑肩部の西側部分が木根による攪乱で、東側部分は崩落によって本来の形とは変形していると考えられるが土坑中位付近から推測して形態は隅丸長方形として良からう。規模は、検出面で長軸1.40m×短軸0.71m、底面で長軸0.66m×短軸0.33m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.45mを測る。

底面の中央からピットを検出した。平面形は円形状で、その規模は検出面で長軸0.17m×短軸0.15m、深さ0.30mを測る。底面ピット内の底面に3つの小穴を検出した。その規模は西側から順に径5cm深さ3cm、径4cm深さ2cm、径5cm深さ5cmであった。鶴田荒神ノ峯遺跡SK-02のような底面ピット掘り下げ時の工具痕の可能性を否定は出来ないが、底面に比較的深く明瞭に小穴が残ることから、底面ピット内に設置された杭<sup>(1)</sup>に由来する痕跡と考えられる。



- ① 暗褐色粘質土 (淡褐色土大粒混)
- ② 黒褐色粘質土
- ③ 暗褐色粘質土 (黄褐色土粒少量混)
- ④ 淡黒褐色粘質土 (暗褐色土粒多量混)
- ⑤ 褐色粘質土 (暗褐色・黄褐色土大粒多量混)
- ⑥ 褐色粘質土 (黄褐色土大ブロック多量混)
- ⑦ 灰白色粘質土
- ⑧ 黒褐色粘質土 (黄褐色土大粒混)
- ⑨ 黒褐色粘質土
- ⑩ 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土大粒混)
- ⑪ 暗褐色粘質土 (褐色・黄褐色土粒混)
- ⑫ 暗褐色粘質土 (黒褐色・黄褐色土粒混)
- ⑬ 褐色粘質土 (黄褐色土ブロック混)
- ⑭ 暗褐色粘質土 (淡黄褐色土ブロック混)
- ⑮ 褐色粘質土 (黄褐色土小粒少量混)
- ⑯ 褐色粘質土 (黄褐色土大粒混)
- ⑰ 淡褐色粘質土 (黄褐色・暗褐色土小ブロック混)
- ⑱ 淡褐色粘質土 (黄褐色土小粒少量混)
- ⑲ 淡褐色粘質土 (黄褐色土小粒多量混)
- ⑳ 褐色粘質土 (黄褐色土粒混)
- ㉑ 淡褐色粘質土 (黄褐色土小粒少量混)
- ㉒ 褐色粘質土 (黄褐色土粒少量混)
- ㉓ 淡褐色粘質土 (黄褐色土ブロック混)
- ㉔ 攪乱

挿図13 SK-08遺構図

**埋土** 埋土を24層に分層した。このうち、底面ピット埋土・攪乱土を除く②～㉑層は、②～④層の第1ブロック、⑤～⑦層の第2ブロック、⑧～㉑層の第3ブロックに大別できる。第1ブロックは「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土で地山土の黄褐色土の粒をほとんど含まないもの、第2ブロックは地山土の崩落に由来する黄褐色土の多いもの、第3ブロックは褐色系の土に地山土の粒が混じるものである。第3ブロックでは下層のものほど色調が薄く地山土粒が多い傾向が認められるがその差は小さく、比較的短期間に堆積が進行したことが考えられる。そして、土坑肩部が崩落して第2ブロックが形成された後は壁体が安定し、「クロボク」の流入が進んだものと考えられる。

埋土に杭痕跡を認めることは出来なかった。

**遺物** 遺物の出土は認められなかった。

**性格** 土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落とし穴と考える。

**時期** 遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落とし穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

**註**

(1) 『鶴田荒神ノ峯遺跡・鶴田堤ヶ谷遺跡・宇代横平遺跡・宇代寺中遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団 1996

## 第2節 まとめ

鶴田墓ノ上遺跡からは8基の落とし穴と考えられる土坑が検出された。いずれの土坑も遺物が出土していないため厳密な時期比定はできないが、形態および埋土に類似性が認められる他の遺跡の例から縄文時代後・晩期の土坑と推測される。鳥取県内には縄文時代前期の土坑とされているもの<sup>(1)</sup>もあるが、鶴田墓ノ上遺跡周辺では明確に時期が縄文時代前期に遡る落とし穴と考えられる土坑は検出されていないため、その可能性は否定できないものの

現時点では除外して考えることとする。

調査地はわずかな面積であるため土坑の配列関係をつかむことは容易ではないが、先学の研究を参考にしながら若干の考察を加えてみたい。

挿図5が鶴田墓ノ上遺跡全体遺構図である。遺構配置をみると大きく二つのグループに分けられそうである。1つは土坑の主軸が等高線に直交するもので、SK-02・04が該当する。SK-02は尾根状地形の頂部に位置しており、主軸が等高線に直交すると言うよりも尾根筋に平行すると考えた方がより正しいであろう。2つめは土坑の主軸が等高線に平行するものであり、SK-02・04を除く6基がそれに該当する。

土坑の形態は、検出時の平面形態で分類されている例が多いようであるが、土坑上部の平面形は埋土の観察から土坑壁面の崩落があったことが推測される例も多く、厳密な形態分類の資料とするには問題がある。しかし、土坑の中位ないしは底面の形態は崩落等の影響をほとんど受けていないと考えても良いようであり、形態分類の資料としてはこの部分を対象として行うべきであろう。

また、埋土の堆積状態を検討する重要性は別の性格を与えられている土坑の場合となんら変わることがない。しかし、落とし穴とされる土坑は平面規模に比較して深さがあるため、土層観察は容易ではない。特に幅の狭い長軸を半截して断面の土層・土色を詳細に観察することはほぼ不可能と言わざるを得ず、そのような方法で得られた結果に対しても信頼性に疑問が生じる。しかし、各遺構の報告中でも若干触れたが、底部付近の土層堆積状態は土坑の埋没に関して重要な情報を持っていると考えられる。そこで、筆者の関与する調査においては土坑半截後に半截部分の平面形を測量し、その後に半截部分側を掘り抜けて十分な土層観察用のスペースを確保する手法を採用している。この手法では、完掘する以前に土坑の一部を破壊することになるが、検出面からでは手が届かないことの多い土坑底面を細心の注意を払って掘り下げることができる。さらに、「底面ピット」と呼んでいる土坑の底部中央部に存在することが多いピットの土層観察ができることは重要な意義を持つ。底面ピットの存在はこの種の土坑が落とし穴と結論付けられた1つの要素でもあり、当初からその存在が注目されていたものである。<sup>(2)</sup>鳥取県内では底部の中央部分に径10~15cm程度の1つの底面ピットが存在する例が多く、複数の底面ピットが存在する例は少ないと認識されてきた。しかし、土坑を断ち割り底面ピットの埋土ならびに形態を詳細に検討することによって、1つの底面ピット内に複数の杭を設置している例も存在することが明らかになってきた。これまで、1つの底面ピットに1つの杭が設置されていたと考えられてきたが、必ずしもそうではないことが明らかになったのである。杭のこのような設置方法は、土坑の重要な分類要素と為りうるものであり、今後これらの点についてより慎重な調査が行われることを期待したい。

註(1)『中尾遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 1992

(2)『霧ヶ丘』霧ヶ丘調査団 1973

(3)『田住松尾平遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1995

\* 参考とした報告書・文献については割愛させていただいた。

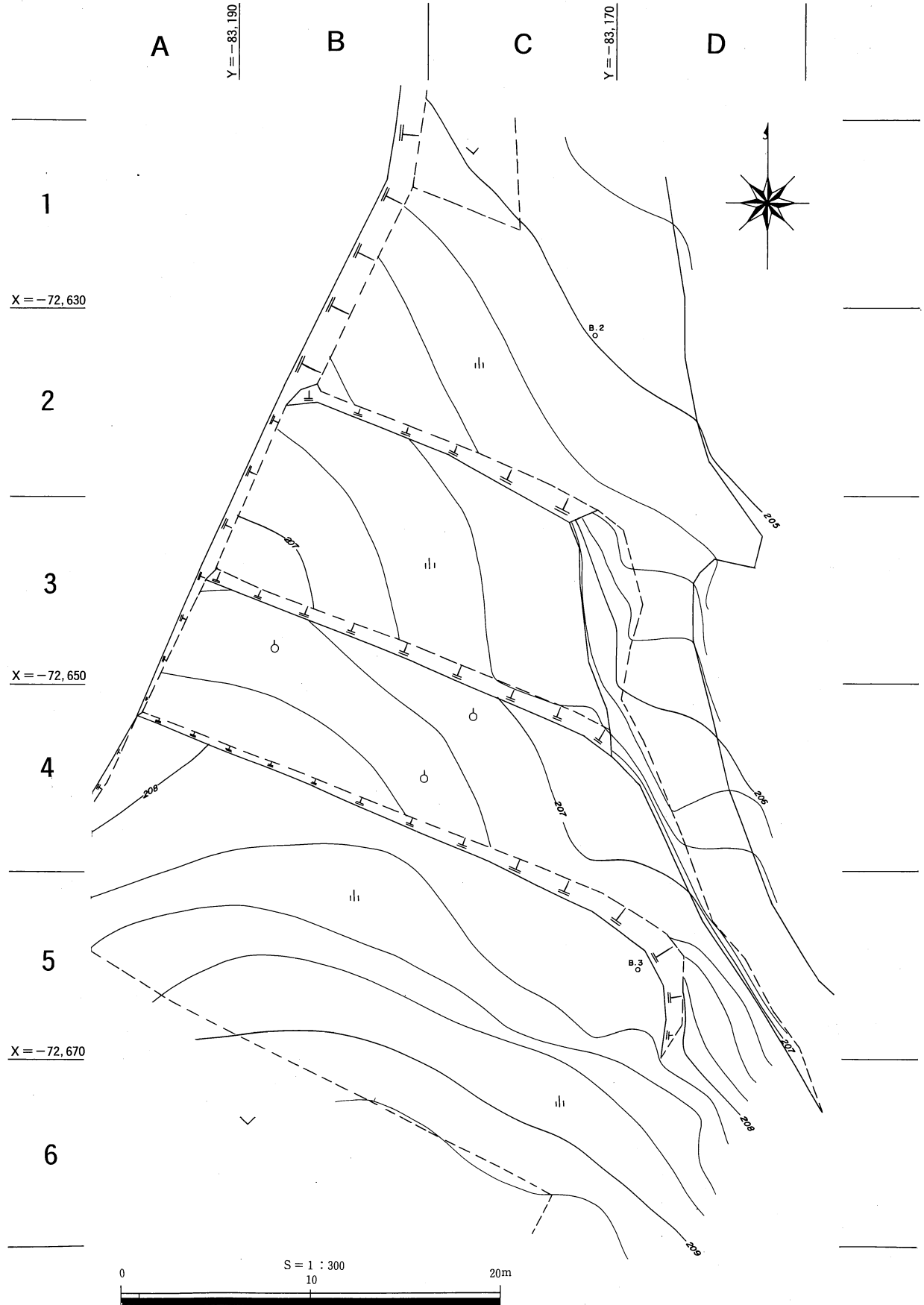
挿表2 土坑一覧表

遺構名	挿図番号	図版番号	グリッド	平面形	規模(長軸-短軸)cm		深さ(cm)	長軸方向	遺物	備考
					検出面	底面				
SK-01	6	1	A-3	隅丸長方形	118-93	78-30	125	N-48°-W		落とし穴
SK-02	7		B-2	隅丸長方形	132-75	87-33	136	N-80°-W		落とし穴
SK-03	8	1	D-3	隅丸長方形	97-65	55-40	111	N-55°-W		落とし穴
SK-04	9	1	D-4	楕円形	103-71	61-40	120	N-13°-W		落とし穴
SK-05	10	2	D-4	不整形	99-52	48-20	103	N-22°-W		落とし穴
SK-06	11	2	A-2	いびつな楕円形	123-55	78-34	117	N-86°-W		落とし穴
SK-07	12	2	B-3	円形	140-134	60-43	192	N-86°-W		落とし穴
SK-08	13		A-3	隅丸長方形	140-71	66-33	145	N-85°-W		落とし穴

# 鶴田大道端遺跡



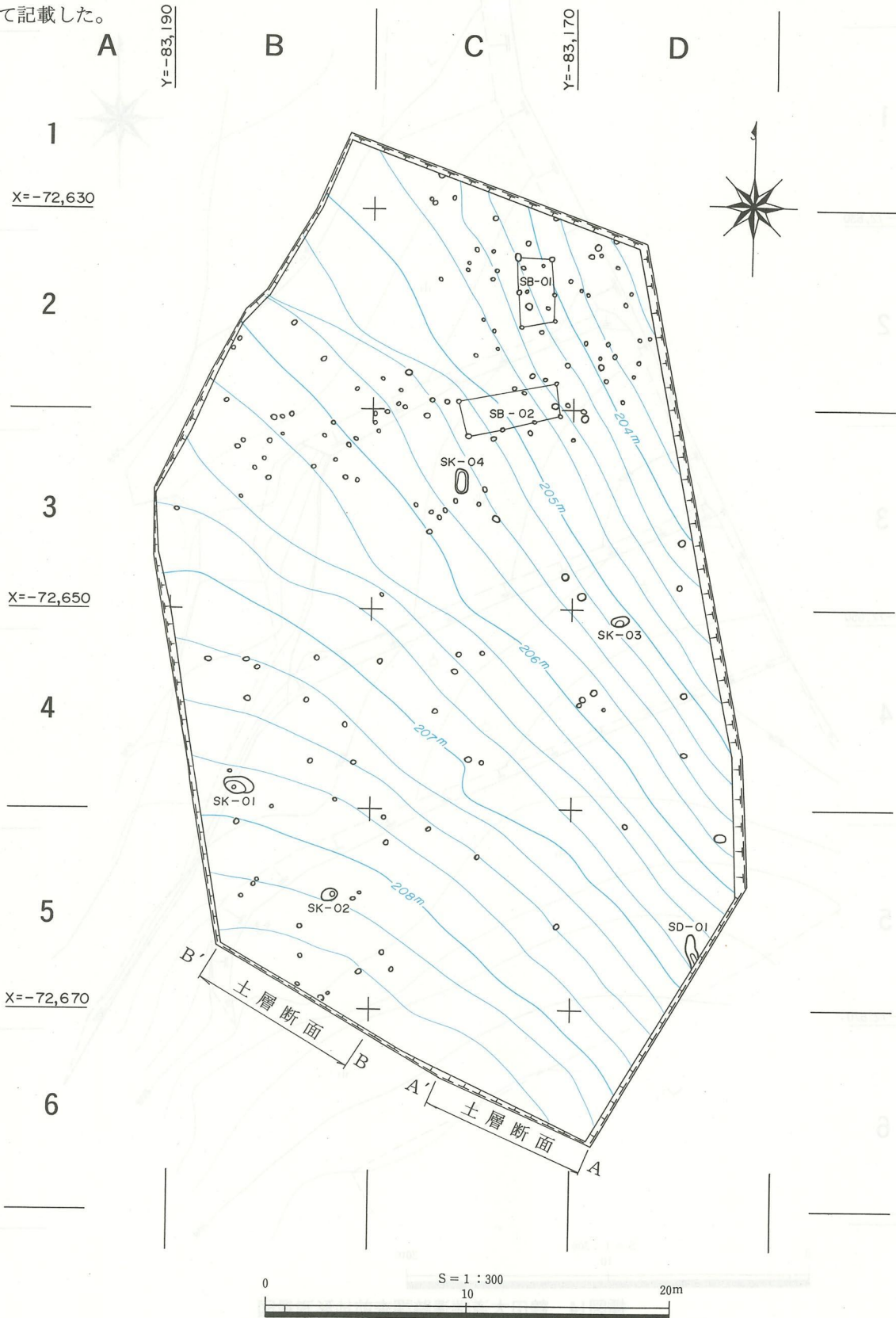
# 第4章 鶴田大道端遺跡の調査



挿図14 鶴田大道端遺跡調査前地形測量図

鶴田大道端遺跡で検出した遺構は、掘立柱建物跡2棟、土坑4基、溝状遺構1条、ピットである。ここでは、各遺構について調査の結果を述べる。なお、本遺跡からは遺物が全く出土しなかったため、遺構が営まれた時期を明らかにすることは出来なかった。

なお、土坑内から検出された石灰質のような細かな礫状の物質についてリン・カルシウム分析を実施し附論1として記載した。



挿図15 鶴田大道端遺跡全体遺構図

## 第1節 掘立柱建物跡

今回の調査で確認できた掘立柱建物跡は2棟であった。調査地内には多数のピットが存在しており、その中には掘立柱建物跡の柱穴となるものも含まれていると考えられるが、削平等により対応するピットが見られなかった。ここでは確実に確認できたもののみ報告する。

### SB-01 (挿図16 図版3)

**位置** 調査地の北東部、C-2グリッドの北東寄り、北東側に向かって地形が下がっていく緩斜面途中の標高203.7m~204.5m付近に位置する。本遺構の南側約3mには主軸がふれるもののSB-02が位置する。

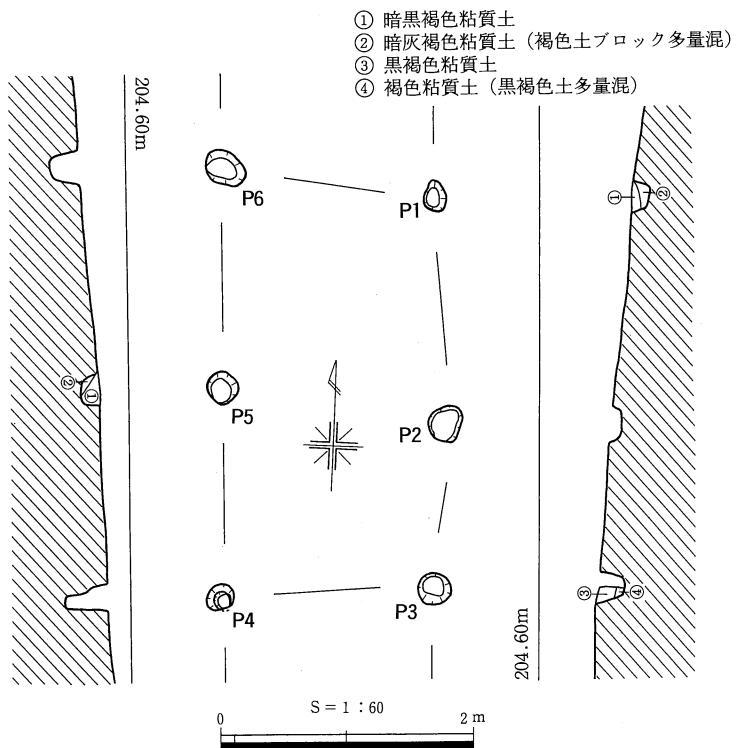
**形態** 桁行2間・3.10m~3.43m、梁行1間・1.66m~1.70mを測る。主軸方向はN-10°-Wである。柱穴は6個で、それぞれの規模(長軸×短軸-深さ)は、P1(24×18-15)cm、P2(30×26-10)cm、P3(26×26-24)cm、P4(24×20-34)cm、P5(26×24-15)cm、P6(36×27-25)cmを測る。

柱穴間距離は、P1-P2間から順にP6-P1間まで1.82m、1.28m、1.66m、1.67m、1.76m、1.70mである。

**埋土** 観察が出来た柱穴の埋土を4層に分層した。黒褐色系の埋土が基本である。

**遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** 不明である。



挿図16 SB-01遺構図

### SB-02 (挿図17 図版3)

**位置** 調査地の北東部、C-2・3グリッドにまたがり、北東側に向けて地形が下がっていく緩斜面途中の標高204.5m~205.3m付近に位置する。本遺構の北側約3mには主軸がふれるもののSB-01が位置する。

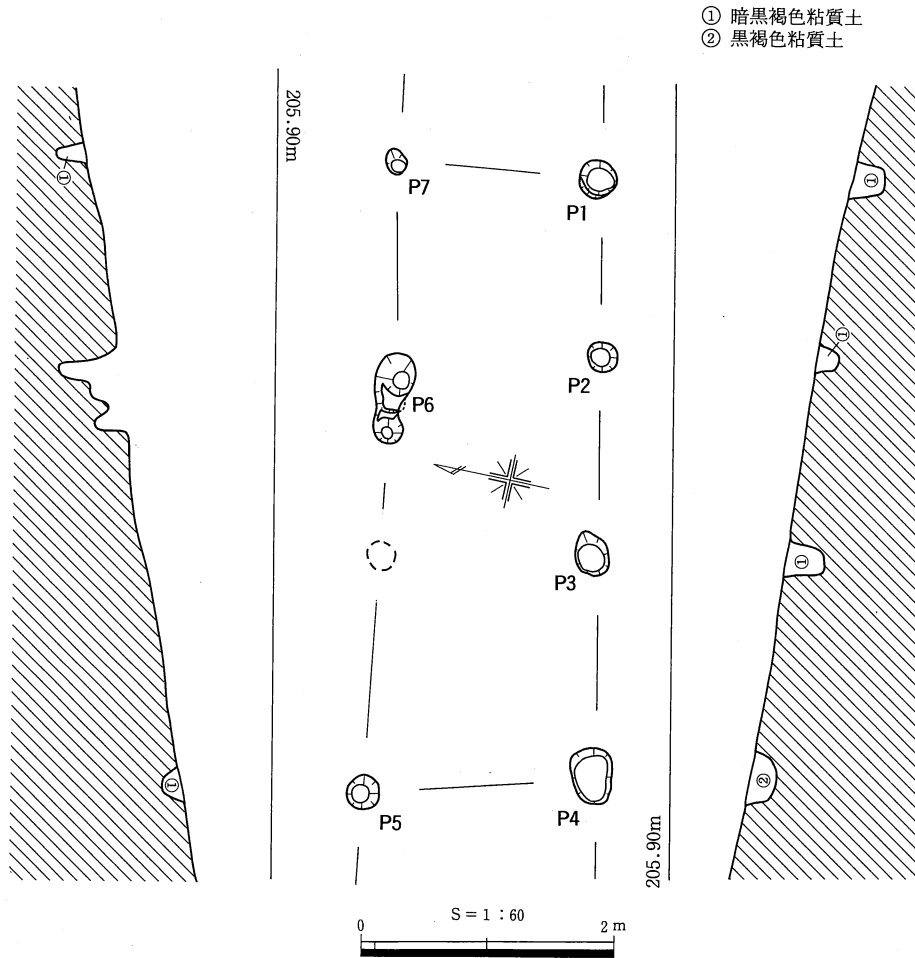
**形態** 桁行3間・4.80m~5.00m、梁行1間・1.63m~1.86mを測る。主軸方向はN-78°-Eである。柱穴は7個あり、それぞれの規模(長軸×短軸-深さ)は、P1(31×31-30)cm、P2(25×24-20)cm、P3(38×26-32)cm、P4(46×34-26)cm、P5(27×26-18)cm、P6(50×32-47)cm、P7(20×16-25)cmを測る。

柱穴間距離は、P1-P2間から順にP7-P1間まで1.40m、1.60m、1.80m、1.86m、3.32m、1.68m、1.63mである。

**埋土** P4およびP6以外の埋土は暗黒褐色粘質土、P4の埋土は黒褐色粘質土で、それぞれ単層である。

**遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** 不明である。



- ① 暗黒褐色粘質土
- ② 黒褐色粘質土

挿図17 SB-02遺構図

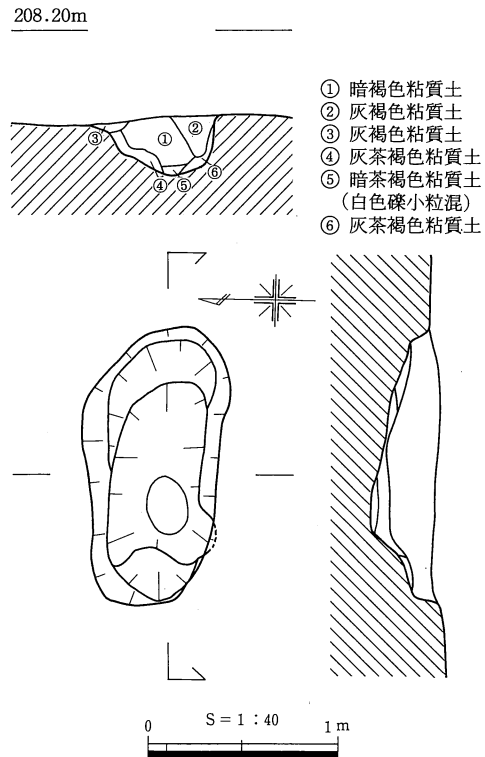
## 第2節 土坑

### SK-01 (挿図18 図版3)

**位置** 調査地の南西部、B-4グリッドの南側にあり、緩やかに北東側に向けて地形が下がっていく丘陵上の標高207.7m付近に位置する。

**形態** 平面形は、検出面が隅丸長方形、底面は不整形を呈し、断面形は逆台形状を呈する。規模は、検出面で長軸1.43m×短軸0.64m、深さ0.22mを測り、東西両方向から0.22m～0.28mの幅で緩やかなテラス部を設け、さらに長軸0.95m×短軸0.46m、底面で長軸0.30m×短軸0.21m、深さ0.11m～0.15m掘り込んでいる。検出面より、残存する部分の底面までの最大の深さは0.37mを測る。

**埋土** 埋土は6層に分層できる。基本となる土は暗褐色粘質土及び灰褐色粘質土である。底面付近の埋土中に石灰質のような細かな礫状の物質が①層下部及び⑤層から検出された。この物質の含有密度はそれほ



- ① 暗褐色粘質土
- ② 灰褐色粘質土
- ③ 灰褐色粘質土
- ④ 灰茶褐色粘質土
- ⑤ 暗茶褐色粘質土 (白色礫小粒混)
- ⑥ 灰茶褐色粘質土

挿図18 SK-01遺構図

ど高くはない。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 特定できない。

性格 不明である。

その他 底面付近から検出された石灰質のような細かな礫状の物質について、土坑内に動物遺体が埋められていた可能性が考えられたため、①層下部及び⑤層からサンプルを採取し、リン・カルシウム分析を行った。詳細は附論1に譲るが、残念ながら当初考えていた可能性は低いという結果が出た。

### SK-02 (挿図19 図版3)

位置 調査地の南西部、B-5グリッドの東側にあり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく丘陵上の標高208.2m付近に位置する。

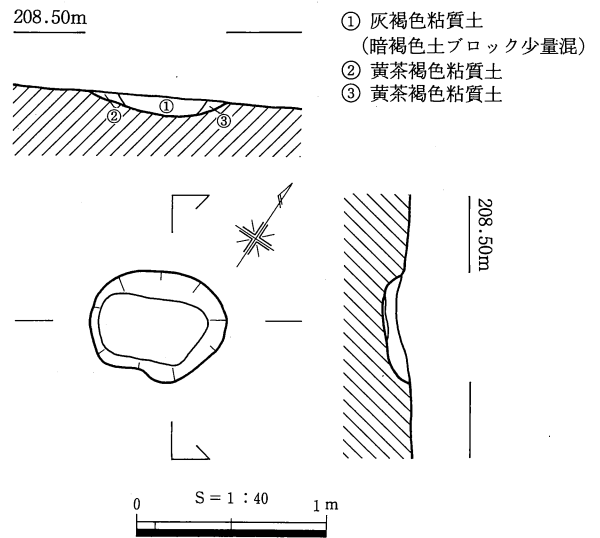
形態 平面形は、検出面が楕円形、底面はいびつな隅丸方形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸0.72m×短軸0.52m、底面で長軸0.55m×短軸0.33m、残存する部分の底面までの最大の深さは0.15mを測る。

埋土 埋土は3層に分層できる。基本となる土は灰褐色粘質土である。埋土には流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 特定できない。

性格 不明である。



挿図19 SK-02遺構図

### SK-03 (挿図20 図版4)

位置 調査地の東部、D-4グリッドの北西側にあり、緩やかに北東側に向けて地形が下がっていく丘陵上の標高205.2m付近に位置する。

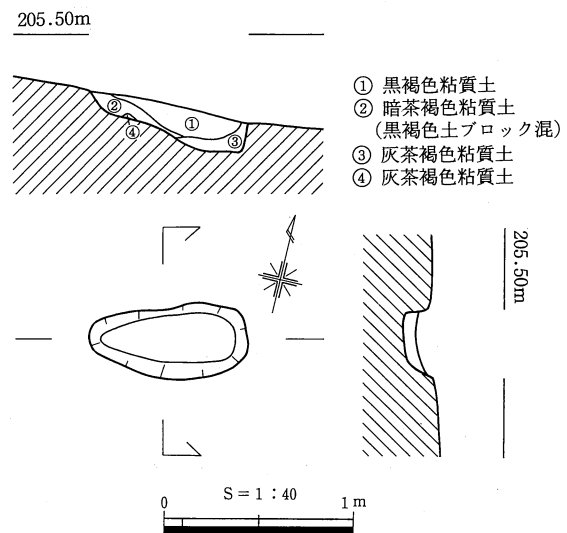
形態 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈するが、底面はやや不整である。断面形はいびつな逆台形状である。規模は、検出面で長軸0.85m×短軸0.35m、底面で長軸0.75m×短軸0.25m、残存する部分の底面までの最大の深さは0.35mを測る。

埋土 埋土は4層に分層できる。基本となる土は黒褐色粘質土である。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 特定できない。

性格 不明である。



挿図20 SK-03遺構図

SK-04 (挿図21 図版4)

位置 調査地の中央部北側、C-3グリッドの中央北寄り、緩やかに北東側に向けて地形が下がっていく丘陵上の標高205.6m付近に位置する。北側約2mにはSB-02がある。

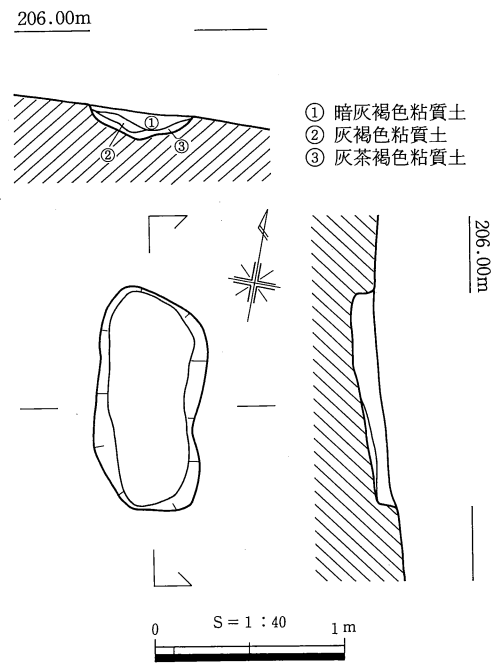
形態 平面形は、検出面・底面ともいびつな隅丸長方形を呈し、断面形はいびつな逆台形状である。規模は、検出面で長軸1.18m×短軸0.53m、底面で長軸1.13m×短軸0.38m、残存する部分の底面までの最大の深さは0.25mを測る。

埋土 埋土は3層に分層できる。基本となる土は灰褐色系の土である。埋土には流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 特定できない。

性格 不明である。



挿図21 SK-04遺構図

### 第3節 溝状遺構

今回の調査で検出できた溝状遺構は1条であった。

SD-01 (挿図22 図版4)

位置 調査地の南東部、D-5グリッドの南東側にあり、緩やかに北東側に向けて地形が下がっていく標高206.7m付近に位置する。

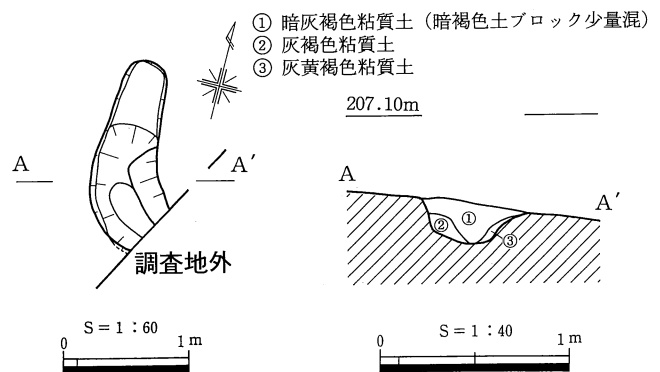
形態 溝の形態は不整形であり、南東側は調査地外に続いている。検出規模は、全長1.52m、幅は0.30m~0.56m、深さは残存部で最大0.25mを測る。溝の走向はN-46°-WからN-S方向に屈曲する。

埋土 埋土は3層に分層できる。堆積状況から、流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 特定できない。

性格 不明である。



挿図22 SD-01遺構図

### 第4節 ピット

調査地内より総計154個のピットを検出した。全体的に調査地内に点在しているものの、その多くがB-4グリッドの北東部から地形が下がる方向に沿って群をなすように集中して存在している。

ピットの規模は比較的小さいものが多く、最大のもので径42cmのものから、最小のもので径12cmを測る。概ね径20cm前後である。ピットの埋土はすべて単層で、その多くが暗黒褐色粘質土ないしは暗褐色粘質土である。柱根を持つものはなかった。

検出できた多数のピットの内の、いくつかは掘立柱建物跡の柱穴として報告した。そのほかにも掘立柱建物に伴うピットが含まれていることも考えられるが、互に対応するピットが見られず、今回の調査で確認できたのは掘立柱建物跡2棟にとどまった。

ピット内より遺物は出土しなかった。

## 第5節 まとめ

鶴田大道端遺跡は、会見町と溝口町の町境にそびえる高塚山（標高301.0m）の裾野で、小高い丘陵が形成されている緩やかな傾斜をもつ尾根上に立地する遺跡である。今回の調査では、掘立柱建物跡2棟、土坑4基、溝状遺構1条、ピットの存在が確認できたが、遺物は全く出土しなかった。よってそれぞれの遺構の時期は特定できないが、これらは埋土の性質から時間差が存在する可能性が考えられる。

掘立柱建物跡およびピット、そしてSK-03は黒褐色系の埋土を基本としており、SK-01・02・04及びSD-01は暗褐色土あるいは灰褐色土系の埋土が基本である。

調査地の南壁東西土層断面図（挿図23）を見ると、①層はしまりの悪い暗茶褐色粘質土であり、鶴田周辺で見られる黒褐色粘質土は部分的にしか認められない。調査開始以前、本遺跡一帯は畑地として利用されており、これが耕土であることがわかる。しかし、調査地北側の土層断面は挿図に入れていないが、その断面状況は上から耕土、客土、黒褐色粘質土という様相を呈している。すなわち調査地内も周辺の例にもれず、黒褐色粘質土が畑地造成以前に堆積していたことが窺える。<sup>註(1)</sup>SK-01・02・04はいわゆる地山と考えられる層まで掘り下げた後に、さらにサブトレンチを設定し検出した。これらは埋土に黒褐色系の土を含んでおらず、そして各遺構は黒褐色粘質土をもつものともたないものに二分されることから、本遺跡の場合、黒褐色系の埋土をもつ遺構よりも暗褐色土あるいは灰褐色土系の埋土をもつ遺構の方が時期が遡ると考えられる。以上のことは、情報が限られているためその可能性が指摘できるということにとどめざるをえない。

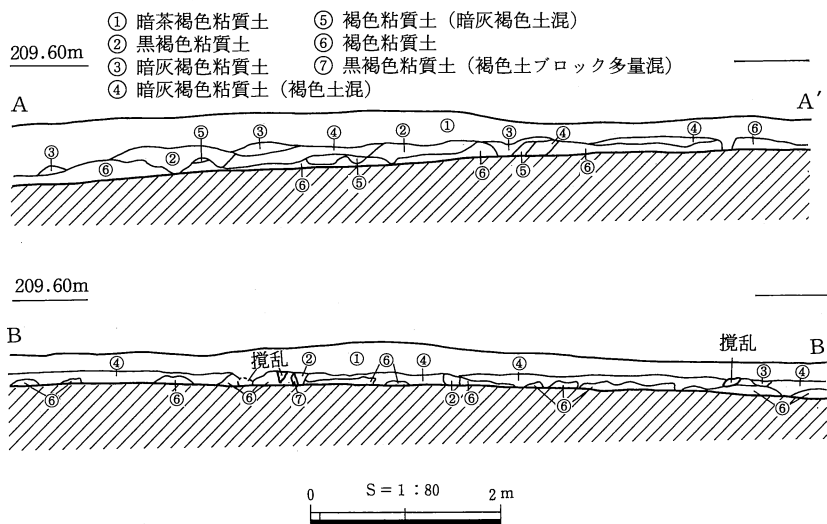
註

(1) 本遺跡から南西約100mの地点で、同じ丘陵上に池野中峯山遺跡が位置する。この遺跡の土層断面は本遺跡と類似した断面状況を呈している。

『池野中峯山遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1993

挿表3 掘立柱建物跡一覧表

遺構名	挿図番号	図版番号	グリッド	桁×梁(間)	規模(桁)		規模(梁)		主軸方向	遺物	時期
					(m)	(m)	(m)	(m)			
SB-01	16	3	C-2	2×1	3.4	3.1	1.7	1.6	N-10°-W		
SB-02	17	3	C-2・3	3×1	5.0	4.8	1.8	1.6	N-78°-E		



挿図23 南壁東西土層断面図



挿表4 土坑一覧表

遺構名	挿図番号	図版番号	グリッド	平面形	規模(長軸-短軸)cm		深さ(cm)	長軸方向	遺物	備考
					検出面	底面				
SK-01	18	3	B-4	隅丸長方形	143-64	95-46	37	N-88°-E		
SK-02	19	3	B-5	楕円形	72-52	55-33	15	N-57°-E		
SK-03	20	4	D-4	楕円形	85-35	75-25	35	N-76°-E		
SK-04	21	4	C-3	隅丸長方形	118-53	113-38	25	N-10°-W		

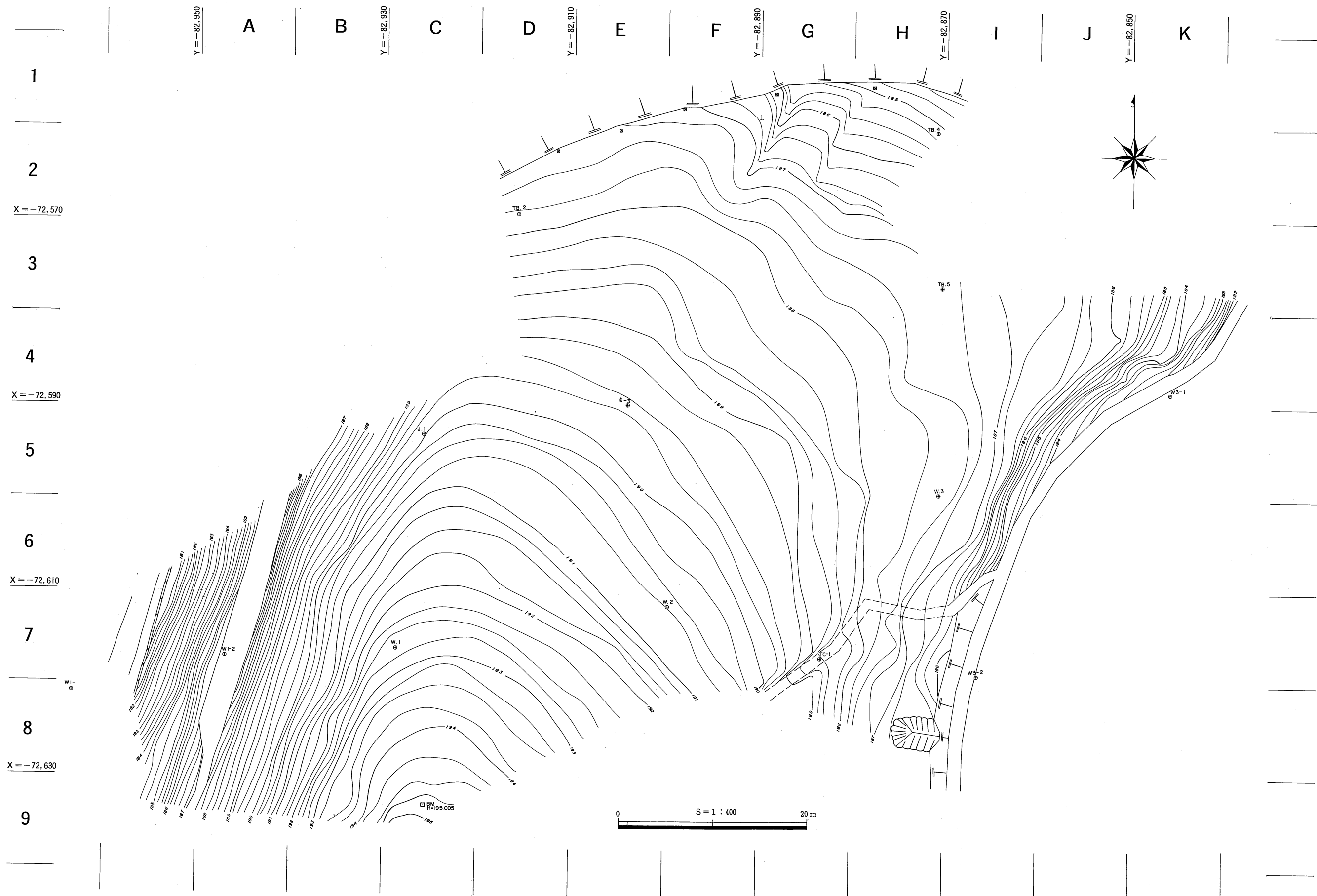
挿表5 ピット一覧表

柱穴番号	グリッド	規模 cm		層	土色・土質	柱根 有無	備考
		長径×短径	深さ				
1	B-2	22×16	18	1	暗灰褐色粘質土	×	
2	B-2	17×16	24	1	暗褐色粘質土(褐色土小粒多量混)	×	
3	B-2	19×18	27	1	暗黒褐色粘質土	×	
4	B-2	13×13	14	1	暗褐色粘質土	×	
5	B-2	18×11	17	1	暗褐色粘質土	×	
6	B-2	17×14	31	1	暗黒褐色粘質土	×	
7	B-3	18×13	17	1	暗褐色粘質土	×	
8	B-3	13×13	16	1	暗褐色粘質土	×	
9	B-3	19×17	21	1	暗褐色粘質土	×	
10	B-3	19×18	14	1	暗褐色粘質土(褐色土ブロック少量混)	×	
11	B-3	22×17	17	1	暗褐色粘質土	×	
12	B-3	18×16	10	1	暗黒褐色粘質土	×	
13	B-3	12×12	13	1	暗褐色粘質土	×	
14	B-3	17×15	14	1	暗褐色粘質土	×	
15	B-3	19×16	15	1	暗褐色粘質土	×	
16	B-3	18×16	23	1	暗褐色粘質土	×	
17	B-3	15×13	11	1	暗褐色粘質土	×	
18	B-3	17×14	9	1	暗褐色粘質土	×	
19	B-3	14×13	15	1	暗褐色粘質土	×	
20	B-3	16×14	10	1	暗褐色粘質土	×	
21	B-3	20×15	19	1	暗黒褐色粘質土	×	
22	B-3	14×13	9	1	暗褐色粘質土	×	
23	B-3	17×13	11	1	暗褐色粘質土	×	
24	B-3	14×13	12	1	暗褐色粘質土	×	
25	B-3	16×14	10	1	暗褐色粘質土(褐色土ブロック混)	×	
26	B-3	12×12	14	1	暗褐色粘質土	×	
27	B-3	14×12	11	1	暗褐色粘質土	×	
28	B-3	24×18	18	1	暗黒褐色粘質土	×	
29	B-4	16×12	15	1	暗褐色粘質土	×	
30	B-4	19×17	15	1	暗褐色粘質土	×	
31	B-4	19×16	15	1	暗褐色粘質土	×	
32	B-4	16×15	9	1	暗黒褐色粘質土	×	
33	B-4	24×21	19	1	暗褐色粘質土(褐色土ブロック混)	×	
34	B-4	26×14	14	1	暗褐色粘質土(褐色土ブロック混)	×	
35	B-4	20×19	14	1	暗黒褐色粘質土	×	
36	B-4	15×12	17	1	暗黒褐色粘質土	×	
37	B-4	21×19	20	1	暗褐色粘質土	×	
38	B-4	30×27	34	1	暗黒褐色粘質土	×	
39	B-4	20×18	23	1	暗黒褐色粘質土	×	
40	B-4	15×14	18	1	暗褐色粘質土	×	
41	B-5	16×16	8	1	暗褐色粘質土	×	
42	B-5	16×15	9	1	暗黒褐色粘質土	×	

柱穴 番号	グリッド	規模 cm	層	土 色・土 質	柱根	備考
		長径×短径-深さ			有無	
43	B-5	14×13-14	1	暗黒褐色粘質土	×	
44	B-5	17×16-18	1	暗黒褐色粘質土	×	
45	B-5	14×13-20	1	暗黒褐色粘質土	×	
46	B-5	20×16-10	1	暗黒褐色粘質土 (暗褐色土混)	×	
47	B-5	29×19-16	1	暗黒褐色粘質土 (褐色土小粒少量混)	×	
48	B-5	22×18-23	1	暗黒褐色粘質土 (褐色土ブロック少量混)	×	
49	B-5	19×16-18	1	暗黒褐色粘質土	×	
50	B-5	14×7-14	1	暗褐色粘質土	×	
51	B-5	15×13-10	1	暗黒褐色粘質土	×	
52	B-5	19×11-15	1	暗黒褐色粘質土 (褐色土ブロック混)	×	
53	C-1	26×22-22	1	暗褐色粘質土	×	
54	C-1	23×20-13	1	暗褐色粘質土	×	
55	C-1	23×17-16	1	暗褐色粘質土	×	
56	C-1	18×16-21	1	暗黒褐色粘質土	×	
57	C-2	35×32-20	1	黒褐色粘質土	×	
58	C-2	28×21-20	1	暗褐色粘質土	×	
59	C-2	20×16-19	1	暗褐色粘質土	×	
60	C-2	19×16-13	1	暗褐色粘質土	×	
61	C-2	23×15-20	1	暗褐色粘質土	×	
62	C-2	19×15-20	1	暗黒褐色粘質土	×	
63	C-2	17×16-22	1	暗褐色粘質土 (褐色土大ブロック混)	×	
64	C-2	33×21-30	1	暗黒褐色粘質土	×	
65	C-2	27×20-26	1	暗黒褐色粘質土	×	
66	C-2	20×19-24	1	暗褐色粘質土	×	
67	C-2	18×15-10	1	暗灰褐色粘質土	×	
68	C-2	28×23-19	1	暗褐色粘質土	×	
69	C-2	25×19-22	1	暗黒褐色粘質土	×	
70	C-2	19×17-15	1	暗褐色粘質土	×	
71	C-2	33×25-39	1	黒褐色粘質土	×	
72	C-2	22×17-22	1	暗褐色粘質土	×	
73	C-2	21×20-18	1	黒褐色粘質土 (褐色土ブロック混)	×	
74	C-2	15×13-11	1	暗灰褐色粘質土	×	
75	C-2	22×19-22	1	黒褐色粘質土	×	
76	C-2	23×18-17	1	暗褐色粘質土	×	
77	C-2	16×14-14	1	暗黒褐色粘質土 (褐色土大ブロック混)	×	
78	C-2	20×19-16	1	暗黒褐色粘質土	×	
79	C-2	31×25-25	1	暗灰褐色粘質土	×	
80	C-2	24×22-34	1	黒褐色粘質土	×	
81	C-2	17×16-18	1	暗灰褐色粘質土	×	
82	C-2	16×12-11	1	暗黒褐色粘質土	×	
83	C-2	21×21-15	1	暗黒褐色粘質土	×	
84	C-2	22×20-28	1	黒褐色粘質土	×	
85	C-2	24×18-16	1	暗黒褐色粘質土	×	
86	C-2	19×18-16	1	暗灰褐色粘質土	×	
87	C-2	26×23-26	1	暗灰褐色粘質土	×	
88	C-2	33×29-51	1	暗黒褐色粘質土	×	
89	C-2	34×33-40	1	黒褐色粘質土	×	
90	C-3	16×15-15	1	暗黒褐色粘質土	×	
91	C-3	22×21-23	1	暗黒褐色粘質土	×	
92	C-3	30×26-20	1	暗灰褐色粘質土	×	
93	C-3	14×11-19	1	暗黒褐色粘質土	×	
94	C-3	30×20-27	1	黒褐色粘質土 (褐色土ブロック多量混)	×	
95	C-3	29×26-25	1	暗黒褐色粘質土	×	
96	C-3	18×13-19	1	暗褐色粘質土	×	
97	C-3	21×17-21	1	黒褐色粘質土	×	
98	C-3	22×19-13	1	暗褐色粘質土	×	

柱穴 番号	グリッド	規模 cm	層	土 色・土 質	柱根	備考
		長径×短径－深さ			有無	
99	C-3	18×13-18	1	暗黒褐色粘質土	×	
100	C-3	15×15-16	1	暗灰褐色粘質土	×	
101	C-3	23×17-27	1	暗褐色粘質土 (褐色土ブロック混)	×	
102	C-3	29×21-32	1	黒褐色粘質土 (褐色土混)	×	
103	C-3	17×16-20	1	暗灰褐色粘質土	×	
104	C-3	41×31-32	1	黒褐色粘質土	×	
105	C-3	33×26-25	1	黒褐色粘質土	×	
106	C-3	31×27-28	1	黒褐色粘質土	×	
107	C-3	13×13-17	1	暗黒褐色粘質土	×	
108	C-4	16×14-20	1	暗黒褐色粘質土	×	
109	C-4	14×13-16	1	暗黒褐色粘質土	×	
110	C-4	22×19-15	1	暗黒褐色粘質土 (褐色土小粒少量混)	×	
111	C-4	26×15-20	1	暗黒褐色粘質土	×	
112	C-4	23×20-23	1	暗黒褐色粘質土	×	
113	C-4	24×19-82	1	暗黒褐色粘質土	×	
114	C-4	19×16-20	1	暗褐色粘質土 (褐色土小粒少量混)	×	
115	C-5	23×20-23	1	暗黒褐色粘質土 (褐色土ブロック少量混)	×	
116	C-5	18×14-21	1	暗黒褐色粘質土 (茶褐色土混)	×	
117	C-5	18×16-22	1	暗黒褐色粘質土	×	
118	C-5	16×14-14	1	暗褐色粘質土	×	
119	C-5	22×20-17	1	暗褐色粘質土	×	
120	C-5	20×12-21	1	暗黒褐色粘質土 (褐色土大ブロック混)	×	
121	C-5	20×14-14	1	暗黒褐色粘質土 (褐色土ブロック少量混)	×	
122	D-2	25×16-19	1	黒褐色粘質土	×	
123	D-2	28×21-17	1	黒褐色粘質土	×	
124	D-2	24×23-21	1	黒褐色粘質土	×	
125	D-2	24×21-32	1	黒褐色粘質土	×	
126	D-2	27×21-17	1	暗黒褐色粘質土	×	
127	D-2	24×21-24	1	暗褐色粘質土	×	
128	D-2	19×16-19	1	暗褐色粘質土	×	
129	D-2	19×18-11	1	暗褐色粘質土	×	
130	D-2	19×15-18	1	暗褐色粘質土	×	
131	D-2	16×14-13	1	暗褐色粘質土	×	
132	D-2	19×18-28	1	黒褐色粘質土	×	
133	D-2	22×16-20	1	暗褐色粘質土	×	
134	D-2	20×17-27	1	暗褐色粘質土	×	
135	D-2	29×20-27	1	暗黒褐色粘質土	×	
136	D-2	24×21-18	1	暗黒褐色粘質土	×	
137	D-2	32×28-39	1	暗黒褐色粘質土	×	
138	D-2	20×17-22	1	暗褐色粘質土	×	
139	D-2	23×19-21	1	暗黒褐色粘質土	×	
140	D-2	26×22-31	1	黒褐色粘質土	×	
141	D-2	23×20-22	1	暗褐色粘質土	×	
142	D-3	31×21-30	1	暗黒褐色粘質土	×	
143	D-3	32×28-16	1	黒褐色粘質土 (褐色土ブロック多量混)	×	
144	D-3	23×20-15	1	暗褐色粘質土	×	
145	D-3	22×21-18	1	暗灰褐色粘質土	×	
146	D-3	34×23-30	1	黒褐色粘質土 (褐色土ブロック混)	×	
147	D-4	31×24-30	1	黒褐色粘質土	×	
148	D-4	35×29-11	1	暗褐色粘質土	×	
149	D-4	18×15-21	1	暗黒褐色粘質土	×	
150	D-4	14×12-17	1	暗黒褐色粘質土	×	
151	D-4	22×15-17	1	暗黒褐色粘質土	×	
152	D-4	21×18-23	1	黒褐色粘質土	×	
153	D-4	28×20-15	1	暗黒褐色粘質土	×	
154	D-4	42×39-16	1	暗黒褐色粘質土	×	

# 鶴田中峯山遺跡



挿図24 鶴田中峯山遺跡調査前地形測量図





挿図25 鶴田中峯山遺跡全体遺構図

## 第5章 鶴田中峯山遺跡の調査

鶴田中峯山遺跡は、高塚山から放射状に伸びる尾根の1つに位置する遺跡である。河川により形成された平野部に向けて急な崖が続く標高190m前後の台地状地形の上であり、浸食によって形成された尾根状地形の尾根節上に位置する。検出した遺構は、縄文時代の落とし穴と考えられる土坑、弥生時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑、中・近世段階の土坑・土壙墓、溝状遺構、段状遺構、窯状遺構、集石遺構、ピットである。ここでは、各遺構について調査の結果を述べる。

### 第1節 竪穴住居跡

SI-01 (挿図26・27 図版5・13)

位置 調査地のやや北寄り、G-4グリッドの北西部を中心とし、標高188.0m付近に位置する。

本遺構の北側約3mにSI-02、北東側約2mにSB-01が位置する。

建て替え SI-01には少なくとも1度の建て替えが認められる。建て替え後をSI-01A、建て替え前をSI-01Bとした。

SI-01A

形態 遺存状態は悪く、本来は全周していたと考えられる壁溝は西側部分でのみ検出できた。残存する壁溝から平面形は円形であったと推測される。残存部では支柱穴の端から壁溝の外側肩部までは約1.1mである。これを壁溝の遺存していない東側に適用して住居跡の規模を求めると、東西・南北方向ともに径約6.8mとなり、床面積は推定で36.2m<sup>2</sup>である。壁体はほとんど残っておらず、最も遺存状態の良い南西部で高さ8cmである。

壁溝は断面形が「U」字状を呈し、幅7~15cm、深さ3~5cmを測る。

支柱穴はP1~P6の6個あり、それぞれの規模(長軸×短軸-深さ)は、P1(24×23-54)cm、P2(28×22-53)cm、P3(26×21-54)cm、P4(23×20-84)cm、P5(24×23-54)cm、P6(30×24-67)cmを測る。支柱穴は外傾して掘り込まれており、特にP1・P2などでその特徴が読みとれる。埋土は6個ともほぼ同じで黒褐色かやや薄い淡黒褐色の土である。

支柱穴間距離はP1-P2から順にP6-P1まで2.1m・1.9m・2.3m・2.3m・1.7m・2.6mであり、対角線上に位置するP1-P4・P2-P5・P3-P6のそれぞれの距離は4.3m・4.2m・4.4mを測る。

中央ピットは6個の支柱穴のほぼ中央に位置するP7である。平面形は長形状の不整形を呈し、その規模は(72×47-10)cmである。埋土は支柱穴埋土と共通する淡黒褐色の土である。

中央ピットの南西約60cmの位置から径約40cmの円形の焼土面を検出した。

埋土 遺存した住居跡埋土を柱穴埋土を除いて3層に分層したが、③層は後述するSI-01Bの壁溝埋土であり、SI-01Aに伴う埋土は①・②層である。

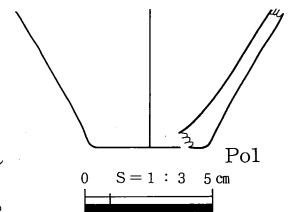
遺物 弥生土器の底部Po1を含む若干の土器片と石の破片が出土した。石は割れた破片であり、その表面は平滑で擦り面があるようにも見えるが明確ではない。

時期 出土したPo1や土器は弥生土器であるが、時期を特定するにはいたらない。

SI-01B

形態 SI-01Bは、拡張してSI-01Aに建て替えられたと推測されるため壁体は遺存していないが壁溝が一部検出できた。壁溝はSI-01Aの壁溝の内側約20cmに同心円を描くように位置している。断面形は浅い「U」字状を呈し、幅8~13cm、深さ4~5cmを測る。

SI-01Bに伴うと考えられる支柱穴は検出できなかったため、SI-01AにおけるP1~P6



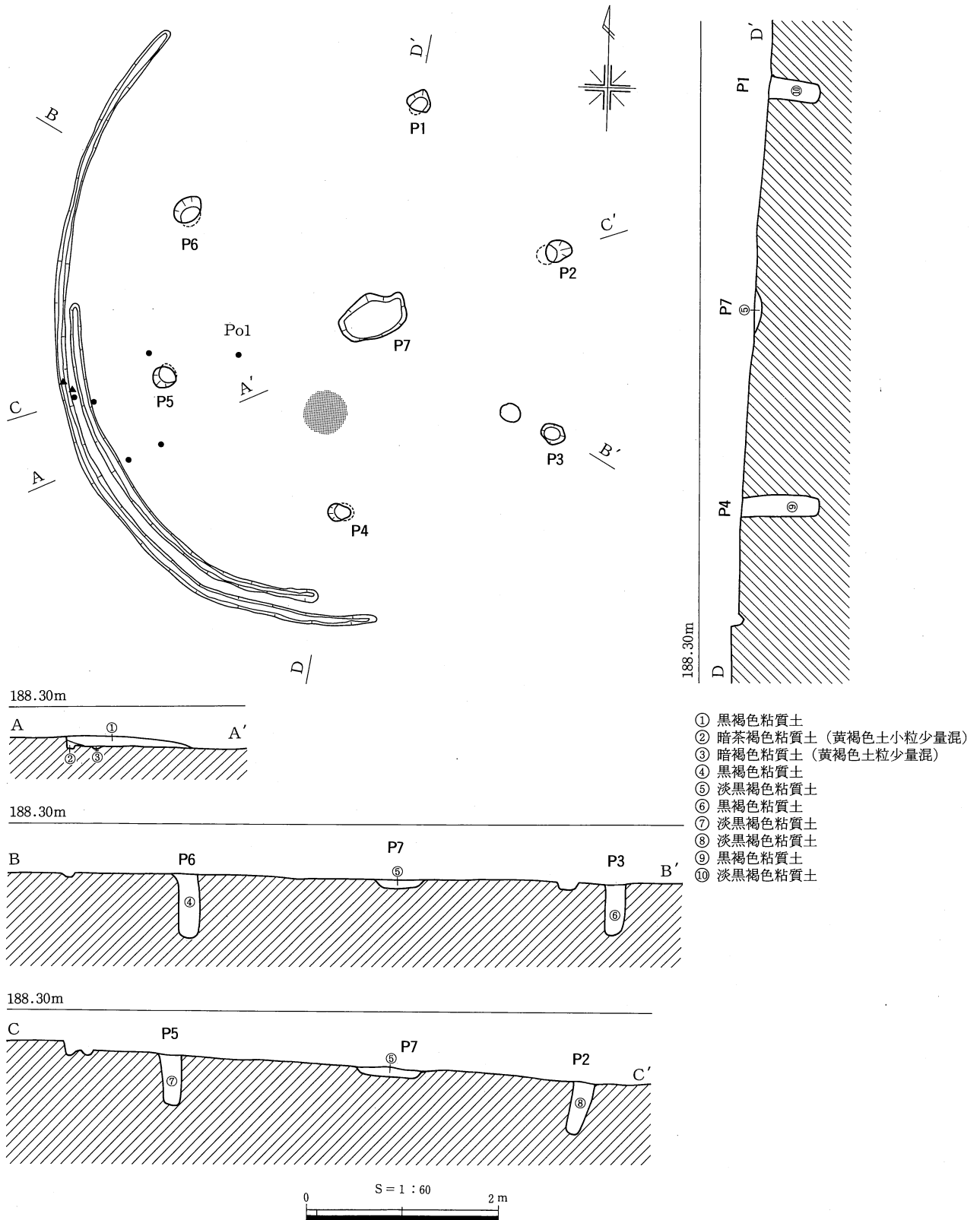
挿図26  
SI-01遺物実測図

の支柱穴はSI-01Bの支柱穴を再使用したものと推測される。

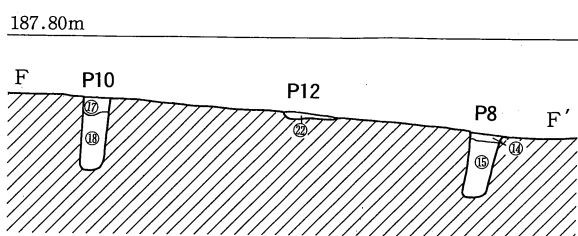
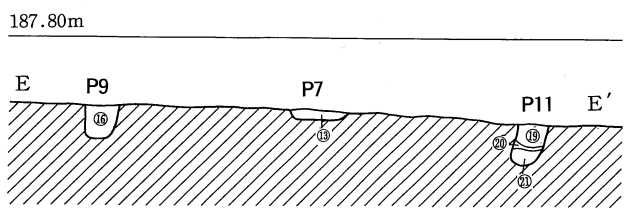
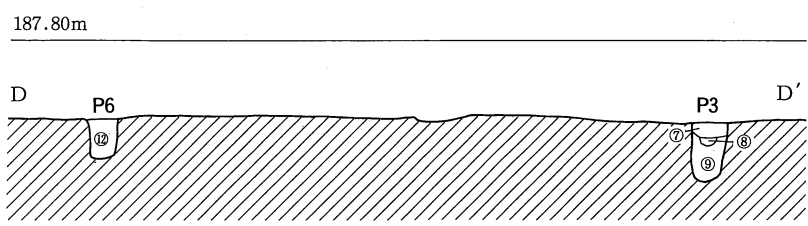
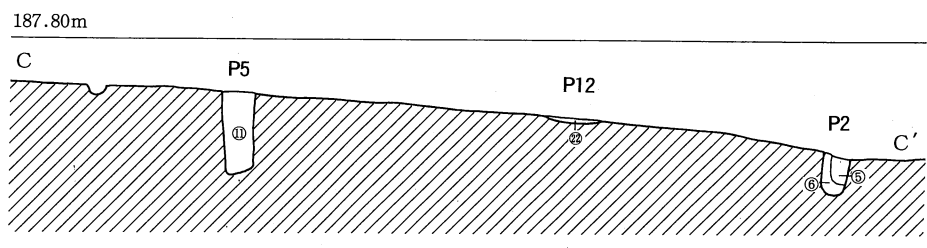
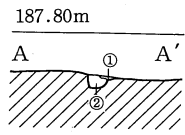
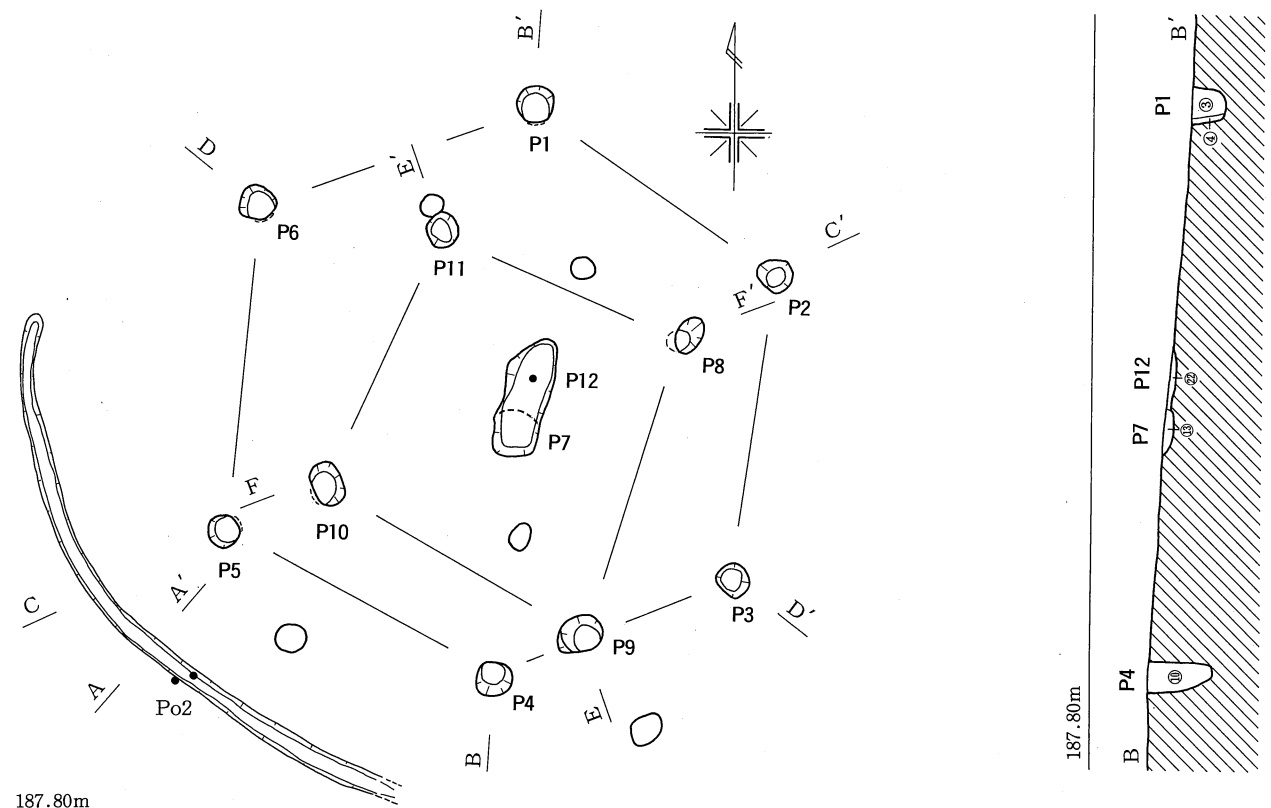
埋土 SI-01Bに伴う埋土は、壁溝埋土の③層のみである。

遺物 SI-01Bに伴う遺物は検出出来なかった。

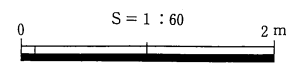
時期 SI-01Aに建て替える前の住居跡と考えられるので弥生時代のものと推測されるが、時期の特定は出来ない。



挿図27 SI-01遺構図



- ① 暗褐色粘質土
- ② 褐色粘質土 (黄褐色土小粒少量混)
- ③ 黒褐色粘質土
- ④ 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土小粒多量混)
- ⑤ 暗褐色粘質土 (黄褐色土多量混)
- ⑥ 暗褐色粘質土 (黄褐色土小粒少量混)
- ⑦ 淡黒褐色粘質土
- ⑧ 黄褐色粘質土
- ⑨ 黒褐色粘質土
- ⑩ 黒褐色粘質土
- ⑪ 暗褐色粘質土 (黄褐色土小粒少量混)
- ⑫ 黒褐色粘質土
- ⑬ 暗褐色粘質土
- ⑭ 暗褐色粘質土 (黄褐色土小ブロック少量混)
- ⑮ 黒褐色粘質土
- ⑯ 暗褐色粘質土 (黄褐色土小ブロック少量混)
- ⑰ 褐色粘質土 (暗褐色・暗黄褐色土小ブロック混)
- ⑱ 暗褐色粘質土 (黄褐色土大粒少量混)
- ⑲ 黒褐色粘質土
- ⑳ 暗褐色粘質土 (黄褐色土小粒混)
- ㉑ 黒褐色粘質土
- ㉒ 褐色粘質土



挿図28 SI-02遺構図

### SI-02 (挿図28・29 図版5・13)

位置 調査地の北寄り、G-3グリッドの西部を中心とし、標高187.3m付近に位置する。

本遺構の南側約3mにSI-01、南東側約4mにSB-01が位置する。

建て替え SI-02には少なくとも1度の建て替えが認められる。建て替え後をSI-02A、建て替え前をSI-02Bとした。

#### SI-02A

形態 遺存状態は悪く、本来は全周していたと考えられる壁溝は南西側部分でのみ検出され、全体の約4分の1程度が遺存していたにすぎない。残存する壁溝から平面形は円形であったと推測される。残存部では支柱穴の端から壁溝の外側肩部までは約1.0mである。これを壁溝の遺存していない東側に適用して住居跡の規模を求めると、東西約7.1m、南北約6.8mであった。床面積は推定で37.8㎡である。壁体は全く残っていない。

壁溝は断面形が角張った「U」字状を呈し、幅9~18cm、深さ7~11cmを測る。

支柱穴はP1~P6の6個あり、それぞれの規模(長軸×短軸-深さ)は、P1(30×28-26)cm、P2(27×25-38)cm、P3(27×25-50)cm、P4(30×29-54)cm、P5(28×26-67)cm、P6(30×28-33)cmを測る。支柱穴は直立するかやや外傾気味に掘り込まれている。埋土はP2・P5が暗褐色の土、残る4個は黒褐色かやや薄い淡黒褐色の土である。

支柱穴間距離はP1-P2から順にP6-P1まで2.4m・2.4m・2.1m・2.4m・2.6m・2.3mであり、対角線上に位置するP1-P4・P2-P5・P3-P6のそれぞれの距離は4.5m・4.8m・4.8mを測る。

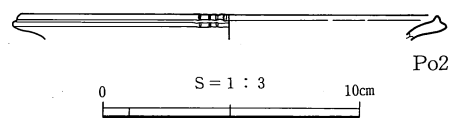
中央ピットは6個の支柱穴のほぼ中央に位置するP7である。隅丸形状を呈し、その規模は(36×34-10)cmである。埋土は暗褐色の土である。検出時には後述するSI-02Bの中央ピットと切り合っていたため、明確な形態を確認することは出来なかった。

床面にはSI-01のように焼土面の存在が予想されたが、検出面からは検出が出来なかった。

埋土 遺存した住居跡埋土を柱穴埋土を除いて2層に分層したが、②層は壁溝埋土であるためSI-02Aに伴う埋土は①層のみである。なお住居跡床面は削平を受けている可能性があり、①層は攪乱土の可能性も残る。

遺物 弥生土器の甕口縁部Po2が壁溝近くから出土した。

時期 出土したPo2から弥生時代中期中葉と考えられる。



挿図29 SI-02遺物実測図

#### SI-02B

形態 SI-02Bに伴うと考えられる遺構は、支柱穴と中央ピットである。検出された壁溝については、支柱穴からの距離が離れすぎためSI-02Aに伴うものと考えた。

SI-02Bに伴うと考えられる支柱穴はP8~P11の4個が検出できた。それぞれの規模(長軸×短軸-深さ)は、P8(30×22-52)cm、P9(39×28-29)cm、P10(34×24-57)cm、P11(27×23-33)cmを測る。支柱穴はP8は外傾、P9・10は内傾して掘り込まれている。埋土はP9が暗褐色土、P10は褐色土と暗褐色土の2層、P8・11は黒褐色土の上に褐色土ないし暗褐色土の層が存在するもので、黒褐色土の単純層を呈するものはなかった。

支柱穴間距離はP8-P9から順にP11-P8まで2.4m・2.4m・2.2m・2.1mであり、対角線上に位置するP8-P10・P9-P11のそれぞれの距離は3.1m・3.4mを測る。

中央ピットは4個の支柱穴の中央北寄りに位置するP12である。南側をP7に切られており、残存部分は不定形を呈する。その規模は(62以上×39-7)cmである。埋土は褐色土である。

埋土 SI-02Bに伴う埋土は、ピット埋土以外は検出が出来なかった。

遺物 中央ピットのP12埋土中から土器小片が出土したが、図化は出来なかった。

時期 SI-02Aに建て替える前の住居跡と考えられるので弥生時代中期中葉頃のものとして推測されるが、出土した土器片から時期の特定は出来ない。

## 第2節 掘立柱建物跡

### SB-01 (挿図30 図版6)

位置 調査地の北寄り、G-3グリッドの南東部を中心とし、標高187.3m付近に位置する。

本遺構の北側約1mにSK-11、西側約4mにSI-02が位置する。

形態 桁行1間4.3m、梁行1間3.9mの掘立柱建物跡である。柱穴は4個を検出し、それぞれの規模(長軸×短軸-深さ)は、P1(40×38-64)cm、P2(44×31-59)cm、P3(41×35-80)cm、P4(99×44-63)cmを測るが、P3は上部が木の根によって攪乱を受けていたため上部では計測しておらず、本来は長軸・短軸ともこの計測値よりも大きかった可能性が高い。柱穴間距離は、P1-P2から順にP4-P1まで3.9m・4.3m・3.8m・4.1mである。柱穴は直立に掘り込まれている。P4は特異な形態を呈するが断面観察では攪乱ではなく、柱が倒れたとき柱穴の西側を破壊した痕跡と考えられる。そのため、P4の柱は東側に倒れたと推測される。

主軸はN-24°-Eである。

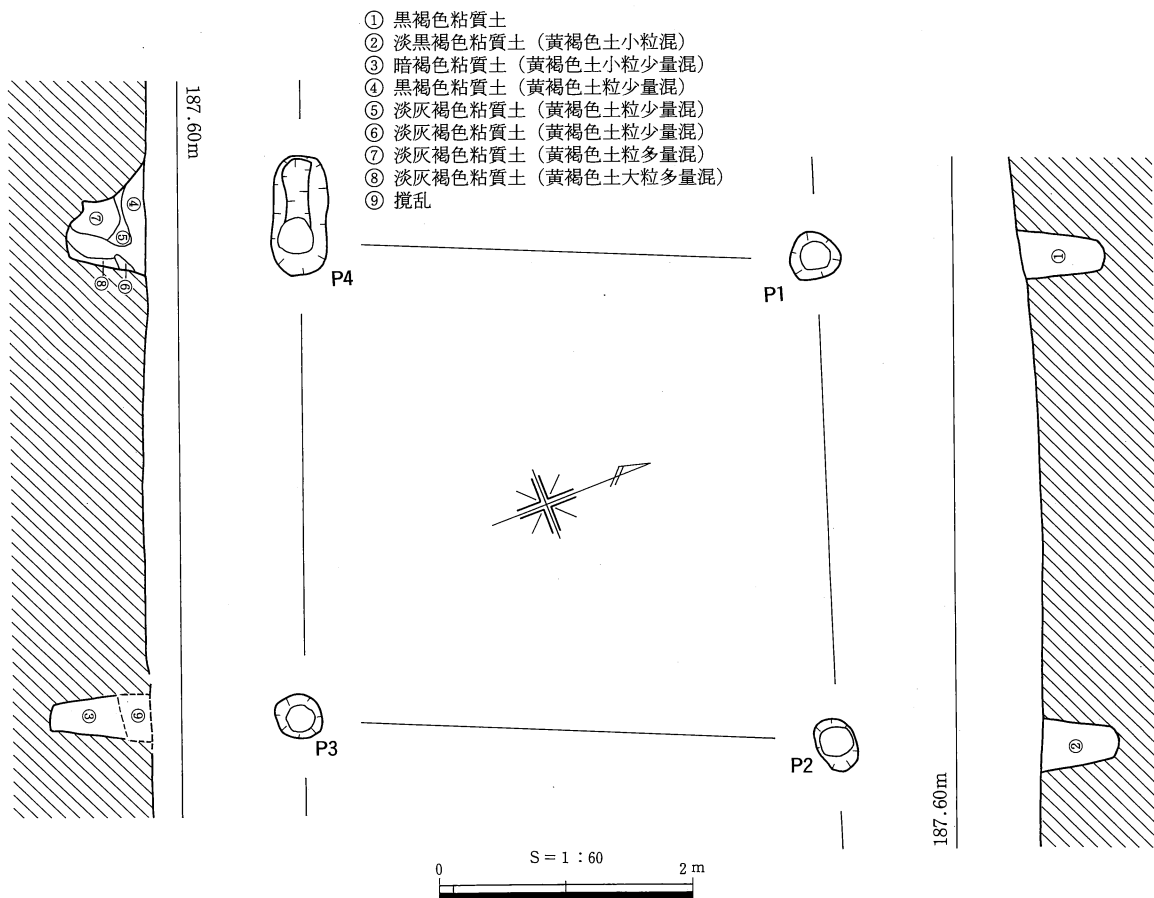
調査地内から検出した柱穴は4個であるが、北側は調査地外であるために不明であり、SB-01がさらに北側に続く可能性もある。

埋土 P1~P3がそれぞれ単独の埋土、P4は5層に分層される不定な埋土である。

遺物 P4埋土中から4点の土器の破片が出土しているが、図化は出来なかった。

性格 柱穴は4個とも径・深さが大きい上に柱穴間距離も広く、特別な建物であった可能性が考えられる。

時期 出土した土器片から弥生時代の建物跡と推測されるが、時期の特定は出来ない。



挿図30 SB-01遺構図

SB-02 (挿図31 図版6)

位置 調査地の北端、E-2グリッドの東部を中心とし、標高187.4m付近に位置する。

本遺構の南側約1mにSK-03、西側約2mにSB-03が位置する。

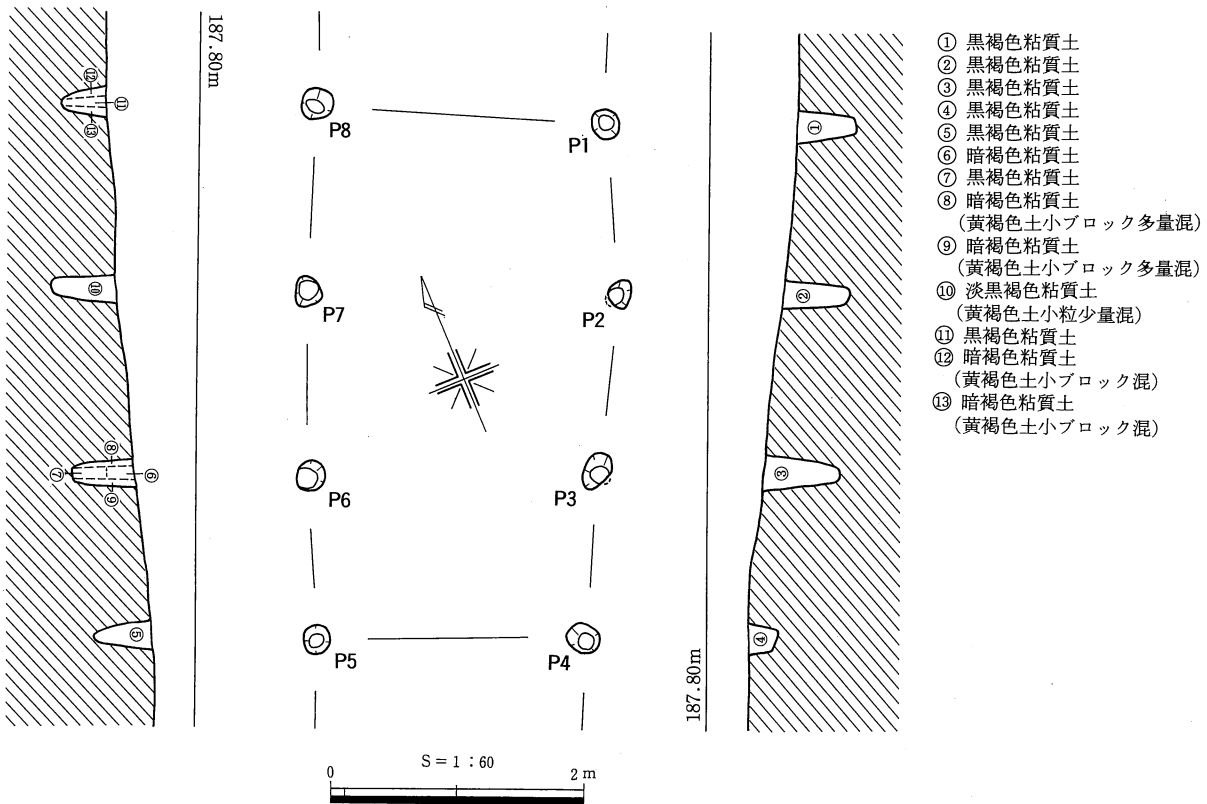
形態 桁行3間4.2m、梁行1間2.3mの掘立柱建物跡である。柱穴は8個で、それぞれの規模(長軸×短軸-深さ)は、P1(25×20-51)cm、P2(23×18-54)cm、P3(31×21-62)cm、P4(26×22-24)cm、P5(24×21-46)cm、P6(26×21-50)cm、P7(24×23-53)cm、P8(26×24-38)cmを測る。柱穴間距離は、P1-P2から順にP8-P1まで1.4m・1.4m・1.3m・2.1m・1.3m・1.5m・1.4m・2.3mである。柱穴はほぼ直立に掘り込まれている。

主軸はN-19°-Eである。

埋土 埋土にはP6とP8に柱痕跡を示す層が存在した。他の柱穴はそれぞれ単独の埋土であった。

遺物 P1・4・6・8の各埋土中から弥生土器と考えられる破片が出土しているが、図化は出来なかった。

時期 出土した土器片から弥生時代の建物跡と推測されるが、時期の特定は出来ない。



挿図31 SB-02遺構図

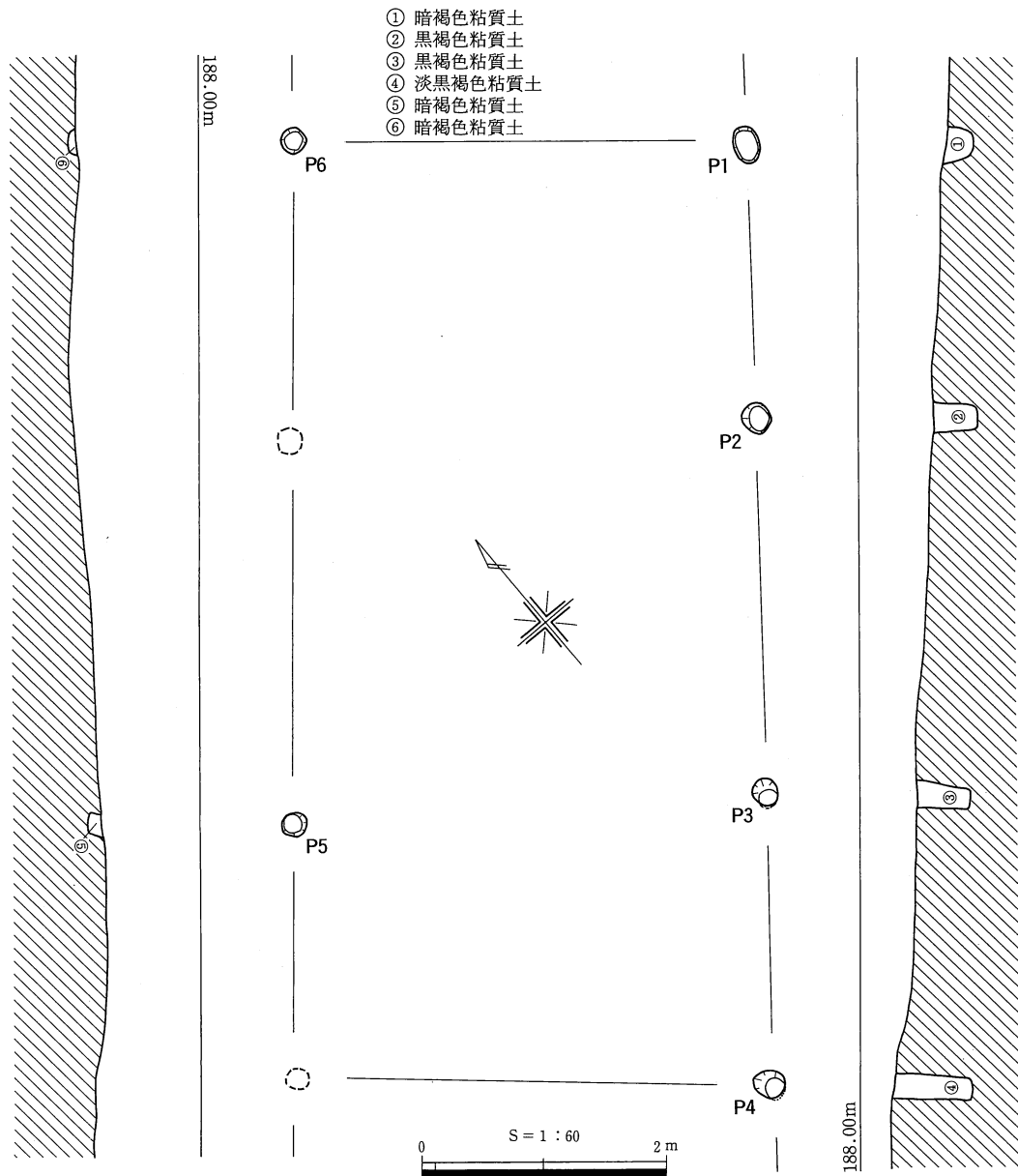
SB-03 (挿図32 図版6)

位置 調査地の北端、E-2グリッドの南西部を中心とし、標高187.7m付近に位置する。

本遺構の南東側約1mにSK-04、東側約2mにSB-02が位置する。

形態 桁行3間7.7m、梁行1間3.7mの掘立柱建物跡である。柱穴は、攪乱のために無くなったと考えられる2個を除く6個を検出した。それぞれの規模(長軸×短軸-深さ)は、P1(30×20-23)cm、P2(26×23-38)cm、P3(24×21-44)cm、P4(26×23-62)cm、P5(22×18-13)cm、P6(21×20-9)cmを測る。柱穴間距離は、P1-P2から順にP3-P4まで2.2m・3.1m・2.4m、P5-P6は5.6m、P6-P1は3.7mである。柱穴はほぼ直立に掘り込まれているが、P3・4は北向きにやや内傾している。





挿図32 SB-03遺構図

主軸はN-40°-Eである。

埋土 柱穴の埋土はいずれも単独の埋土で、暗褐色土か黒褐色土である。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

時期 遺物が出土していないため時期の特定はできない。

### 第3節 土坑・土壙墓

#### SK-01 (挿図33)

位置 土坑は調査地の北端近く、F-2グリッド北西隅の標高186.9m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の北西側約3mにSK-16、南西側約2mにSB-02が位置する。

形態 平面形は、検出面は楕円形、底面は隅丸長方形を呈し、断面形はU字状である。規模は、検出面で長軸0.90m×短軸0.41m、底面で長軸0.45m×短軸0.25m、残存する部分の底面までの最大の深さは0.75mを測る。この土坑は底面が狭く、底部と壁部分の境界が明確ではないという特徴が認められる。

底面から3つのピットを検出した。第1ピット(1P)は長軸0.15m×残存部の短軸0.06mの楕円形

状で深さ0.20m、第2ピット（2P）は長軸0.14m×残存部の短軸0.06mの円形状で深さ0.18m、第3ピット（3P）は長軸0.10m×短軸0.08mの楕円形を呈するが深さは不明である。

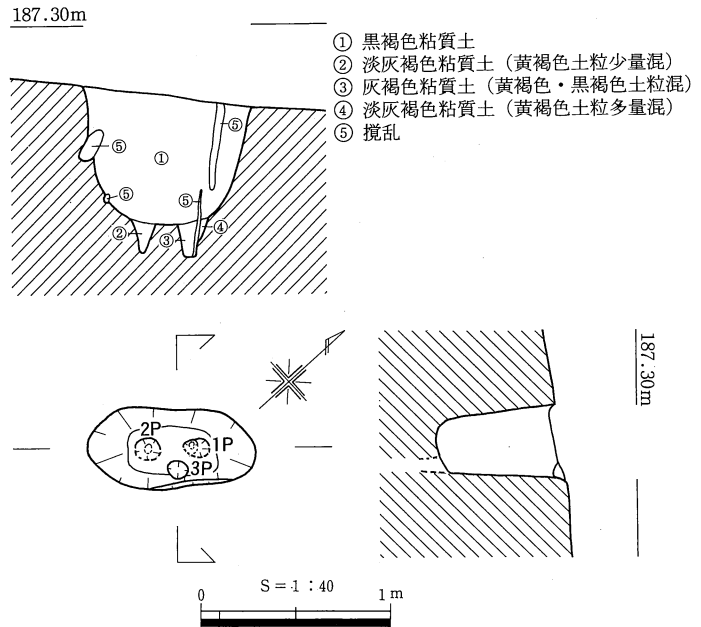
埋土 埋土を5層に分層した。このうち、底面ピット埋土・攪乱土を除く土坑埋土は「クロボク」と呼ばれる黒褐色粘質土の①層のみである。底面に壁体から剥落した地山土・粒が見られないことから、土坑掘り下げ終了後すぐに土坑が埋まったことが考えられる。

埋土に杭痕跡を認めることは出来なかった。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから、落とし穴と考える。

時期 遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落とし穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。



挿図33 SK-01遺構図

#### SK-02（挿図34）

位置 土坑は調査地の北端近く、F-2グリッド東寄りの標高186.9m付近に位置する。

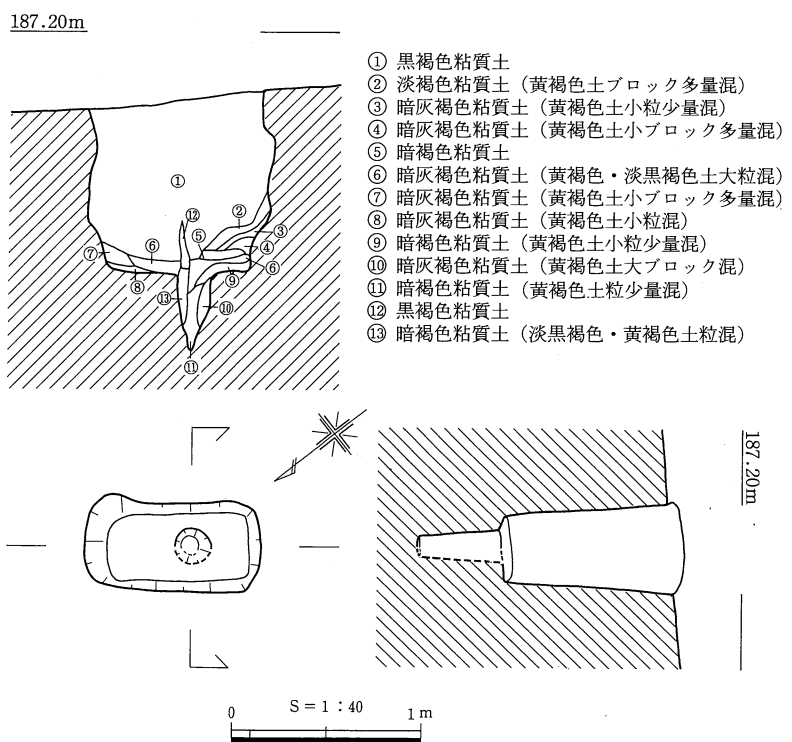
土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の北西側約1mにSK-09、東側約4mにはSK-05が位置する。

形態 平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は長形状である。規模は、検出面で長軸0.95m×短軸0.47m、底面で長軸0.75m×短軸0.36m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.97mを測る。

底面の中央やや南西寄りからピットを検出した。平面形は円形状で、その規模は検出面で長軸0.19m×残存部分での短軸0.11m、深さ0.42mを測る。

埋土 埋土を13層に分層した。このうち、底面ピットの埋土を除く①～⑨層は上層の①層と下層の②～⑨層に大別できる。上層の



挿図34 SK-02遺構図

①層は「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土で地山土の黄褐色土の粒をほとんど含まないもの。下層の②～⑨層は褐色系の土に黄褐色の地山土が多く混じるものである。この地山土は土坑壁体からの崩落に由来すると考えられ、②～⑨層の堆積は比較的連続して進行したが、②層堆積後には壁体の状態が安定して剝落が停止していることから、①層の堆積開始までにはやや時間差が存在したことが推測される。

埋土に杭痕跡が認められた。⑫・⑬層が杭痕跡を示しており、底面ピット掘り下げ後杭を設置し埋め戻して固定したことが分かる。ピットの規模に比べ杭痕跡が小さ過ぎ、その位置が一方に寄っていることから、断面には表れていないが底面ピットの中に複数の杭が設置されていた可能性も考えられる。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから、落とし穴と考える。

時期 遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落とし穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

### SK-03 (挿図35)

位置 土坑は調査地の北端近く、E-2グリッド南東隅の標高187.5m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向かっていく尾根筋に対し主軸が東側に斜交する。

本遺構の北側約1mにSB-02、西側約4mにSK-04が位置する。

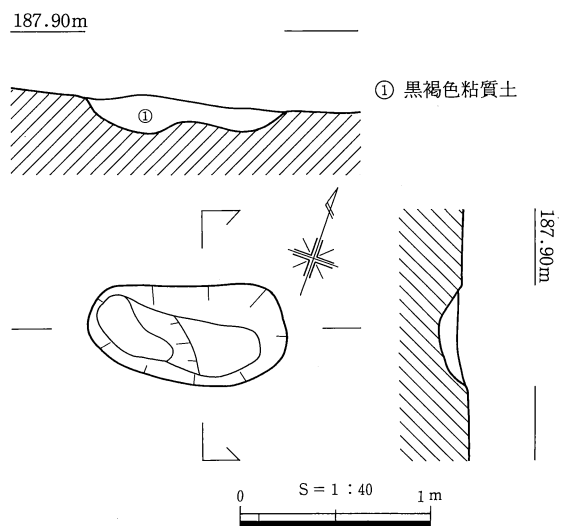
形態 平面形は、検出面は不整な楕円形、底面は不整形を呈し、断面形は長軸方向では中央部が高くなる緩やかなW字状、短軸方向では皿状である。規模は、検出面で長軸1.07m×短軸0.54m、底面で長軸0.90m×短軸0.25m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.20mを測る。

埋土 埋土は黒褐色粘質土の単層である。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時期 時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図35 SK-03遺構図

### SK-04 (挿図36)

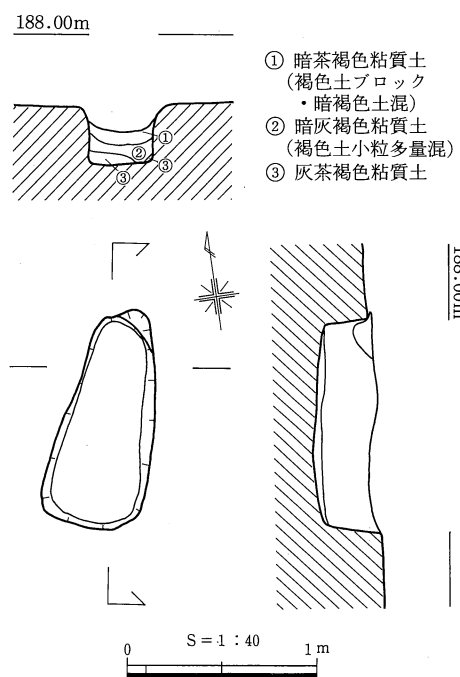
位置 土坑は調査地の北端近く、E-2・3グリッドにまたがる標高187.6m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の西側約1mにSB-03、東側約4mにSK-03が位置する。

形態 平面形は、検出面・底面ともに隅丸長台形を呈し、断面形は方形状である。規模は、検出面で長軸1.14m×短軸0.54m、底面で長軸1.07m×短軸0.48m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.32mを測る。

埋土 埋土は残存部を3層に分層した。黒褐色系の土は認め



挿図36 SK-04遺構図

られなかった。

- 遺物 遺物の出土は認められなかった。
- 性格 土坑形態から土壌墓と推測する。
- 時期 時期を推測する判断材料がなく不明である。

### SK-05 (挿図37 図版7)

位置 土坑は調査地の北端近く、G-2グリッド西側の標高186.7m付近に位置する。  
土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。  
本遺構を切ってSD-02、西側約1mにSK-15・19が位置する。

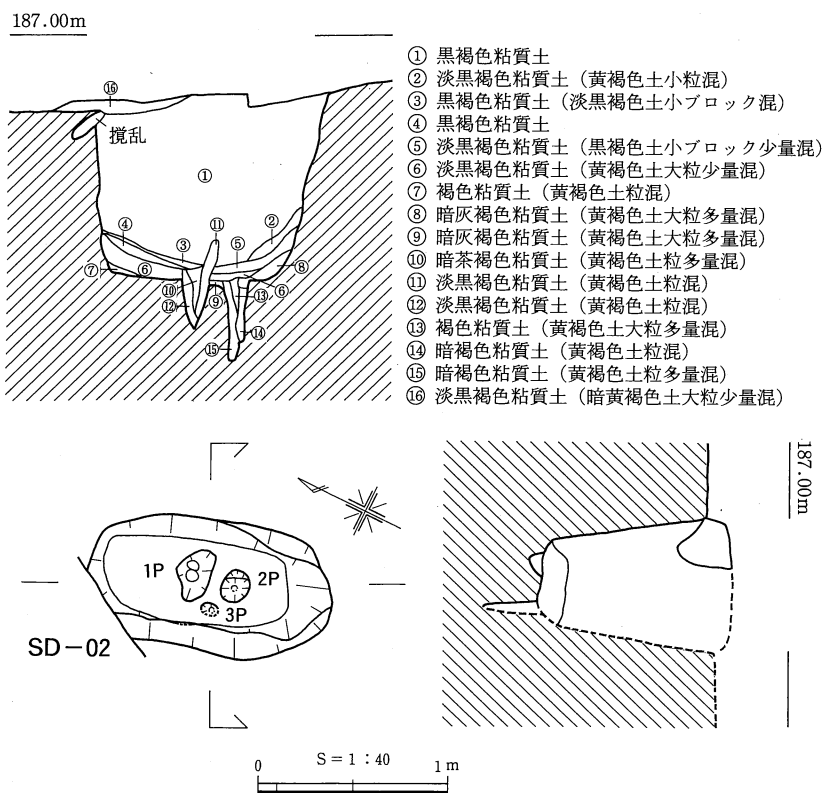
形態 平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸1.30m×短軸0.70m、底面で長軸1.00m×短軸0.45m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.02mを測る。

底面の中央部分から3つのピットを検出した。第1ピット(1P)は長軸0.30m×短軸0.18mの不整形である。底部には2つの穴があり深さ0.31mと0.27mを測る。第2ピット(2P)は長軸0.17m×短軸0.15mの円形で深さ0.40mを測る。第3ピット(3P)は長軸0.11m×残存する部分の短軸が0.03mの楕円形状で深さ0.29mを測る。埋土の杭痕跡の部分で述べるが、1Pには3本、2P・3Pには2本ずつ杭が設置されていたと推測される。

埋土 埋土を16層に分層した。このうち、⑯層は本遺構を切るSD-02の埋土である。また、底面ピット埋土を除く①~⑨層は上層の①~⑥層と下層の⑦~⑨層に大別できる。上層の①~⑥層は「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土を中心とするもので地山土の黄褐色土の粒をほとんど含まないもの。下層の⑦~⑨層は褐色系の土に黄褐色の地山土が多く混じるものである。この地山土は土坑壁体からの崩落に由来すると考えられ、⑦~⑨層の堆積は比較的連続して進行したが、⑦層堆積後には壁体の状態が安定して剝落がほぼ停止していることが埋土から判断されることから、⑥層の堆積開始までにはやや時間差が存在したことが考えられる。

埋土に杭痕跡が認められた。

⑪・⑫層が1Pの杭痕跡を示しており、さらにその東側にも壁面に沿うようにピット底に向けて杭痕跡を示す淡黒褐色土が続いていた。よって、底面ピット掘り下げ後壁面に沿うように3本の杭を放射状に設置し、⑩層の土で埋め戻して固定したことが分かる。2Pでは⑭・⑮層が杭痕跡を示しており、底面ピット掘り下げ後壁面に沿うように2本の杭を設置し、⑬層の土で埋め戻して固定したことが分かる。3Pの埋土は褐色粘質土(黄褐色土粒多量混)で、埋土に杭痕跡を認めることはで



挿図37 SK-05遺構図

きなかったが、完掘すると南と北の壁面に沿って底部にのびる2本の杭痕跡を確認できた。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから、落とし穴と考える。

時期 遺物が出土していないため時期の特定はできないが、SD-02に切られていることからそれ以前の遺構であり、落とし穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

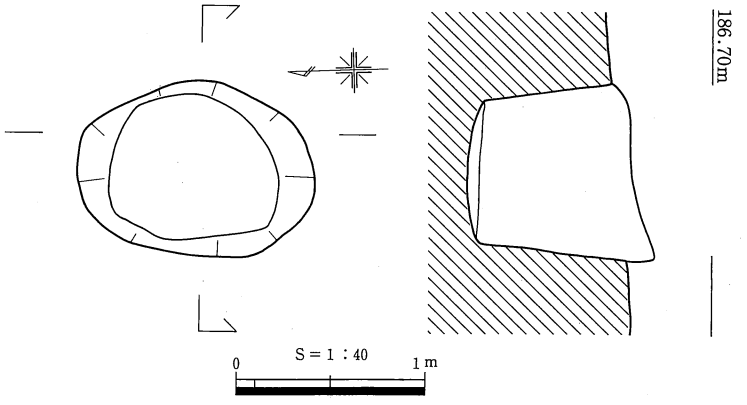
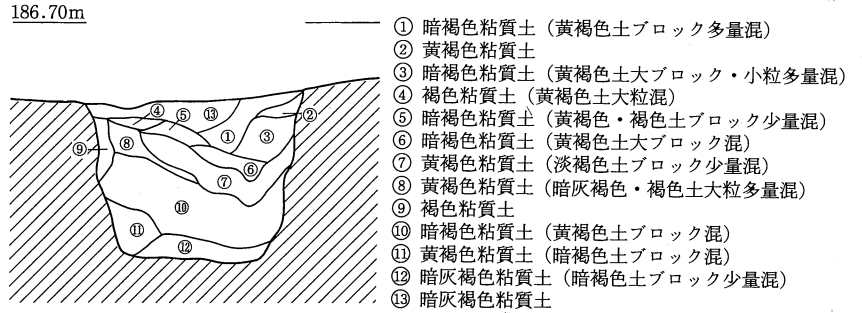
SK-06 (挿図38)

位置 土坑は調査地の北端近く、G-2グリッド南東寄りの標高186.3m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。

SD-05が本遺構を切り、西側約2mにSK-12が位置する。

形態 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は方形状である。規模は、検出面で長軸1.27m×短軸0.93m、底面で長軸0.91m×短軸0.78m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.92mを測る。



挿図38 SK-06遺構図

埋土 埋土を13層に分層した。⑬層はSD-05の埋土である。①～⑫層には黒褐色系の土は認められず、多くの層に地山土のブロックが多量に含まれる。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 土坑形態から土壙墓と推測する。

時期 SD-05に切られることからそれ以前の遺構であるが、時期の特定は出来ない。

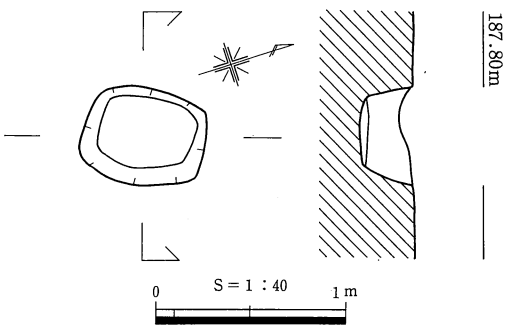
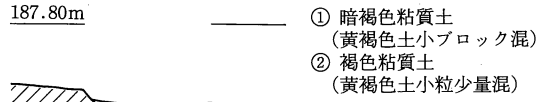
SK-07 (挿図39)

位置 土坑は調査地の北寄り、F-3グリッド北東寄りの標高187.5m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の西側約1mにSD-01、東側約2mにはSI-02が位置する。

形態 平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は漏斗状である。規模は、検出面で長軸0.65m×短軸0.52m、底面で長軸0.50m×短軸0.38m、残存する部分の底面までの最大の深さは0.31mを測る。



挿図39 SK-07遺構図

埋土 埋土を2層に分層した。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。  
 時期 時期を推測する判断材料がなく不明である。

SK-08 (挿図40 図版7)

位置 土坑は調査地の中央部、F-5グリッド北東隅の標高188.6m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の北東側約5mにSD-09、南西側約4mにSD-06が位置する。

形態 平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈するが、検出面は北東隅が土坑肩部崩落のためやや不整になっている。断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸1.14m×短軸0.87m、底面では長軸0.92m×短軸0.64m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.07mを測る。

底面の中央からピットを検出した。平面形は楕円形で、その規模は検出面で長軸0.15m×残存部の短軸0.13m、深さ0.37mを測る。

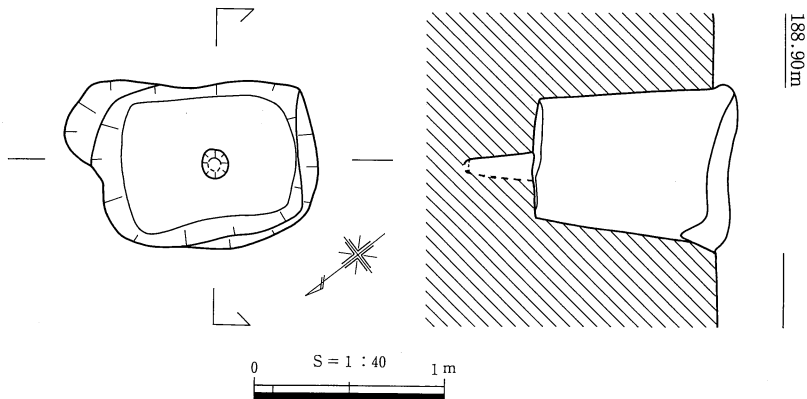
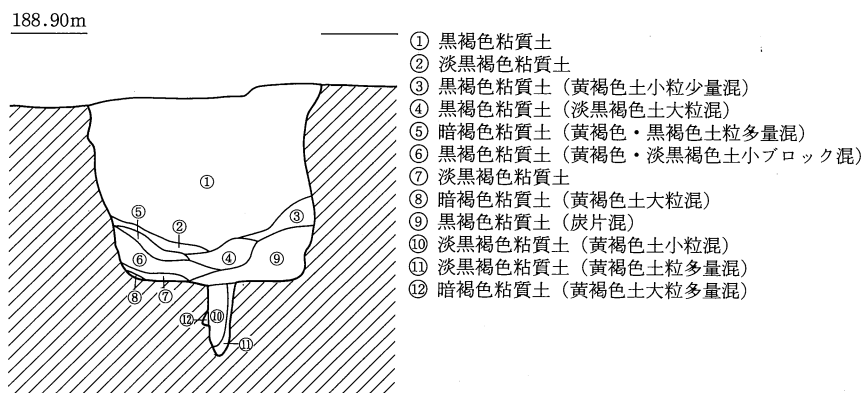
埋土 埋土を12層に分層した。このうち、底面ピット埋土の⑩～⑫層を除く9層は、土坑壁体崩落土の⑤層を除くと「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土が主体で、地山土の粒をほとんど含んでいないことから、土坑掘り下げ後すぐに堆積が進んだことが推測される。

埋土に杭痕跡が認められた。⑩層が杭の痕跡を示すと考えられ、土坑底面にやや大きめの底面ピットを掘った後、杭を⑩層の土によって固定したことが推測される。⑫層は底面ピット掘り下げ時に出来たものであろう。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落とし穴と考える。

時期 遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落とし穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。



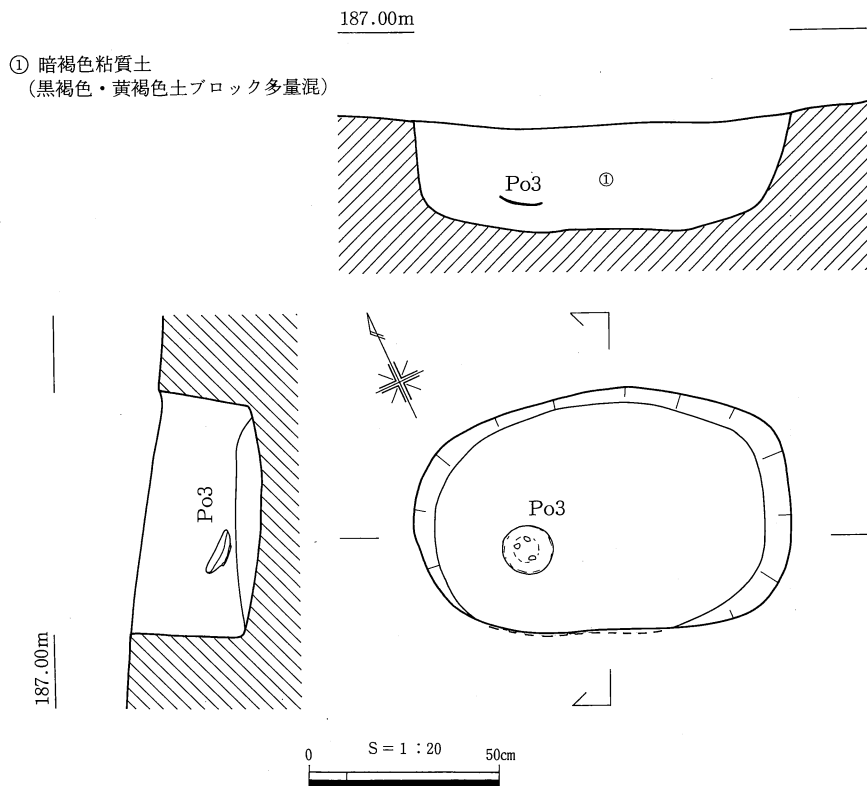
挿図40 SK-08遺構図

SK-09 (挿図41・42 図版7・13)

位置 土坑は調査地の北端近く、F-2グリッド北寄りの標高186.8m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が直交する。

本遺構の南東側約1mにSK-02、西側約4mにSK-01が位置する。



挿図41 SK-09遺構図

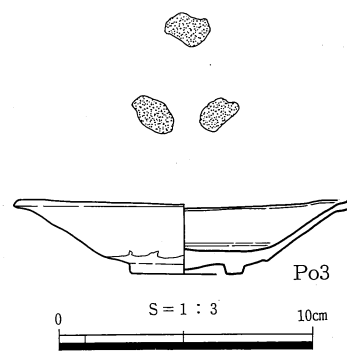
形態 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は長形状である。規模は、検出面で長軸0.99m×短軸0.63m、底面で長軸0.87m×短軸0.61m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.35mを測る。

埋土 埋土は単層で暗褐色粘質土が中心となるものであるが、黒褐色土や黄褐色土のブロックが多量に含まれており、人為的に埋め戻されたことが推測される。

遺物 土坑の底面より8cm程度浮いた位置から内面を上に向けた肥前陶器の皿Po3が出土した。

性格 形態・埋土から土壙墓と考える。

時期 出土遺物から17世紀前半と推測する。



挿図42 SK-09遺物実測図

SK-10 (挿図43)

位置 土坑は調査地の北端近く、G-2グリッド南西寄りの標高186.8m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。

本遺構の北側約1mにSK-05、東側約2mにSK-12・31が位置する。

形態 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸1.16m×短軸0.86m、底面で長軸0.84m×短軸0.56m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.25mを測る。

埋土 埋土は暗褐色粘質土の単層である。

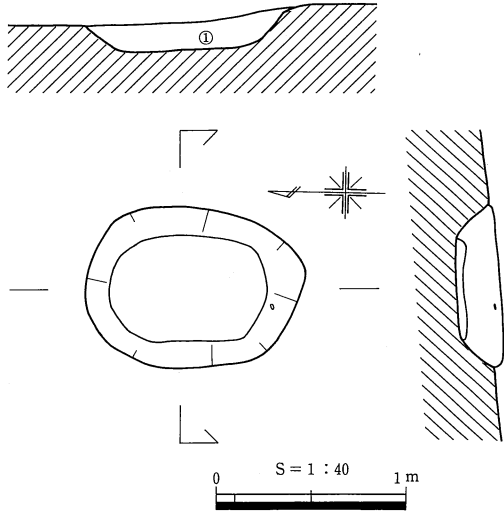
遺物 土坑の検出面近くから土器片が出土したが、小片のため図化は出来なかった。

性格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時期 出土した土器片は弥生土器と考えられるが、土坑自体の時期を表すとは考えにくいものであり、時期の特定は出来ない。

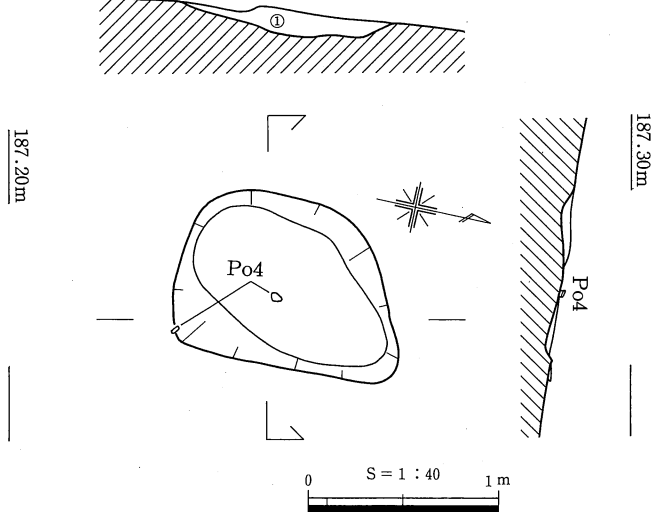


187.20m  
① 暗褐色粘質土



挿図43 SK-10遺構図

187.30m  
① 黒褐色粘質土



挿図44 SK-11遺構図

### SK-11 (挿図44・45 図版13)

位置 土坑は調査地の北寄り、G-3グリッド北東隅の標高187.0m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の南側約1mにSB-01、西側約2mにSI-02が位置する。

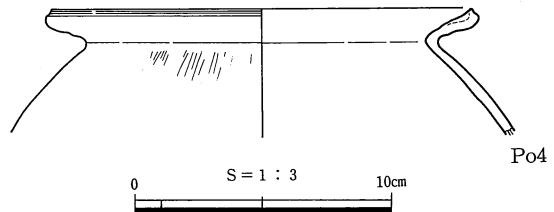
形態 本遺構は現代の植林のため改変を受けており、平面形は、検出面が不整形、底面はやや不整な楕円形を呈し、残存部の断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸1.34m×短軸0.99m、底面で長軸1.17m×短軸0.65m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.20mを測る。

埋土 埋土は黒褐色粘質土の単層である。

遺物 植林のため原位置を動いたと考えられる甕Po4が出土した。

性格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時期 出土した土器より弥生時代中期中葉のものと推測する。



挿図45 SK-11遺物実測図

### SK-12 (挿図46・47 図版8・13)

位置 土坑は調査地の北端近く、G-2グリッド南側の標高186.6m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が直交する。

本遺構の北西側にSK-31、西側約3mにSK-10が位置する。

形態 平面形は、検出面はやや不整な楕円形、底面はやや不整な隅丸長方形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸1.77m×短軸0.57m、底面で長軸1.45m×短軸0.36m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.29mを測る。

埋土 埋土は黒褐色粘質土の単層である。

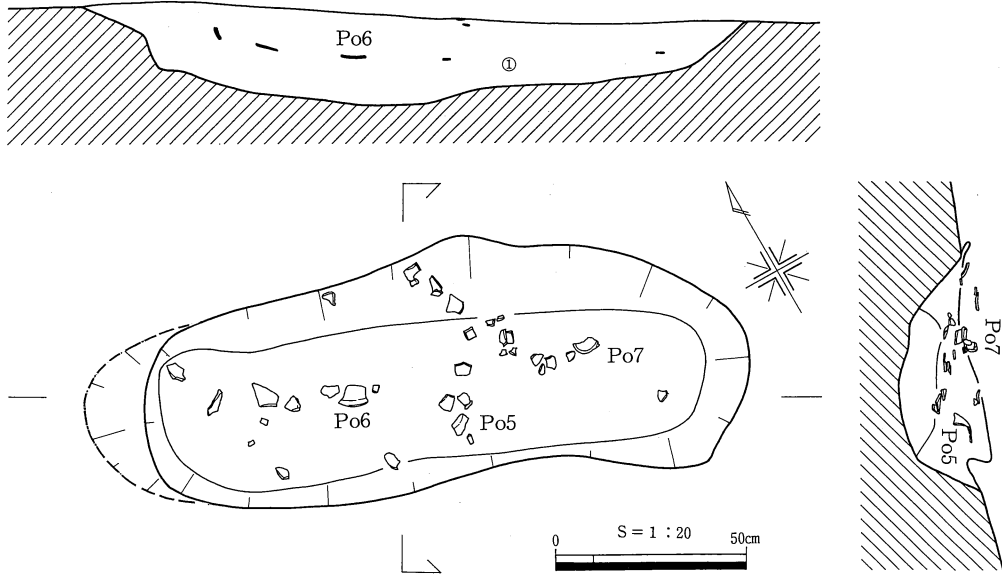
遺物 土坑の中位以上を中心に土器片が出土した。土器はいずれも流れ込みと考えられる。このうち、甕Po5・壺Po6・底部Po7を図化した。

性格 形態・埋土・遺物からでは性格の判断は出来ない。

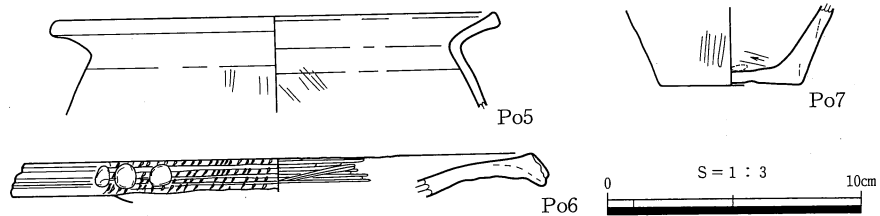
時期 出土した土器より弥生時代中期中葉のものと推測する。

186.80m

① 黒褐色粘質土



挿図46 SK-12遺構図



挿図47 SK-12遺物実測図

### SK-13 (挿図48)

**位置** 土坑は調査地の東寄り、H-6グリッド北寄りの標高187.5m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の北側1mにSD-08・09、東側約3mにSD-15が位置する。

**形態** 平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈するが、底面は中央部がやや括れる。断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸1.28m×短軸0.95m、底面で長軸0.94m×括れた部分での短軸0.62m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.08mを測る。

底面の中央からピットを検出した。平面形は径0.17mの円形で、深さは0.32mを測る。

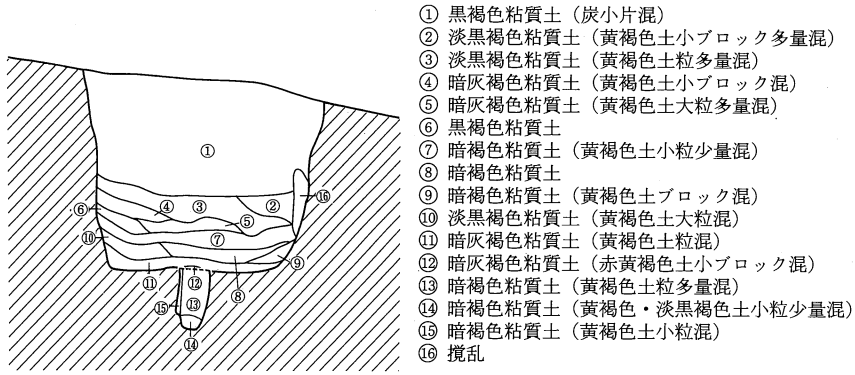
**埋土** 埋土を16層に分層した。このうち、底面ピット埋土・攪乱土の⑬～⑯層を除く12層は、「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土が主体で地山土の粒をほとんど含んでいない上層の①層と、地山土の黄褐色土粒が混じる下層の②～⑫層に大別できる。下層に多く含まれる地山土粒は土坑壁体の剝離土に由来すると推測されるもので、下層の堆積後に①層が堆積を開始した時には地山土がほとんど含まれていないことからここに時間差の存在が考えられる。

埋土に杭痕跡が認められた。⑬・⑭層が杭の痕跡を示していると考えられ、⑮層は杭固定のための埋め土であろう。⑮層下の段はピットを2段状にすることで杭の固定を補強したものであろう。これより、用いられた杭は径が10cmを越える太いものであった可能性がある。

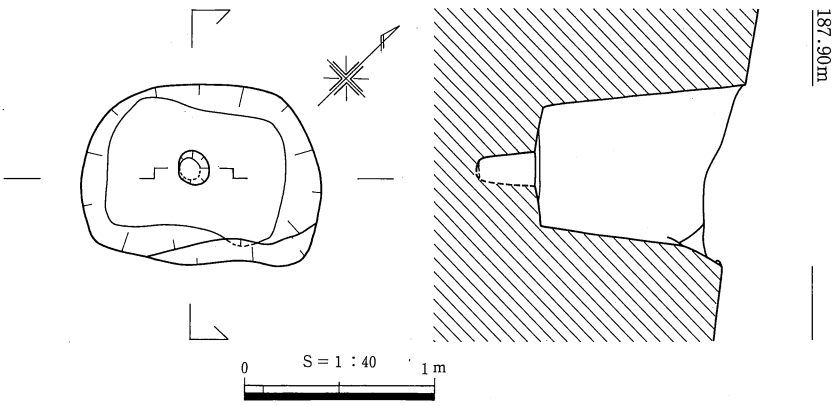
**遺物** 土坑を半截した時点で底面近くから土器胴部片が1点出土したが、完掘掘り下げ時に紛失した。

**性格** 土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落とし穴と考える。

187.90m



- ① 黒褐色粘質土 (炭小片混)
- ② 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土小ブロック多量混)
- ③ 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土粒多量混)
- ④ 暗灰褐色粘質土 (黄褐色土小ブロック混)
- ⑤ 暗灰褐色粘質土 (黄褐色土大粒多量混)
- ⑥ 黒褐色粘質土
- ⑦ 暗褐色粘質土 (黄褐色土小粒少量混)
- ⑧ 暗褐色粘質土
- ⑨ 暗褐色粘質土 (黄褐色土ブロック混)
- ⑩ 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土大粒混)
- ⑪ 暗灰褐色粘質土 (黄褐色土粒混)
- ⑫ 暗灰褐色粘質土 (赤黄褐色土小ブロック混)
- ⑬ 暗褐色粘質土 (黄褐色土粒多量混)
- ⑭ 暗褐色粘質土 (黄褐色・淡黒褐色土小粒少量混)
- ⑮ 暗褐色粘質土 (黄褐色土小粒混)
- ⑯ 攪乱



挿図48 SK-13遺構図

時期 土器の検討が出来なかったため時期の特定はできないが、落とし穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

SK-14 (挿図49)

位置 土坑は調査地の北西端、D-4 グリッド南西寄りの標高189.2m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。

本遺構の南西側約7mにSK-20、西側約9mにSK-33が位置する。

形態 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸0.74m×短軸0.60m、底面で長軸0.40m×短軸0.34m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.19mを測る。

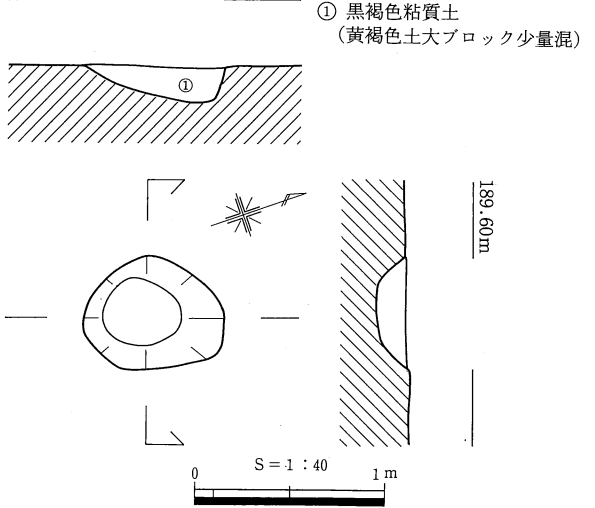
埋土 埋土は黒褐色粘質土の単層である。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時期 時期を推測する判断材料がなく不明である。

189.60m



挿図49 SK-14遺構図

SK-15 (挿図50)

位置 土坑は調査地の北端近く、F-2 グリッド東端の標高186.7m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。

本遺構は南側がSK-19を切り、東側約1mにSK-05が位置する。

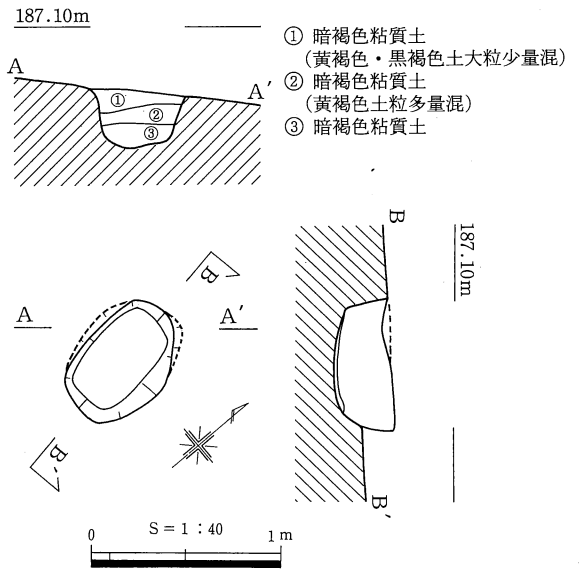
形態 平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形状である。規模は、検出面で長軸0.68m×短軸0.50m、底面で長軸0.55m×短軸0.32m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.32mを測る。

埋土 土坑北西端の埋土を3層に分層した。いずれも暗褐色系の土である。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時期 SK-19を切ることからそれ以降の遺構であるが、時期の特定は出来ない。



挿図50 SK-15遺構図

SK-16 (挿図51)

位置 土坑は調査地の北端、F-2グリッド北西交点部の標高186.8m付近に位置する。土坑の一部は調査地外に続く。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の南側約3mにSB-02、南東側約3mにSK-01が位置する。

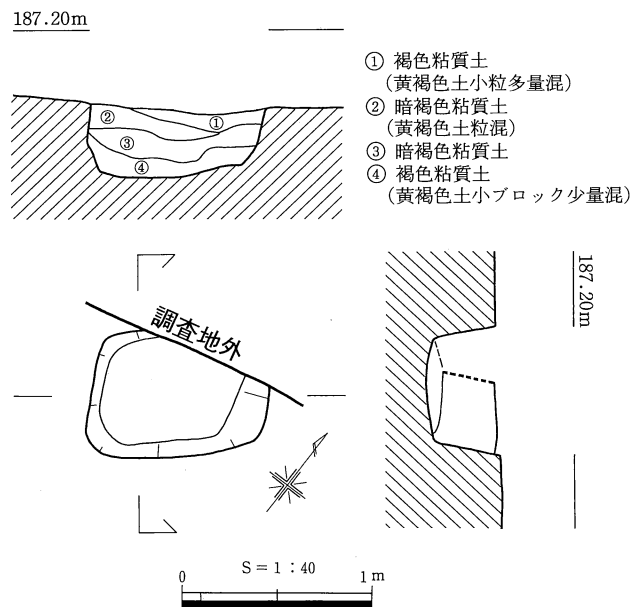
形態 調査部分の平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は長形状である。規模は、検出面で長軸0.95m×短軸0.68m、底面で長軸0.73m×短軸0.56m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.40mを測る。土坑東側底部は木の根の攪乱を受ける。

埋土 埋土を4層に分層した。いずれも褐色・暗褐色系の土である。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時期 時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図51 SK-16遺構図

SK-17 (挿図52)

位置 土坑は調査地の南端、F-7グリッド中央の標高190.0m付近に位置する。

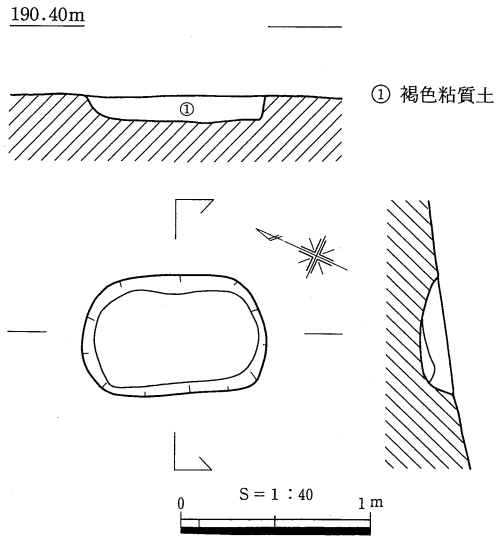
土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構の北東側約10mにSK-18、東側約4mにSD-22が位置する。

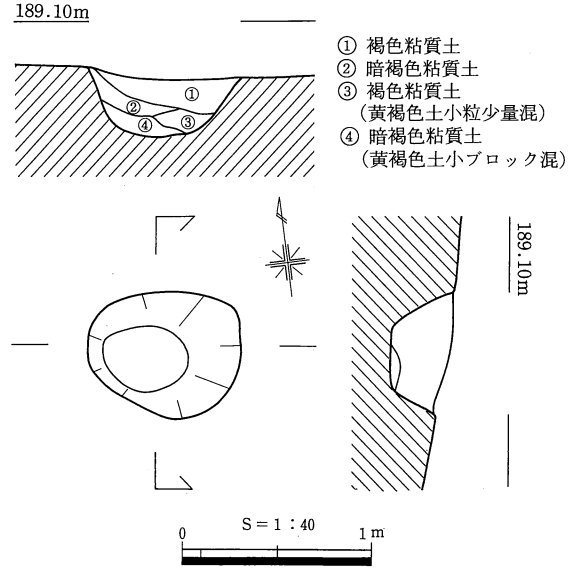
形態 平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は長形状である。規模は、検出面で長軸0.97m×短軸0.64m、底面で長軸0.87m×短軸0.48m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.14mを測る。

埋土 埋土は褐色粘質土の単層である。

遺物 遺物の出土は認められなかった。



挿図52 SK-17遺構図



挿図53 SK-18遺構図

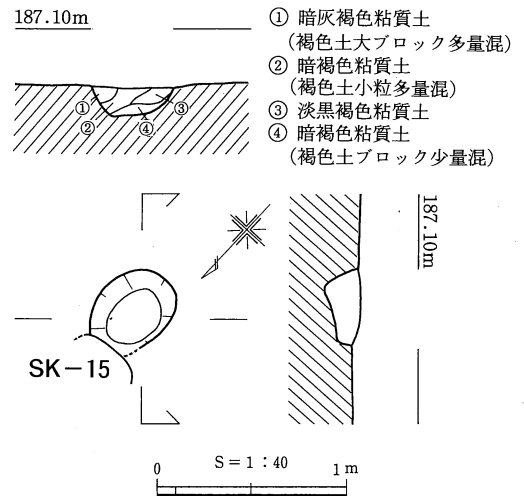
性格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。  
 時期 時期を推測する判断材料がなく不明である。

SK-18 (挿図53)

位置 土坑は調査地の南寄り、G-6グリッド南西寄りの標高188.9m付近に位置する。  
 土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。  
 本遺構の北側約3mにSD-08、東側約7mにSD-20が位置する。  
 形態 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は逆台形状である。規模は、検出面で長軸0.81m×短軸0.68m、底面で長軸0.45m×短軸0.35m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.38mを測る。土坑南側底部が木の根の攪乱を受ける。  
 埋土 埋土を4層に分層した。いずれも褐色・暗褐色系の土であり、④層には地山土ブロックが混じる。  
 遺物 遺物の出土は認められなかった。  
 性格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。  
 時期 時期を推測する判断材料がなく不明である。

SK-19 (挿図54)

位置 土坑は調査地の北端、F-2グリッド東端の標高186.8m付近に位置する。  
 土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。  
 本遺構は北側がSK-15に切られる。  
 形態 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は逆台形状である。規模は、検出面で残存部の長軸0.50m×短軸0.39m、底面で長軸0.33m×短軸0.24m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.16mを測る。  
 埋土 埋土を4層に分層した。  
 遺物 遺物の出土は認められなかった。



挿図54 SK-19遺構図

性格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時期 SK-15に切られることからそれ以前の遺構であるが、時期の特定はできない。

### SK-20 (挿図55・56 図版8・13)

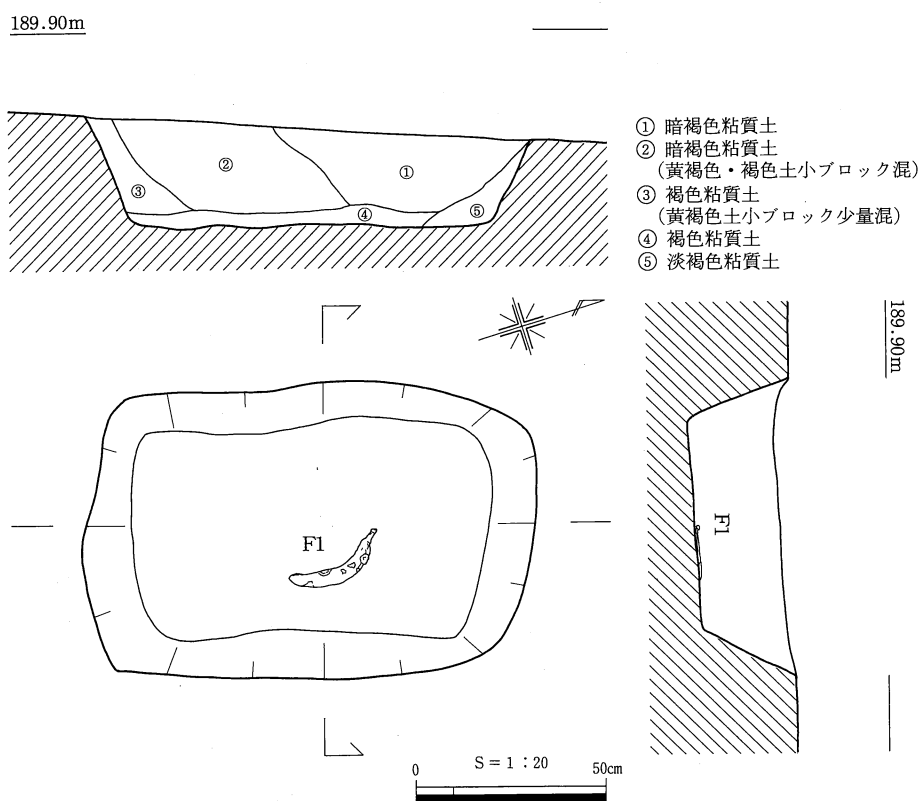
位置 調査地の北西端近く、C-5グリッド北東隅からD-5グリッドに跨る標高189.7m付近に位置する。土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がやや西側に斜交する。

本遺構は北東側約7mにSK-14、南西側約8mにSK-27が位置する。

形態 平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形状である。規模は、検出面で長軸1.19m×短軸0.80m、底面で長軸0.94m×短軸0.57m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.30mを測る。

埋土 埋土を5層に分層した。いずれも褐色系の土である。

遺物 土坑の底部から鉄製の鎌が出土した。柄部は残っていないが、茎部に残った木質から装着角度が推定



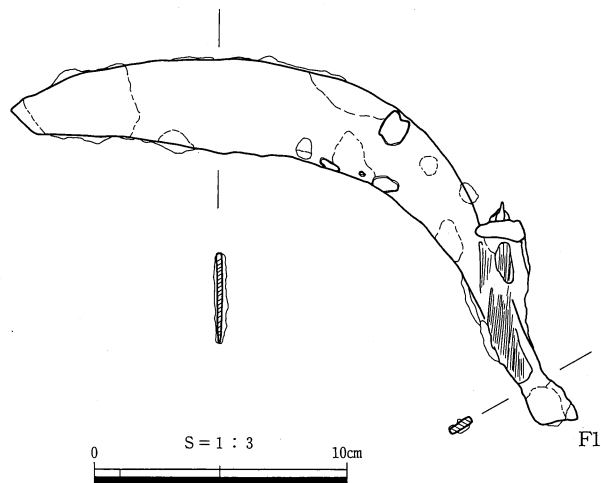
挿図55 SK-20遺構図

でき、約125度である。柄部の長さは土坑規模から30cm程度であったことが推測される。

性格 土坑は形が整い丁寧な掘り下げである。また、遺跡の所在する鶴田部落には埋葬に際して墓に魔除けの鎌と箒を立てる習俗が存在していたという。本遺構例は土坑底部から出土しており、立てたものではないが同じ目的で使用されたことが推測される。よって、本遺構は土壌墓と推測する。

時期 時期の特定は出来ないが、出土した鉄鎌から中・近世段階の遺構と推測する。

註 (1) 野口誠一『郷土史 鶴田村』 1989

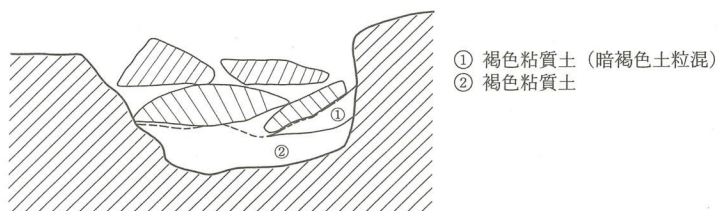


挿図56 SK-20遺物実測図

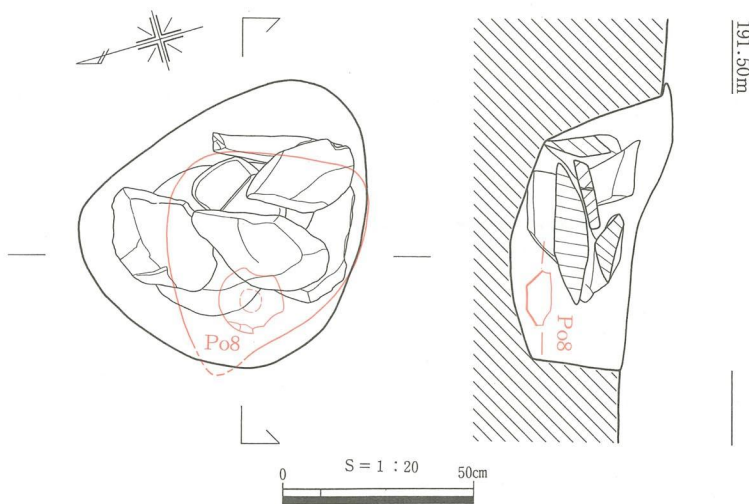
SK-21 (挿図57・58 図版8・14)

- 位置** 土坑は調査地の西端近く、C-6グリッド南西寄りの標高191.3m付近に位置する。  
土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。  
本遺構は北東側約7mにSK-27、南側約1mにSK-37が位置する。
- 形態** 平面形は、検出面・底面ともに隅丸三角形を呈し、断面形は不整な逆台形状である。規模は、検出面で長軸0.81m×短軸0.68m、底面で長軸0.61m×短軸0.52m、残存部分での底面までの最大の深さは0.43mを測る。検出面と底面ではその3つの隅の位置が振れていることが注目される。
- 埋土** 埋土の下層残存部を2層に分層した。上部については土坑内の礫のために十分な土層観察ができなかったため不明としたが、①・②層のような褐色系の土であった。
- 遺物** 土坑底部から土師質土器碗Po8が出土した。Po8の東側欠失部は埋められた時には無かったものと考えられる。また、土坑中央から東側にかけては30~40cm程度の礫が7個埋められていた。このうち東端の1つのみが直立して埋められ、南端の1つのみが東西方向に長軸を持っていた。
- 性格** 底面に土器があり、礫が土坑を覆うような状態で埋められていたことから土壙墓ではないかと推測し、埋土のリン・カルシウム分析を実施した。詳細は附論2に譲るが、分析結果では遺体を埋葬した可能性はほぼ否定された。そのため、土坑の直接的な性格は不明であるが祭祀的な性格を持っていることは間違いなからう。
- 時期** 底面から出土したPo8から10世紀代の土坑と推測する。

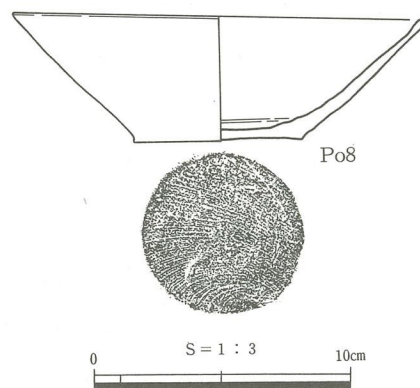
191.50m



- ① 褐色粘質土 (暗褐色土粒混)
- ② 褐色粘質土



挿図57 SK-21遺構図



挿図58 SK-21遺物実測図

SK-22 (挿図59)

- 位置** 土坑は調査地の南端、G-7グリッド南端からG-8グリッドにまたがる標高188.8m付近に位置する。
- 土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。



本遺構はSD-18と切りあうが、SD-18の掘り下げ後に検出したためにその切り合い関係は不明である。SD-18の東側肩部に沿うように位置する。

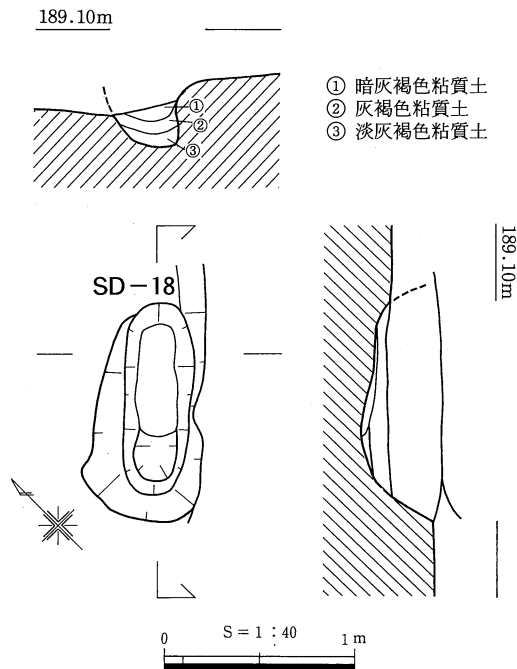
**形態** 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で残存部の長軸1.17m×短軸0.59m、底面で長軸0.84m×短軸0.22m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.42mを測る。

**埋土** 埋土を3層に分層した。いずれも灰褐色系の土である。

**遺物** 遺物の出土は認められなかった。

**性格** 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

**時期** 本遺構とSD-18との切り合い関係が不明であるため、他に時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図59 SK-22遺構図

### SK-23 (挿図60)

**位置** 土坑は調査地の中央、E-5グリッド南東隅からF-5グリッドに跨る標高189.4m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構は上部にあるSD-08に切られる。

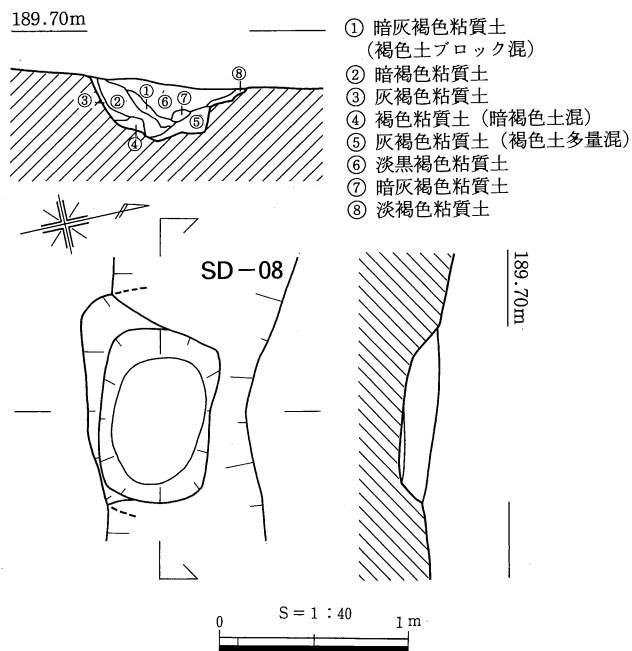
**形態** 平面形は、検出面についてはSD-08に切られているため残存部がわずかであり不明確であるが、ほぼ隅丸長方形形状であろう。底面は現状では楕円形を呈する。断面形は逆台形状である。規模は、検出面で残存部の長軸1.10m×短軸0.64m、底面で長軸0.66m×短軸0.48m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.35mを測る。

**埋土** 埋土を8層に分層したが、⑥~⑧層はSD-08の埋土であり、土坑埋土は①~⑤層の5層である。

**遺物** 遺物の出土は認められなかった。

**性格** 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

**時期** 本遺構はSD-08に切られていることからそれ以前の遺構であるが時期の特定はできない。



挿図60 SK-23遺構図

### SK-24 (挿図61・62 図版14)

**位置** 土坑は調査地の東端、K-4グリッド北東寄りの標高183.0m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対して主軸がほぼ直交し、東側の谷に面して開口する。

本遺構は北東側約2mにSK-25、西側約6mにSS-02が位置する。

**形態** 本遺構は横穴状に掘り込まれたものである。平面形は隅丸長方形形状を呈し、断面形は楕円形状である。

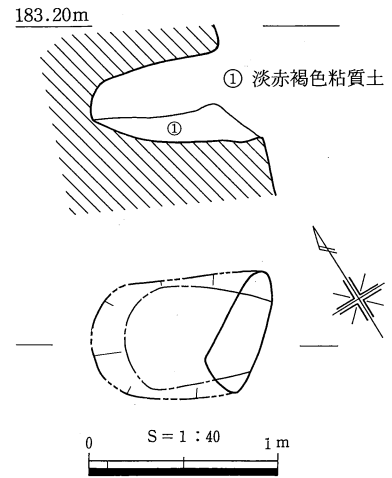
規模は、平面形は長軸0.96m×短軸0.65m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.45mを測る。

埋土 埋土は淡赤褐色粘質土の単層である。堆積は流れ込みによるものである。

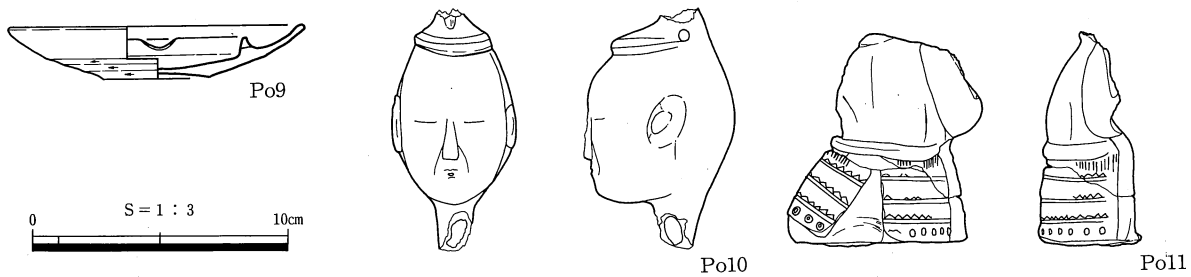
遺物 陶磁器類の破片が多く出土した。図化したPo9・Po10・Po11などの土器・土製品は投げ込まれたような出土状態であった。Po10は地元の「泥天神」と呼ばれる土人形の頭部である。

性格 断定は出来ないが、当初はいも穴などの目的で作られた後にゴミ穴として使われたのであろう。

時期 出土した土器は近世～近・現代のものであるが、土坑に本来伴うものとは考え難く、時期の特定は出来ない。



挿図61 SK-24遺構図



挿図62 SK-24遺物実測図

SK-25 (挿図63・64 図版14)

位置 土坑は調査地の東端、K-4グリッド北東隅の標高182.8m付近に位置する。

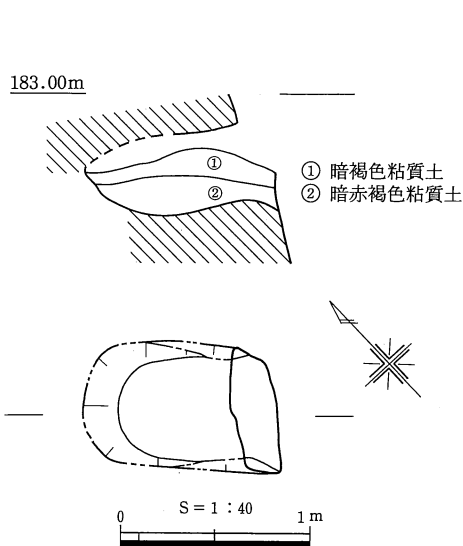
土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交し、東側の谷に面して開口する。本遺構は南西側約2mにSK-24、西側約7mにSS-02が位置する。

形態 本遺構は横穴状に掘り込まれたものである。平面形は隅丸長形状を呈し、断面形は楕円形状である。規模は、平面形は長軸1.04m×短軸0.68m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.42mを測る。

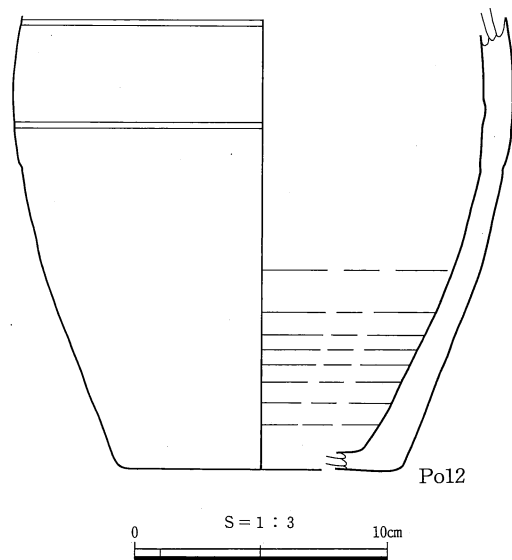
埋土 埋土を2層に分層した。流れ込みによる堆積である。

遺物 陶磁器類の破片が多く出土した。Po12などの土器は投げ込まれたような出土状態であった。

性格 断定は出来ないが、当初はいも穴などの目的で作られた後にゴミ穴として使われたのであろう。



挿図63 SK-25遺構図



挿図64 SK-25遺物実測図

時期 出土した土器は近世～近・現代のものであるが、土坑に本来伴うものとは考え難く、時期の特定は出来ないが、同様の形態を呈するSK-24が近接して位置することから、同時期の遺構と推測される。

### SK-26 (挿図65)

位置 土坑は調査地の東寄り、G-5グリッド東寄りの標高188.0m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構はSD-09と切り合うが、SD-09の掘り下げ後に検出したためにその切り合い関係は不明である。SD-09の南側肩部に沿うように位置する。

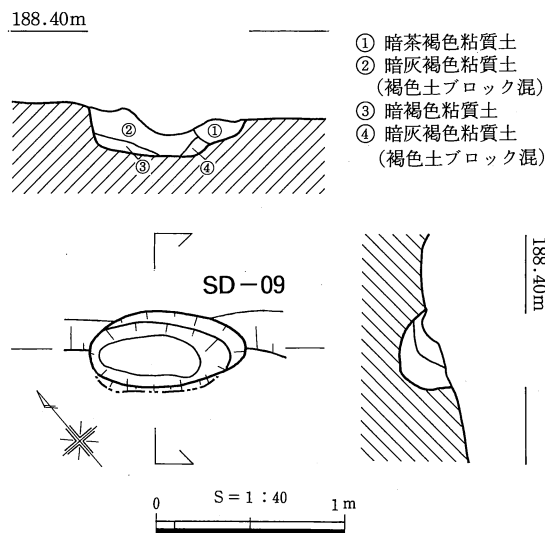
形態 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は逆台形状である。規模は、検出面で残存部の長軸0.83m×短軸0.41m、底面で長軸0.54m×短軸0.21m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.28mを測る。

埋土 埋土を4層に分層した。②・④層には褐色土ブロックが混じる。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時期 時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図65 SK-26遺構図

### SK-27 (挿図66)

位置 土坑は調査地の西寄り、C-5グリッド南端の標高190.5m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構の北側約9mにSK-33、南側約7mにSK-21が位置する。

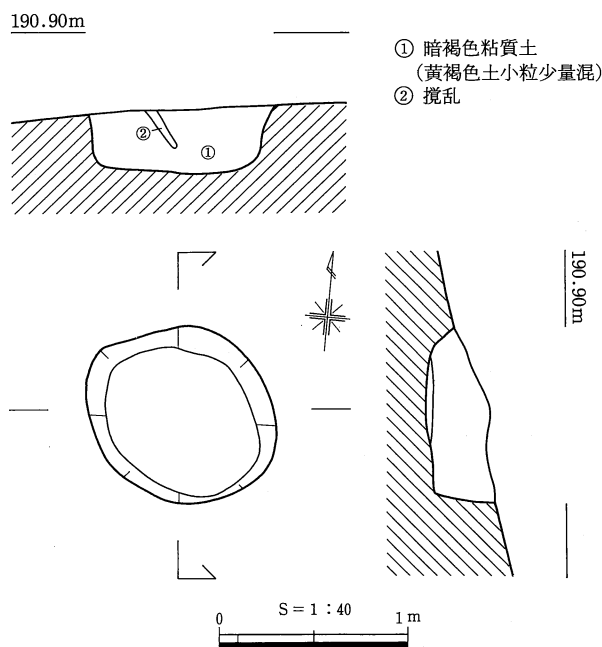
形態 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は長形状である。規模は、検出面で長軸1.08m×短軸0.90m、底面で長軸0.90m×短軸0.71m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.36mを測る。

埋土 埋土は木の根攪乱の②層を除くと暗褐色粘質土の単層である。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時期 時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図66 SK-27遺構図

### SK-28 (挿図67・105)

位置 土坑は調査地の南東寄り、H-7グリッド北西隅の標高187.4m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構はSD-18に上部を切られ、SX-01を切る。南西側約1mにはSK-29・30が位置する。

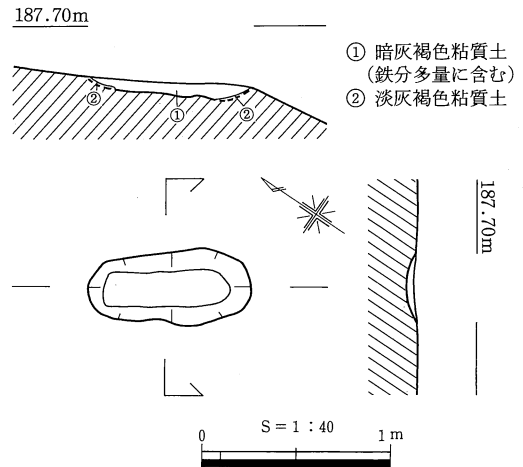
**形態** 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸0.88m×短軸0.40m、底面で長軸0.67m×短軸0.18m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.14mを測る。

**埋土** 埋土を2層に分層した。②層は薄く貼り付けられたような状態であった。

**遺物** 遺物の出土は認められなかった。

**性格** 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

**時期** 詳細は第8節に譲るが、SD-18に上部を切られていることからSD-18形成以前の遺構である。



挿図67 SK-28遺構図

**SK-29 (挿図68・105)**

**位置** 土坑は調査地の南東寄り、H-7グリッド北西隅の標高187.5m付近に位置する。土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構は切り合い関係が不明なSX-01盛土除去後の検出で、SD-18に上部を切られ、南側のSK-30と切り合う。北東側約1mにはSK-28が位置する。

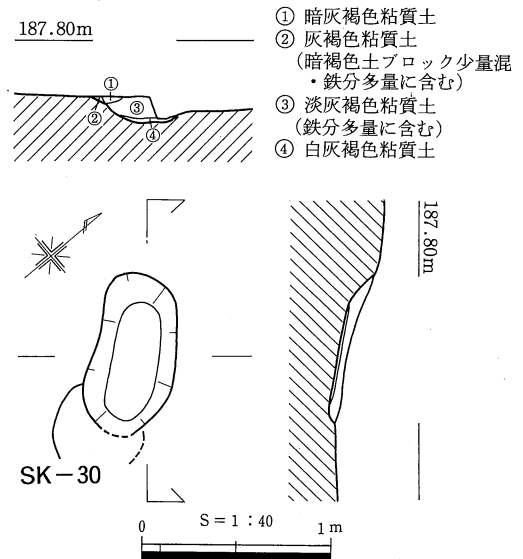
**形態** 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸0.86m×短軸0.46m、底面で長軸0.63m×短軸0.25m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.23mを測る。

**埋土** 埋土を4層に分層した。いずれも灰褐色系の土である。

**遺物** 遺物の出土は認められなかった。

**性格** 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

**時期** 詳細は第8節に譲るが、SD-18に上部を切られていることからSD-18形成以前の遺構である。



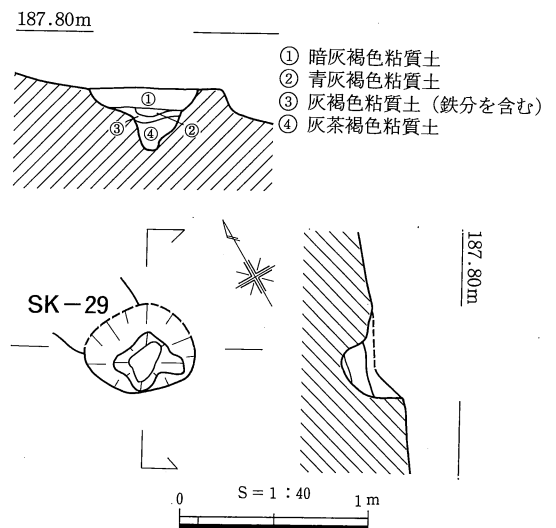
挿図68 SK-29遺構図

**SK-30 (挿図69・105)**

**位置** 土坑は調査地の南東寄り、H-7グリッド北西隅の標高187.5m付近に位置する。土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構は切り合い関係が不明なSX-01盛土除去後の検出で、SD-18に上部を切られ、北側のSK-29と切り合う。西側約1mにSK-32が位置する。

**形態** 平面形は、検出面は残存部が円形状、底面は不定形を呈する。断面形も不定形である。規模は、検出面の残存部で長軸0.59m×短軸0.47m、底面で長軸0.23m×短軸0.13m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.33mを測る。



挿図69 SK-30遺構図

- 埋 土 埋土を4層に分層した。いずれも灰褐色系の土である。
- 遺 物 遺物の出土は認められなかった。
- 性 格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。
- 時 期 詳細については第8節に譲るが、SD-18に上部を切られていることからSD-18形成以前の遺構である。

**SK-31 (挿図70)**

位 置 土坑は調査地の北端近く、G-2グリッド中央の標高187.00m  
高186.6m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。

本遺構の南東側にSK-12、西側約2mにSK-10が位置する。

形 態 平面形は、検出面は楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。断面形は逆台形状である。規模は、検出面で長軸0.75m×短軸0.57m、底面で長軸0.55m×短軸0.31m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.24mを測る。

- 埋 土 埋土を2層に分層した。
- 遺 物 遺物の出土は認められなかった。
- 性 格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。
- 時 期 時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図70 SK-31遺構図

**SK-32 (挿図71・105)**

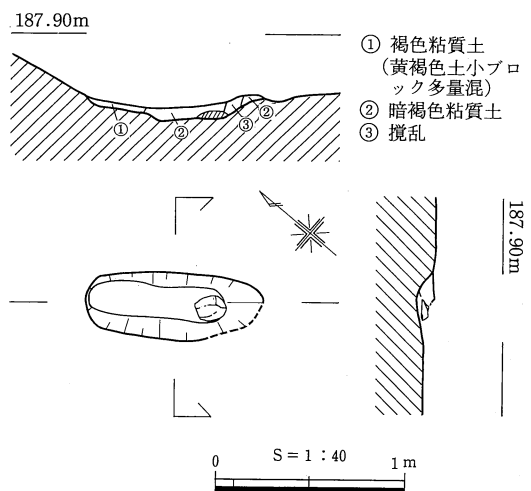
位 置 土坑は調査地の南東寄り、H-7グリッド北西隅の標高187.5m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構はSX-01を切った後その上部にはさらにSX-01に伴う盛土を施す。SD-18には上部を切られる。北東側約1mにはSK-29・30が位置する。

形 態 平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は逆「ハ」の字状である。規模は、検出面で長軸0.95m×短軸0.36m、底面では長軸0.72m×短軸0.19m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.14mを測る。

- 埋 土 埋土は木の根による攪乱の③層を除くと2層に分層出来る。
- 遺 物 出土した遺物はないが、底面から平たい礫が出土した。
- 性 格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。
- 時 期 詳細は第8節に譲るが、SD-18に上部を切られていることからSD-18形成以前の遺構である。



挿図71 SK-32遺構図

SK-33 (挿図72)

位置 土坑は調査地の西端近く、C-4グリッド南端の標高189.4m付近に位置する。土坑の一部は調査地外に続く。

調査地内部分から判断して、土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が東側に斜交するようである。

本遺構の南側約9mにSK-27、南東側約3mにSK-20が位置する。

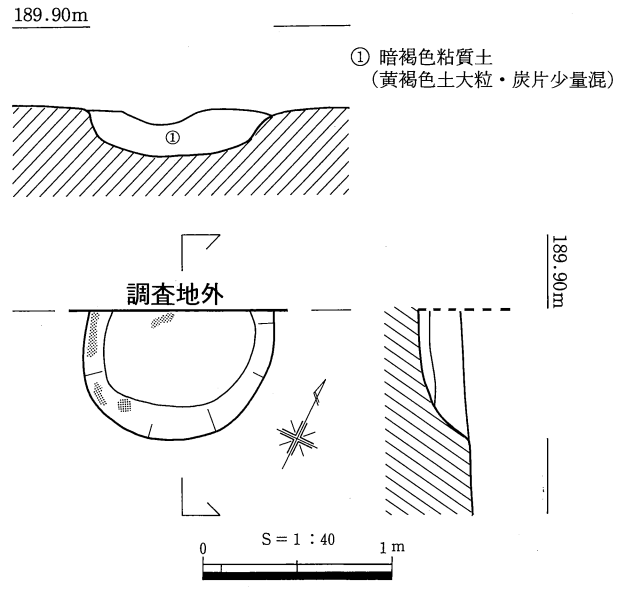
形態 本遺構は北側部分が調査地外となっているため本来の形態は不明であるが、調査地内部分での平面形は、検出面は半円形状、底面では半楕円形状を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面では長軸1.00m×残存部の短軸0.68m、底面では長軸0.80m×残存部の短軸0.50m、残存部分での底面までの最大の深さは0.26mを測る。

埋土 埋土は暗褐色粘質土の単層である。底面および壁面には焼土痕が残る。

遺物 遺物の出土は認められなかったが、埋土中に炭片が含まれていた。

性格 性格を判断することは出来ないが、焼土痕が残る炭片が含まれていることから火を焚いていることが分かる。

時期 時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図72 SK-33遺構図

SK-34 (挿図73・105)

位置 土坑は調査地の南東寄り、H-7グリッド西端の標高187.4m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。

本遺構はSX-01の盛土除去後に検出されたものだが、切り合い関係を確認することは出来なかった。東側には接するようにしてSK-35、西側にも接するようにしてSD-18が位置する。

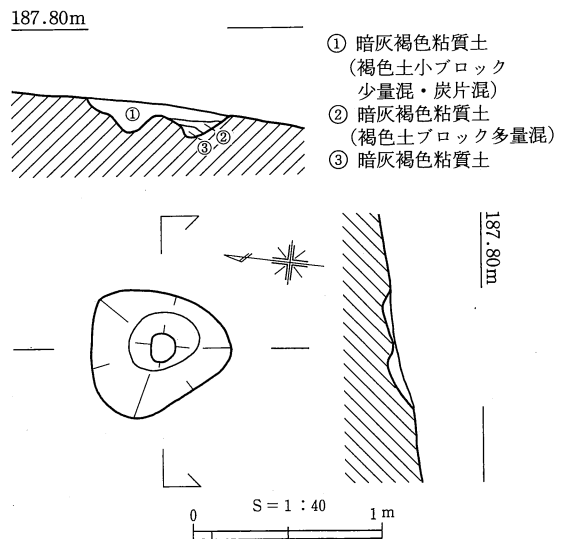
形態 平面形は、検出面は丸みをもつ隅丸三角形、底面は中央部が盛り上がりその周りが環状に窪む不定形を呈する。断面形は「W」字状である。規模は、検出面では長軸0.74m×短軸0.68m、底面では長軸0.38m×短軸0.30m、残存部分での底面までの最大の深さは0.22mを測る。

埋土 埋土を3層に分層した。いずれも暗灰褐色系の土である。

遺物 遺物の出土は認められなかった。

性格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時期 詳細は第8節に譲るが、切り合い関係が不明のため断定は出来ないが、次に述べるSK-35と同様SX-01形成後の遺構の可能性が考えられる。



挿図73 SK-34遺構図

SK-35 (挿図74・105 図版9)

位置 土坑は調査地の南東寄り、H-7グリッド西側で、東側の谷に向けて地形が下り始める地形変換点の標高187.1m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構はSX-01の盛土除去後に検出されたものだが、その切り合い関係は確認することが出来なかった。北側約2mにSK-28・30・32、西側約1mにSK-34、西側約2mにはSD-18が位置する。

形態 平面形は、検出面は北側が広がったいびつな楕円形、底面は2段状になった不定形を呈し、断面形も不定形である。規模は、検出面で長軸1.07m×短軸0.60m、1段目の底面で長軸0.91m×短軸0.32m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.12m、2段目の検出面で長軸0.40m×短軸0.34m、底面で長軸0.20m×短軸0.15m、最大の深さは0.12mを測る。

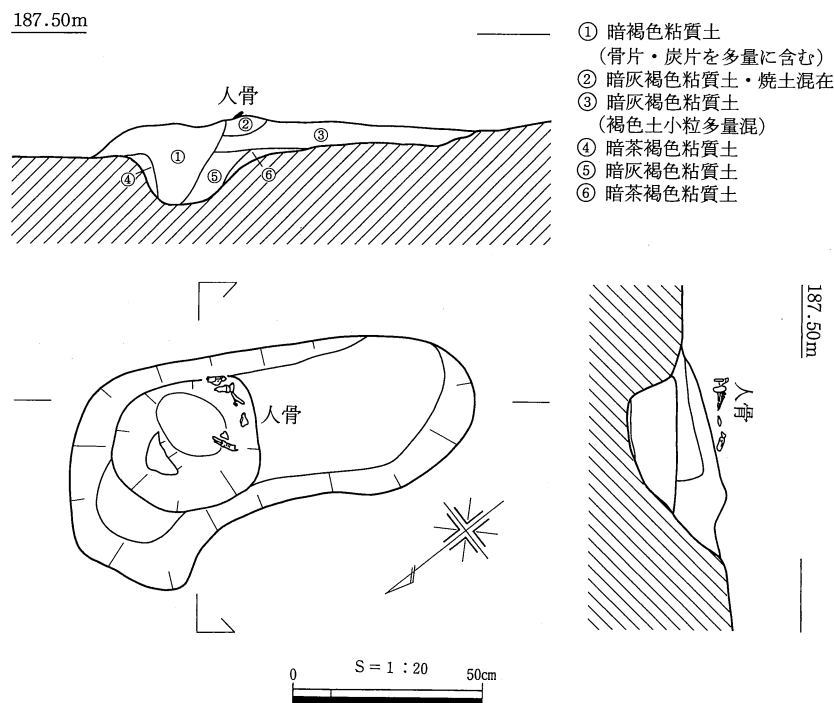
埋土 埋土を6層に分層した。このうち、土坑中央部の検出面付近から多量の人骨片・炭片・焼土塊が出土した。①層は人骨片・炭片をともし、それらは検出面近くに集中しているが底面よりやや浮いた位置からも少量出土した。②層には焼土が混在していたが、検出面では人骨片を半円状に取りまく程度の部分的なものである。

遺物 検出面付近から人骨片・炭片が多量に出土した。人骨片は焼成を受けており、多くは遺存状態が悪く粉々に砕けた状態であった。鑑定<sup>註(1)</sup>をして頂いた結果では、被葬者の性別は不明であるが成人骨であることが判明した。

性格 焼成を受けた人骨片と多量の炭片が出土していることから火葬墓の可能性が推測されるが、人骨片・炭片・焼土塊の出土は上方から掘り込まれた形状を呈する①層に集中しており、底面には人骨片・炭片が少量存在していたものの焼土塊は含まれていないことから、他所で茶昆に付してから二次的に埋葬したものと考えられる。

時期 詳細は第8節に譲るが、人骨の出土状況よりSX-01形成後の遺構と考えられる。

註 (1) 鳥取大学医学部井上貴央教授に鑑定して頂いた。

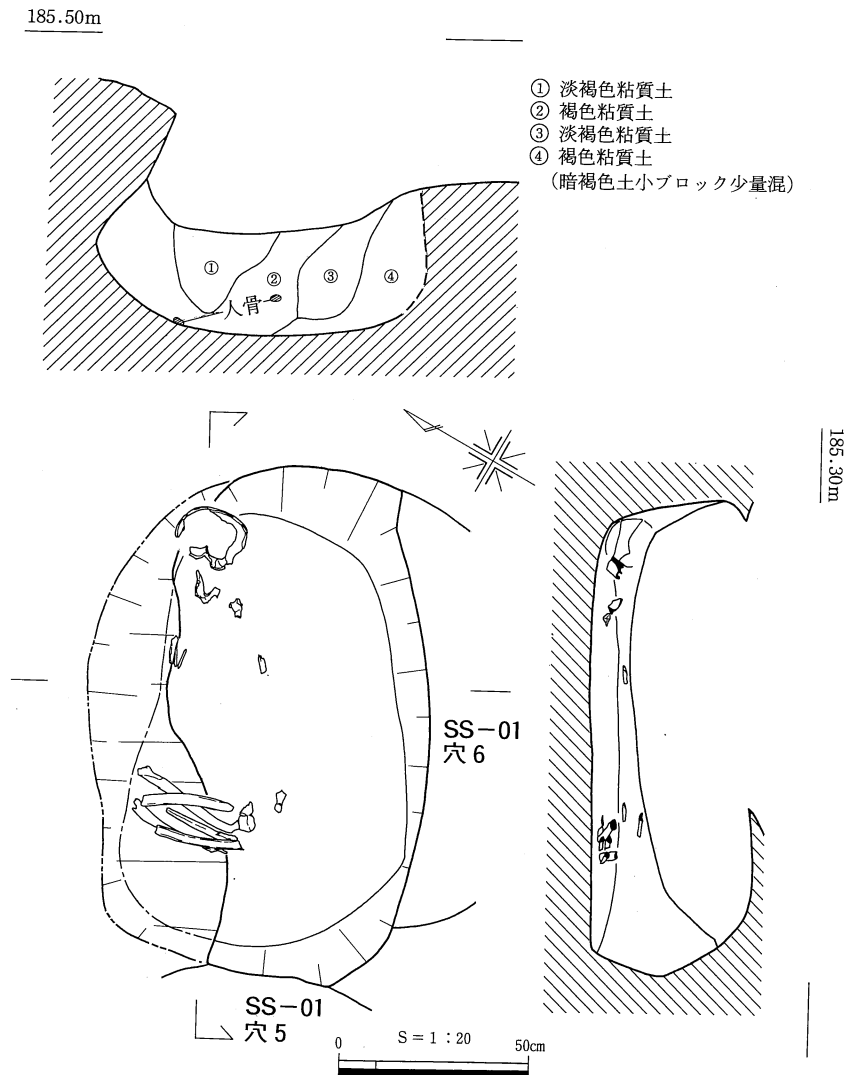


挿図74 SK-35遺構図



SK-36 (挿図75 図版9)

- 位置** 土壙は調査地の東端、J-4グリッド中央の標高185.3m付近に位置する。  
土壙は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が東側に斜交する。  
本遺構はSS-01の穴6を切るように位置する。
- 形態** 平面形は、土壙壁面の北西側をやや横に掘り拓げて楕円形状とし、底面はいびつな台形状である。断面形は袋状に近いと考えられる。規模は、土壙最大部分で長軸1.36m×短軸0.90m、底面で長軸1.15m×短軸0.75m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.60mを測る。
- 埋土** 埋土は4層に分層出来る。いずれも地山土と類似した土である。土壙の南西側にはSS-01の穴6が位置していることが後に判明したが、両土壙を一体とした土層の分層を行っていないため、この部分の土壙立ち上がりは確実ではない。
- 遺物** 底面とやや浮いた位置から1体分の人骨が出土した。人骨は土壙の北西側に片寄り、北西側に顔を向け膝を折り曲げた横臥屈葬で、被葬者は成人の女性であった。詳細は附論3の鑑定結果を参照されたい。なお、土壙の形態や底面直上に人骨が位置することから、棺は用いられていないと推測される。
- 性格** 人骨が出土したことから土壙墓である。
- 時期** 人骨以外に遺物が出土していないため時期の特定は出来ないが、横臥屈葬という埋葬形態であるという点に注目するならば、確実とはいえないが中世段階まで遡る可能性も考えられる。

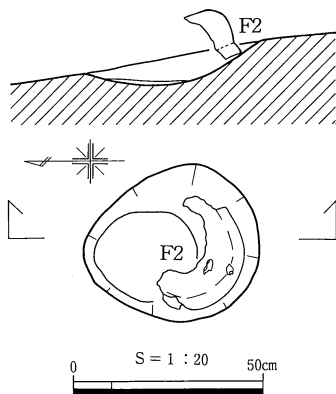


挿図75 SK-36遺構図

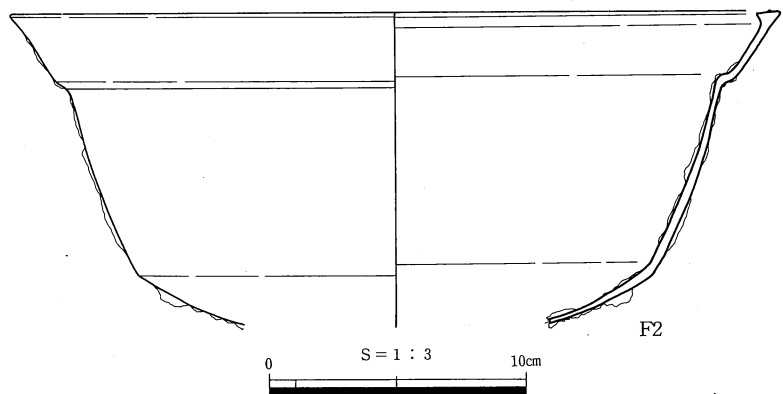
SK-37 (挿図76・77 図版9・14)

- 位置 土坑は調査地の西端近く、C-6グリッド南西寄りの標高191.3m付近に位置する。  
土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。  
本遺構の北側約1mにSK-21が位置する。
- 形態 平面形は、検出面・底面ともに円形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸0.47m×短軸0.41m、底面で長軸0.27m×短軸0.24m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.12mを測る。
- 埋土 木の根による攪乱を受けた残りの悪い浅い土坑で、埋土を確認していない。
- 遺物 鉄製の鑄造鍋F2が口縁を下にして伏せた状態で出土した。
- 性格 断定はできないが、遺骸の頭部を鉄鍋で覆う東北地方などでみられる墓になる可能性も考えられる。
- 時期 出土した鉄鍋は13世紀後半から14世紀代のものであることから、それ以後のものである。

191.70m



挿図76 SK-37遺構図



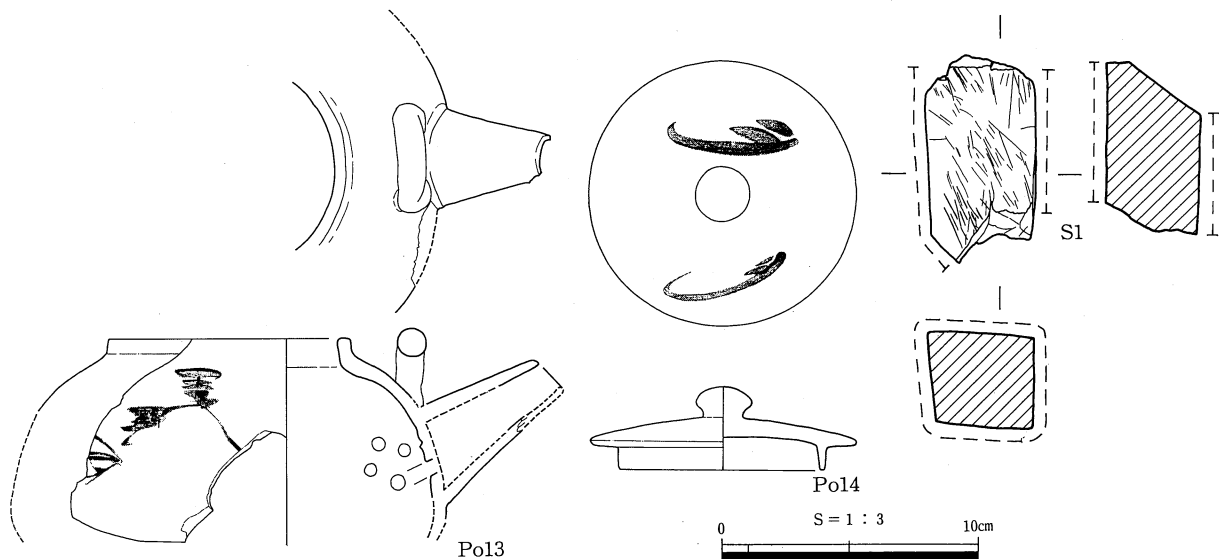
挿図77 SK-37遺物実測図

## 第4節 溝状遺構

今回の調査で検出できた溝状遺構は25条であった。

SD-01 (挿図78・80 図版10・14)

- 位置 調査地のほぼ中央部から北側、F-2～5・G-1～2グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高185.8m～188.6mにかけて位置する。  
遺構は尾根筋に対してほぼ平行で、南端部はSD-07を直交するように切る。  
本遺構の東側約1mに主軸が多少ふれるもののSD-02、東側約2mにはSD-11が位置する。
- 形態 遺構北側は調査地外に続いており本来の規模は不明である。検出規模は、全長約31.80m、幅0.40m～1.80m、深さは最大0.45mを測る。遺構の走向はN-30°-Eである。なお、調査開始以前にはすでに溝状に窪んでいた。
- 埋土 場所によって異なるが、3～7層に分層できる。本遺構の北側では、部分的な木根による攪乱が多く見られ、埋土のしまりは良くない状況であった。基本となる埋土は、暗褐色粘質土あるいは灰茶褐色粘質土である。
- 遺物 出土遺物で図化できたものは、陶器土瓶Po13、陶器土瓶蓋Po14、砥石S1である。Po13・Po14は浮いた状態での出土であり、S1はほぼ底面直上での出土である。
- 時期 出土した遺物は流れ込みの状況を呈しており、時期を判断する良好な資料とはならないが、埋土の状況から考えても近世段階以降のものと考えられる。



挿図78 SD-01遺物実測図

性格 遺構に続く調査地外は溝状に窪んでおり、さらに北側へと続いていたことが予想されることから、薪取り等に使用された山道と考えられる。

#### SD-02 (挿図79・80 図版15)

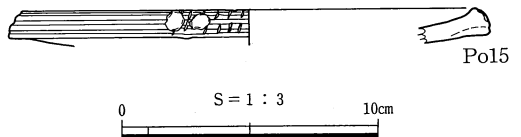
位置 調査地の北部、G-1~2グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高185.4m~186.6m付近に位置する。

遺構は尾根筋に対してほぼ平行で南端部はSK-05を切る。本遺構の西側約1mには主軸が多少ふれるもののSD-01、東側約3~4mには平行するようにほぼ同規模のSD-03が位置する。

形態 遺構北側は調査地外に続いているため本来の規模は不明である。検出規模は、全長9.60m、幅0.60m~0.84m、深さは最大0.15mを測る。遺構の走向はN-36°-Eである。

埋土 場所によって異なるが、2~4層に分層できる。基本となる埋土は淡黒褐色粘質土である。いずれも流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺物 出土遺物で図化できたものは、SK-05との切り合い部分から出土した弥生土器壺Po15である。Po15はやや浮いた状態で出土したため、流れ込みによるものと思われる。



時期 SK-05との切り合い関係から、本遺構の方が新しいことが認められる。また、出土遺物は弥生時代中期中葉のものであるが、本遺構自体の時期を表すとは考えにくく、時期は特定できない。

挿図79 SD-02遺物実測図

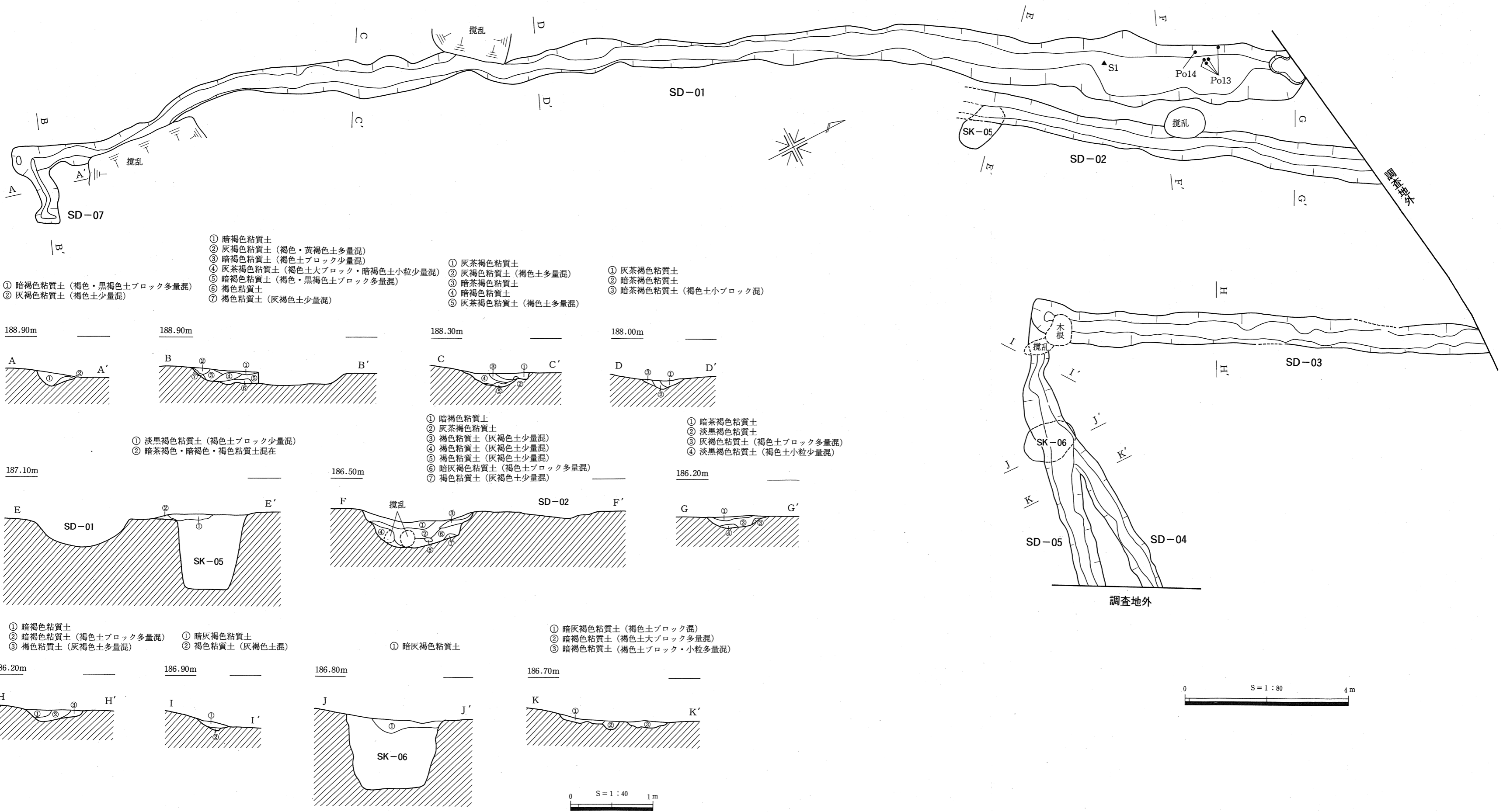
性格 本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらは何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、性格は不明である。

#### SD-03 (挿図80)

位置 調査地の北部、G-1~2・H-1グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の先端部で、やや斜面が急になる標高184.6m~186.5m付近に位置する。

遺構は尾根筋に対してほぼ平行で南端部はSD-05と直交するように交わる。西側約3~4mにほぼ同規模のSD-02、南側約1mにはSK-12が位置する。

形態 北側は調査地外に伸びており本来の規模は不明である。検出規模は、全長11.00m、幅0.60m~0.90m、深さは最大0.15mを測る。遺構の走向はN-30°-Eである。



挿図80 SD-01・02・03・04・05・07遺構図

埋 土 場所によって異なるが、3層に分層できる。基本となる埋土は暗褐色粘質土である。いずれも流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺 物 遺物は出土しなかった。

時 期 本遺構は南端部でSD-05と交わっている。木根による攪乱を受けており切り合い関係を確認することは出来なかったが、埋土の土色に相違が認められたため別遺構として扱った。時期差が存在すると考えられるが、時期は特定できない。

性 格 本遺構はSD-02と規模・深さ・走向が著しく類似しており、またSD-05と直交しL字状を呈することから、形態的には関連性が窺える。しかし、埋土の土色からそれぞれ時期を異にしている可能性も考えられる。遺構相互の関係は不明である。

#### SD-04 (挿図80)

位 置 調査地の北部、G・H-2グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の先端部で、やや斜面が急になる標高186.0m~186.2m付近に位置する。

本遺構は西端をSD-05に切られている。

形 態 東側は調査地外に伸びており本来の規模は不明である。検出規模は、全長3.80m、幅0.44m~0.60m、深さは最大0.08mを測る。遺構の走向はN-87°-Wである。

埋 土 埋土は暗褐色粘質土の単層である。

遺 物 遺物は出土しなかった。

時 期 遺構西側がSD-05に切られていることから、本遺構はSD-05より古いことが認められるが時期は特定できない。

性 格 本遺跡の溝状遺構の走向は、遺構同士が直交あるいは平行するものが多く、溝状遺構が何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

本遺構は鶴田部落の墓地に向けて伸びるため墓道の可能性が考えられるが、墓地と遺構との関連を示唆する直接的な判断材料がないため、現時点では墓道とは断定できない。

#### SD-05 (挿図80)

位 置 調査地の北部、G・H-2グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の先端部で、やや斜面が急になる標高186.1m~186.5m付近に位置する。

本遺構は中央部付近でSD-04、またほぼ同じ位置でSK-06を切っている。遺構西端はSD-03の南端部と直交する。

形 態 東側は調査地外に伸びており本来の規模は不明である。検出規模は、全長6.40m、幅0.34m~0.90m、深さは最大0.19mを測る。遺構の走向はN-75°-Wである。また、SD-01同様調査開始以前にすでに溝状に窪む形跡が認められた。

埋 土 場所によって異なるが、1~2層に分層出来る。基本となる埋土は暗灰褐色粘質土である。

遺 物 遺物は出土しなかった。

時 期 本遺構は2ヶ所で他遺構との切り合い関係が認められる。よって、SD-04ならびにSK-06より新しいことが認められるが時期は特定できない。

性 格 本遺跡の溝状遺構の走向は、遺構同士が直交あるいは平行するものが多く、溝状遺構が何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

本遺構は鶴田部落の墓地に向けて伸びるため墓道の可能性が考えられるが、墓地と遺構との関連を示唆する直接的な判断材料がないため、現時点では墓道とは断定できない。

### SD-06 (挿図81)

位置 調査地の中央南寄り、F-5・6グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高188.9m～189.6m付近に位置する。

本遺構の中央南寄り、F-5・6グリッドにまたがる部分でSD-08を切っている。南側約1.5mに主軸は多少ふれるもののSD-10がつながるように位置する。西側約4mには主軸は多少ふれるものの本遺構にほぼ平行してSD-25が位置する。

形態 検出規模は、全長7.80m、幅0.30m～0.70m、深さは最大0.20mを測る。遺構の走向はN-20°-Eである。

埋土 埋土は2層に分層できる。流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 SD-08との切り合い関係から、本遺構はSD-08より新しいことが認められるが、時期は特定できない。

性格 本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

### SD-07 (挿図80)

位置 調査地の中央北西寄り、F-4グリッドの西側で、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高188.5m～188.6m付近に位置する。

本遺構は西端をSD-01に切られている。北東側約3.5mに主軸は多少ふれるもののSD-11が位置する。

形態 検出規模は、全長1.90m、幅0.50m、深さは最大0.20mを測る。遺構の走向はN-73°-Wである。

埋土 埋土は2層に分層できる。基本となる埋土は暗褐色粘質土で、堆積状況から自然堆積が認められる。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 SD-01との切り合い関係から、本遺構はSD-01より古いことが認められるが、時期は特定できない。

性格 本遺構とSD-01が示す形態は、規模は違うもののSD-03とSD-05が示すL字状の形態に類似し、さらにそれぞれの遺構の走向もほぼ同じである。これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

### SD-08 (挿図81)

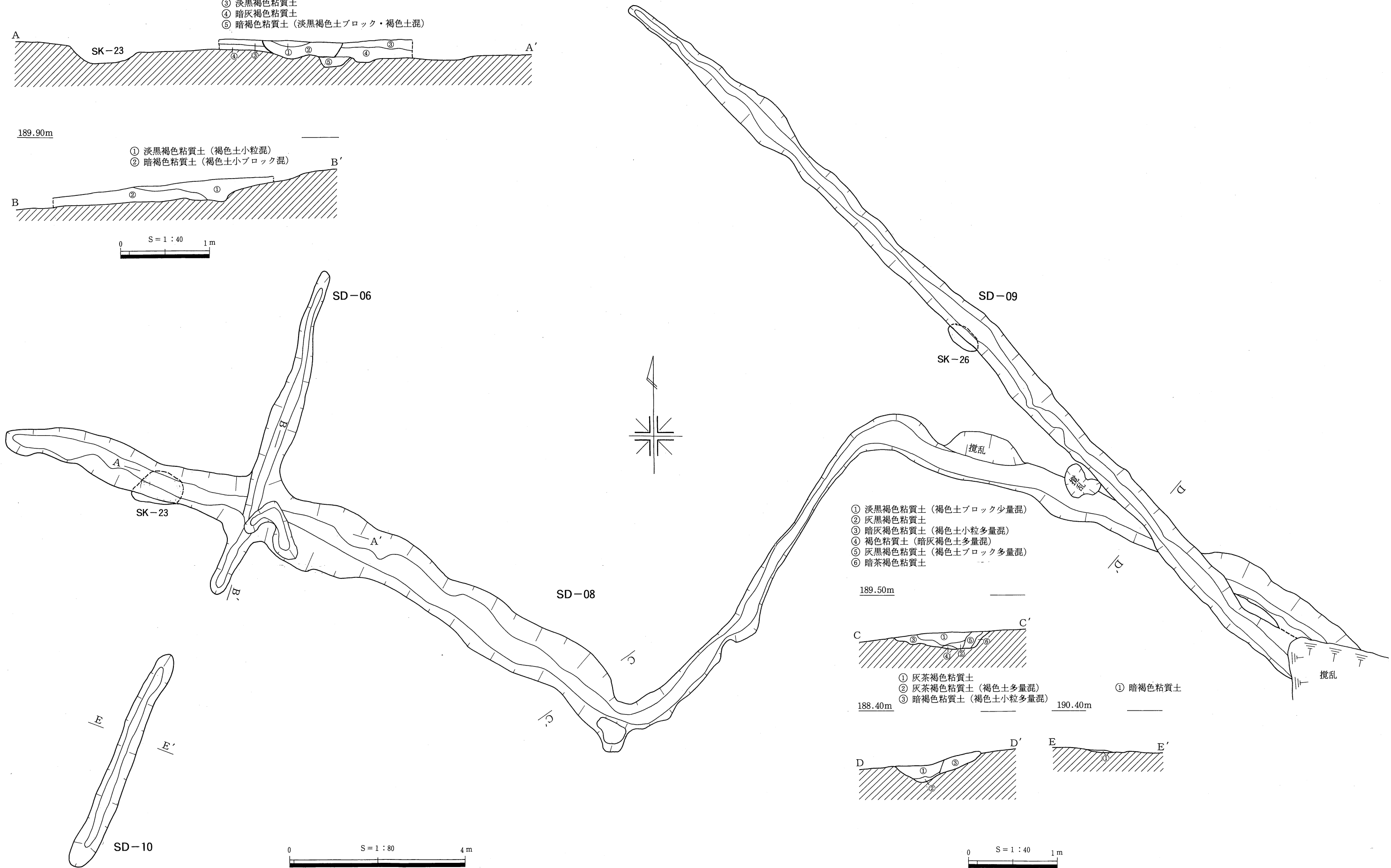
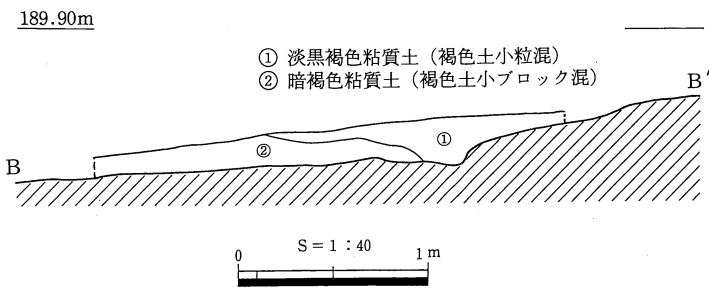
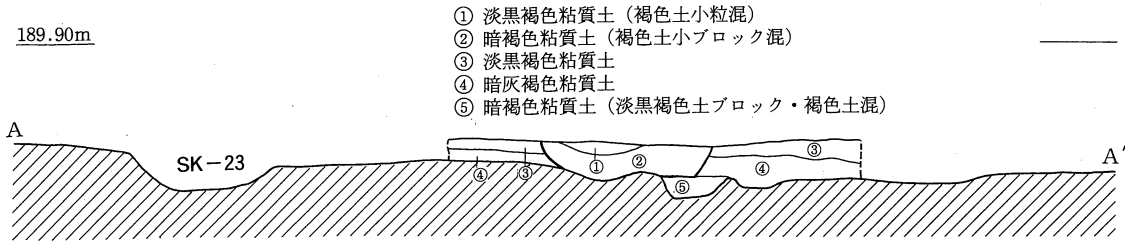
位置 調査地の中央南西寄りから東側、E・F・G・H-5、F・G・H-6グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高187.4m～189.6m付近に位置する。

本遺構の西端、F-5・6グリッドにまたがる部分でSD-06に、H-5・6グリッドにまたがる部分ではSD-09に切られる。E・F-5グリッドにまたがる部分ではSK-23を切っている。遺構の東寄りでは、主軸は多少ふれるものの北側にSD-13が平行するように位置する。東端約2mには直交するようにSD-15が位置する。

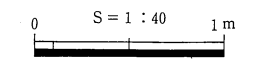
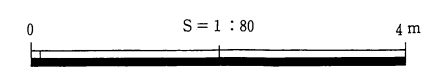
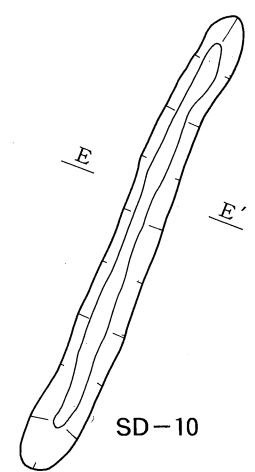
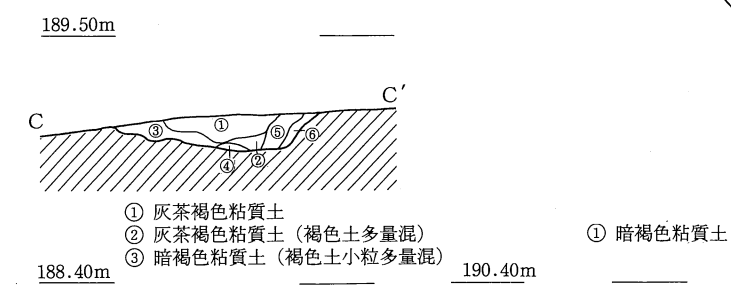
形態 遺構の東端部分が攪乱を受けているために本来の規模は不明であるが、検出規模は、全長36.0m、幅0.24m～1.60m、深さは最大0.25mを測る。遺構の走向はN-67°-WからN-38°-Eに屈曲し、さらにN-69°-Wに屈曲する。

埋土 埋土は場所によって異なるが、1～6層に分層できる。基本となる埋土は東側屈曲部周辺で色調が変化し、西側は淡黒褐色粘質土、東側は暗褐色粘質土である。

遺物 土器の小片が出土したが図化はできなかった。



- ① 淡黒褐色粘質土 (褐色土ブロック少量混)  
 ② 灰黒褐色粘質土  
 ③ 暗灰褐色粘質土 (褐色土小粒多量混)  
 ④ 褐色粘質土 (暗灰褐色土多量混)  
 ⑤ 灰黒褐色粘質土 (褐色土ブロック多量混)  
 ⑥ 暗茶褐色粘質土



挿図81 SD-06・08・09・10遺構図

- 時期 本遺構は3ヶ所で他遺構との切り合い関係が認められ、SK-23より新しく、SD-06・09より古いことが認められるが時期は特定できない。
- 性格 本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

#### SD-09 (挿図81)

- 位置 調査地の中央部から東側、G-4・5、H-5・6グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高187.5m~188.2m付近に位置する。
- 本遺構の中央部付近でSK-26と切り合い、東端部はH-5・6グリッドにまたがる部分でSD-08を切る。遺構の東寄りでは主軸は多少ふれるもののSD-13がほぼ平行するように位置する。東端約2mには直交するようにSD-15が位置する。
- 形態 遺構の東端部分が攪乱を受けているために本来の規模は不明であるが、検出規模は、全長21.10m、幅0.30m~0.80m、深さは最大0.25mを測る。遺構の走向はN-47°-Wである。
- 埋土 埋土は2層に分層できる。基本となる埋土は灰茶褐色粘質土である。流れ込みによる自然堆積が認められる。
- 遺物 土器の小片が出土したが図化はできなかった。
- 時期 SD-08との切り合い関係から、本遺構の方が新しいことが認められるが時期は特定できない。
- 性格 本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

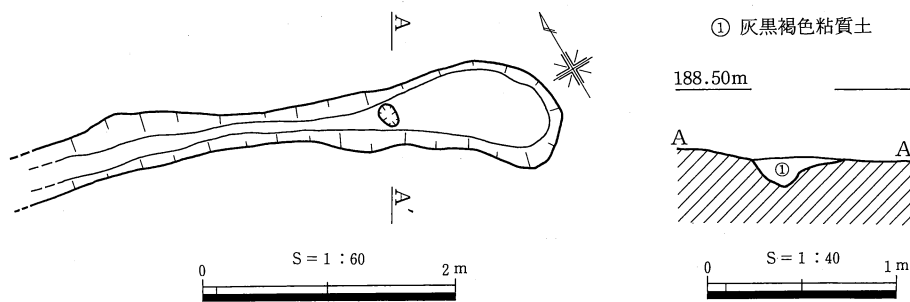
#### SD-10 (挿図81)

- 位置 調査地の中央南寄り、E・F-6グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高189.7m~190.2m付近に位置する。
- 本遺構の北東約1.5mにSD-06が位置する。SD-06は主軸が多少ふれるものの本遺構につながるような位置関係にあり、本来は1つの遺構であった可能性が考えられる。北東側約3mにあるSD-08は直交するように位置する。
- 形態 検出規模は、全長5.30m、幅0.40m~0.50m、深さは最大0.03mを測る。遺構の走向はN-24°-Eである。
- 埋土 埋土は暗褐色粘質土の単層である。
- 遺物 遺物は出土しなかった。
- 時期 特定できない。
- 性格 本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

#### SD-11 (挿図82)

- 位置 調査地の中央北寄り、F-4グリッドの北側で、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高188.1m付近に位置する。
- 本遺構の西側約2mにSD-01、南西側約3.5mにSD-07が位置する。主軸は多少ふれるもののSD-07は本遺構に平行するように位置し、SD-01は直交するように位置する。また、北東側約1.5mにSI-01が位置する。
- 形態 検出規模は、全長4.40m、幅0.24m~0.74m、深さは最大0.15mを測る。遺構の走向はN-67°-Wである。





挿図82 SD-11遺構図

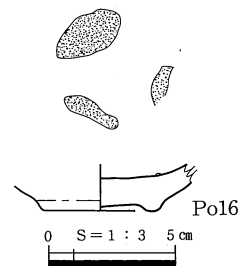
- 埋土 埋土は灰黒褐色粘質土の単層である。
- 遺物 遺物は出土しなかった。
- 時期 特定できない。
- 性格 本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらは何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

SD-12 (挿図84)

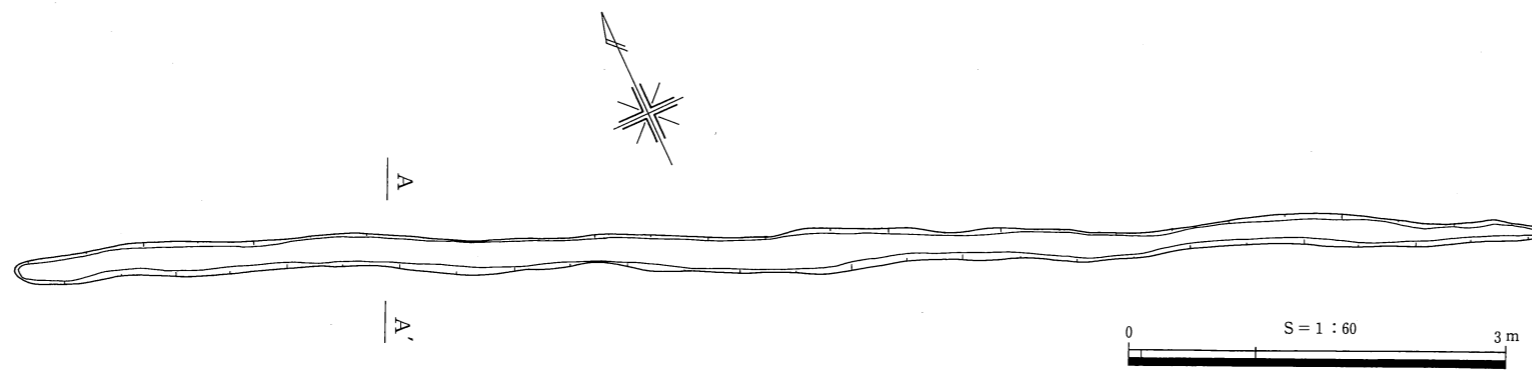
- 位置 調査地の中央北東寄り、G・H-4 グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高187.2m~187.5m付近に位置する。
- 本遺構の北側約2mにSB-01、西側約3mにSI-01が位置する。
- 形態 検出規模は、全長12.20m、幅0.18m~0.36m、深さは最大0.08mを測る。遺構の走向はN-68°-Wである。
- 埋土 埋土は灰黒褐色粘質土の単層である。
- 遺物 遺物は出土しなかった。
- 時期 特定できない。
- 性格 本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらは何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

SD-13 (挿図83・85 図版15)

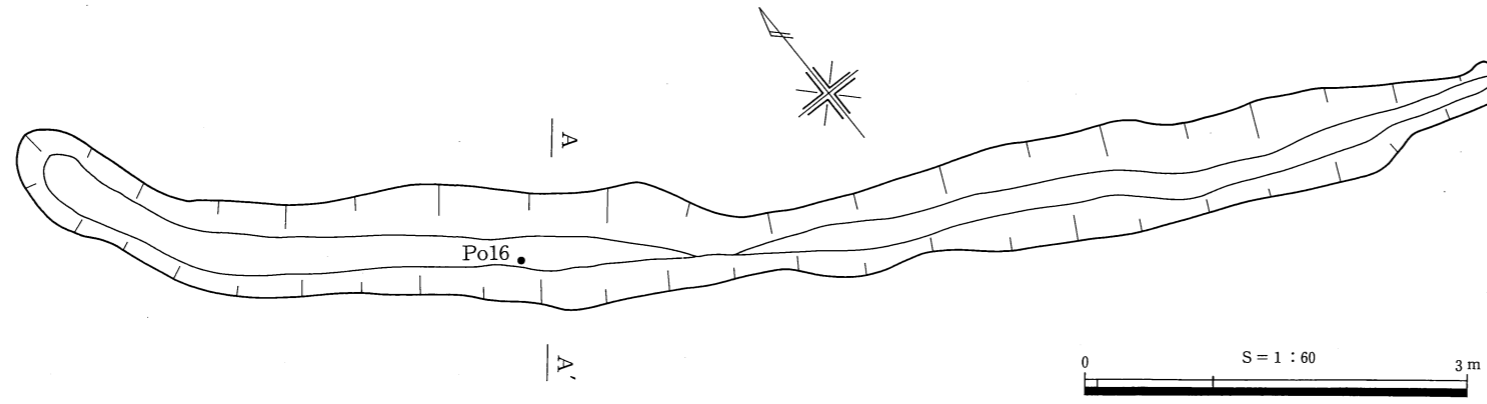
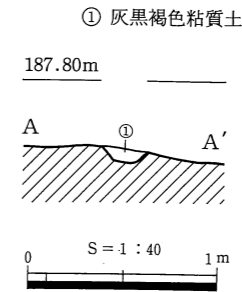
- 位置 調査地の東側、G・H-5、H-6 グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高187.3m~187.9m付近に位置する。
- 主軸は多少ふれるものの、本遺構の西側に接するようにSD-09が、また東側に接するようにSD-08がそれぞれほぼ平行して位置する。東端部より約1m離れて直交するようにSD-15が位置する。
- 形態 検出規模は、全長12.30m、幅0.30m~0.90m、深さは最大0.08mを測る。遺構の走向はN-59°-Wである。
- 埋土 埋土は灰茶褐色粘質土の単層である。
- 遺物 出土遺物で図化できたものは、陶器底部Po16である。Po16は底面よりやや浮いた状態で出土した。
- 時期 遺物は流れ込みであり、時期を判断する良好な資料とは言えないが、埋土の状況から考えても近世段階以降のものと考えられる。
- 性格 本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、何らかの意図をもって掘り巡らされている可能性は否めないが、その性格は不明である。



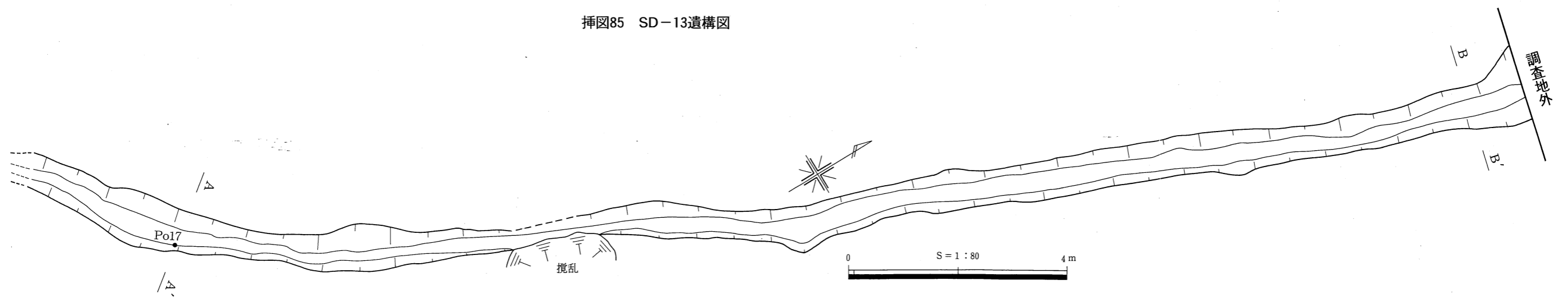
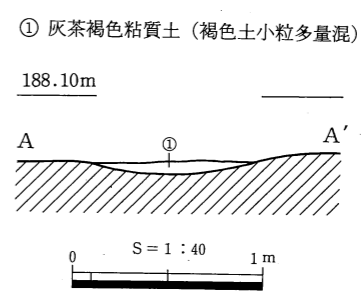
挿図83 SD-13遺物実測図



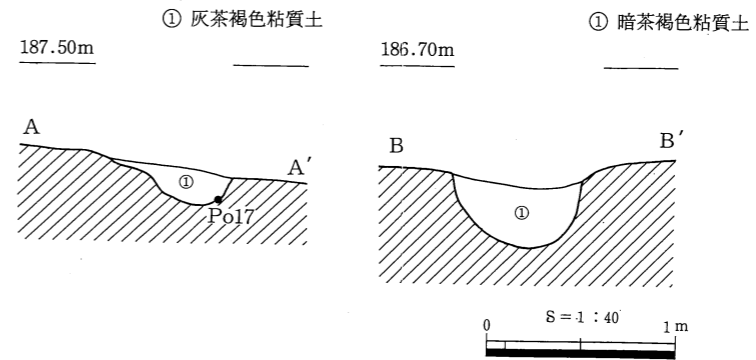
挿図84 SD-12遺構図



挿図85 SD-13遺構図



挿図86 SD-15遺構図



SD-14 (挿図87)

位置 調査地の中央東寄り、G-5グリッドの西側で、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高188.4m付近に位置する。

本遺構の東側約3mに主軸は多少ふれるもののSD-08、北側約3mにはSD-09が位置する。

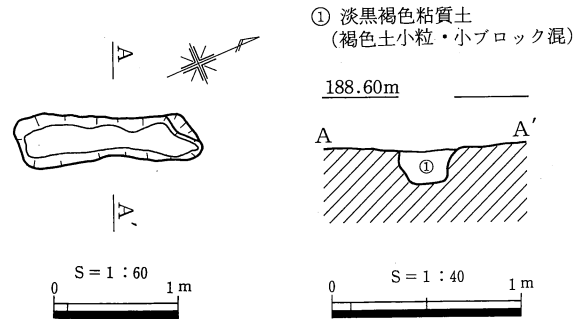
形態 検出規模は、全長1.46m、幅0.30m~0.42m、深さは最大0.20mを測る。遺構の走向はN-25°-Eである。

埋土 埋土は淡黒褐色粘質土の単層である。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 特定できない。

性格 本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。



挿図87 SD-14遺構図

SD-15 (挿図86・88 図版10・15)

位置 調査地の北東端から東側、J-3・4、I-4・5・6、H-6グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高186.2m~187.2m付近に位置する。

本遺構は尾根筋にほぼ直交し、北端部の西側約1mには主軸がほぼ同じであるSD-16が、東側約2mには人骨が出土した土壌墓SK-36とSD-24を含むSS-01が位置し、また主軸は多少ふれるものの南端部にはSD-17がほぼ平行するように位置する。遺構南端部の西側約1~2mには直交するようにSD-08・09・13が位置する。

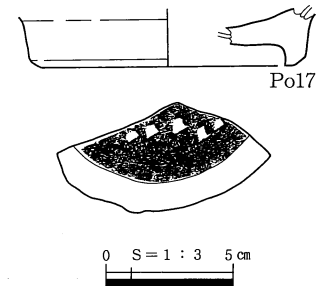
形態 遺構北側が調査地外に伸びており本来の規模は不明であるが、検出規模は、全長27.60m、幅0.40m~1.40m、深さは最大0.45mを測る。遺構の走向はN-21°-Eである。

埋土 埋土は1層であるが、色調が場所によって異なっている。北端部からI-5グリッドのほぼ中央の攪乱部周辺にかけて暗茶褐色粘質土、そこから南端部にかけては灰茶褐色粘質土が堆積している。

遺物 出土遺物で図化できたのは、陶器底部Po17である。Po17は底面直上からの出土である。

時期 出土遺物から近世段階のものと考えられる。

性格 本遺構は鶴田部落の墓地に向けて伸びるため墓道の可能性が考えられるが、墓地と遺構との関連を示唆する直接的な判断材料がなく、現時点では特定できない。



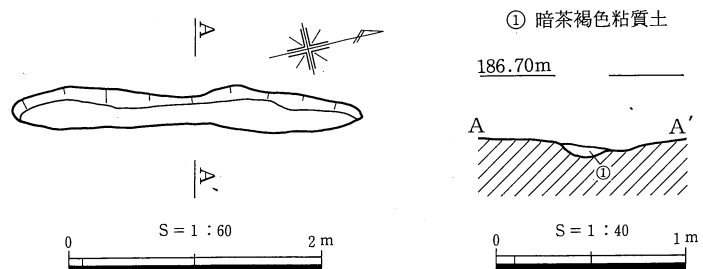
挿図88 SD-15遺構図

SD-16 (挿図89)

位置 調査地の北東端近く、I-3・4グリッドにまたがり、緩やかに北東及び東側に向けて地形が下がっていく尾根上の標高186.3m付近に位置する。

本遺構の東側約1mには主軸がほぼ同じであるSD-15が位置する。

形態 検出規模は、全長2.80m、幅0.20m~0.34m、深さは最大0.08mを測る。遺構の走向はN-15°-Eである。



挿図89 SD-16遺構図

- 埋土 埋土は暗茶褐色粘質土の単層である。
- 遺物 遺物は出土しなかった。
- 時期 特定できない。
- 性格 本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらは何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

#### SD-17 (挿図90)

位置 調査地の東端、I-5・6グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高186.5m~186.8m付近に位置する。

本遺構は尾根筋にほぼ直交し、西側約1mには主軸は多少ふれるもののSD-15が平行して位置し、東側約2mには高低差があるもののSD-23が、また北側約2mにはSD-18が位置している。

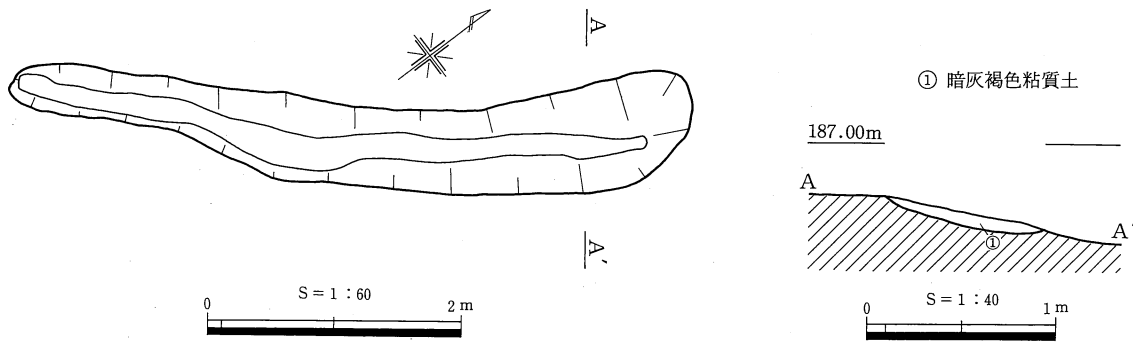
形態 検出規模は、全長5.44m、幅0.40m~0.84m、深さは最大0.20mを測る。遺構の走向はN-40°-Eである。

埋土 埋土は暗灰褐色粘質土の単層である。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 特定できない。

性格 埋土から考えてSD-18周辺の遺構との関連が考えられることから、山道として使用された可能性が推測されるが、判断材料が乏しいため断定は出来ない。



挿図90 SD-17遺構図

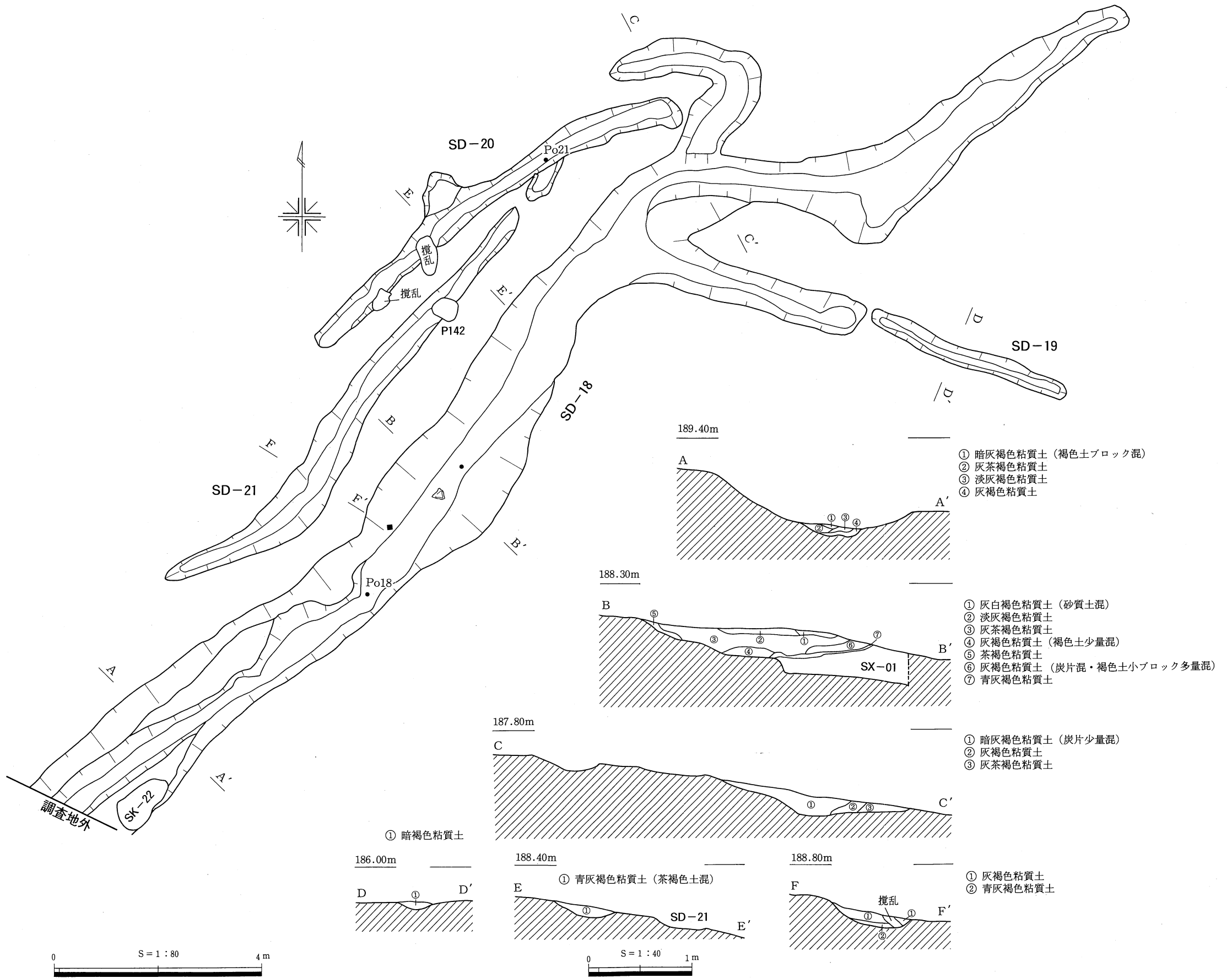
#### SD-18 (挿図91・92 図版12・15)

位置 調査地の南東寄り、H・I-6、G・H-7グリッドにまたがり、緩やかに北東から東に向けて地形が下がってさらさら傾斜が急になる地形変換地点の標高186.0m~189.3m付近に位置する。

本遺構は中央部付近でSX-01を切り、さらにSK-28~30・32の土坑群を切り、また南端部はSK-22と切り合う。本遺構の西側には主軸は多少ふれるもののSD-20・21・22がほぼ平行して位置する。南東側に分岐した部分の延長上にはSD-19が位置する。

形態 遺構南側が調査地外に伸びているため本来の規模は不明であるが、検出規模は、全長27.0m、幅0.50m~2.10m、深さは最大0.60mを測る。遺構の走向はN-55°-Eから、H-6グリッドの南側で三方向に分岐している。それぞれの走向は北方向の部分でN-24°-EからE-Wに屈曲し、東方向の部分でN-86°-WからN-55°-Eに屈曲する。さらに南東方向の部分ではほぼ斜面に平行で、N-72°-Wに分岐する。また、調査地外が溝状に窪んでいる形跡が認められた。

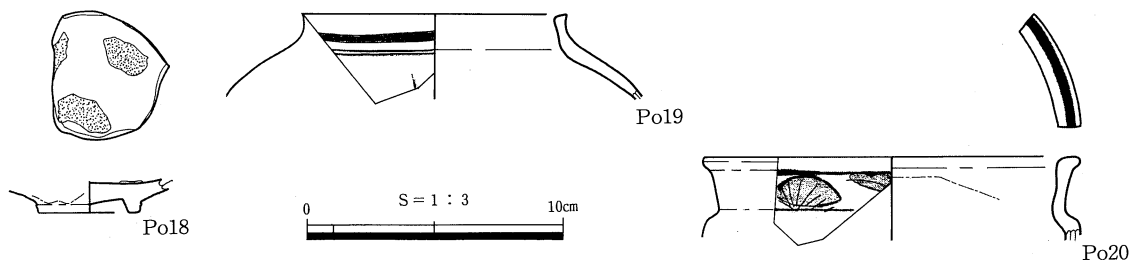
埋土 SX-01との切り合い部分とそれ以外の場所では埋土が異なった様相を呈している。切り合い部では全体的に大変締まりがよく、基本となる埋土は灰茶褐色粘質土である。⑦層とSX-01との間には2mm程度の鉄分の層が薄く堆積し、その上を⑦層が覆っている。調査地周辺は鉄分を多く含む土質で



挿図91 SD-18・19・20・21遺構図

あり、降水等により鉄分の沈殿作用が働いた可能性が考えられる。また⑥層には炭片が混じるが、SX-01の盛土除去後に検出したSK-35の埋土中から茶毘に付された人骨片とともに多量の炭片が出土しており、そこからの混入と考えられる。切り合い部以外の場所では、暗灰褐色あるいは灰褐色系の埋土が基本である。

遺物 出土遺物で図化できたものは、肥前陶器底部Po18と陶器壺Po19、磁器口縁Po20である。Po18は底面からやや浮いた状態で出土し、Po19・Po20は埋土の上面からの出土である。他にも図化はできなかったが、陶磁器片や礫、鉄片、現代に近いと思われる瓦が出土しており、これらの出土位置はSX-01との切り合い部分に集中している。



挿図92 SD-18遺物実測図

時期 本遺構との切り合い関係が確認できたのはSX-01とSK-28・32である。相対的な新旧関係は、本遺構の方が他遺構を切っているため新しいといえる。また、出土した遺物の肥前陶器Po18から本遺構は17世紀前半頃以降のものと考えられる。

性格 遺構に続く調査地外は溝状に窪み、そのまま南側へと伸びていることから、薪取り等に使用された山道と考える。

#### SD-19 (挿図91)

位置 調査地の南東端、H・I-7グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根筋の東側斜面の標高184.8m~186.2m付近に位置する。

本遺構はほぼ斜面に平行で、西側のSD-18の分岐点から南東方向に向かう部分の延長上に位置し、東側約1mに直交するようにSD-23が位置する。

形態 検出規模は、全長4.10m、幅0.30m~0.40m、深さは最大0.08mを測る。遺構の走向はN-67°-Wである。

埋土 埋土は暗褐色粘質土の単層である。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 本遺構はSD-18が分岐点から南東方向に向かう部分の延長上に位置していることから、別遺構として扱ったがSD-18と同一の遺構である可能性も考えられ、ほぼ同時期の近世段階のものとして推測される。

性格 山道として使用されたと考える。

#### SD-20 (挿図91・93 図版15)

位置 調査地の南東寄り、G・H-6、G-7グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高187.4m~188.4m付近に位置する。

本遺構の北端部に接するようにSD-18が、本遺構の中央部付近で分岐している部分の延長上にはSD-21が、南西側約5mにはSD-22が位置する。これらは主軸が多少ふれるものの本遺構とほぼ平行するように位置している。

形態 検出規模は、全長8.40m、幅0.34m~0.60m、深さは最大0.15mを測る。遺構の走向はN-58°-E

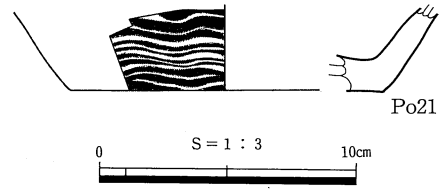
から中央部付近でN-21°-Eに分岐する。

埋土 埋土は青灰褐色粘質土の単層である。

遺物 出土遺物で図化できたものは陶器底部Po21である。Po21は底面直上にあり、分岐している部分からの出土である。

時期 埋土の土質・走向が、SD-18をはじめとする周囲の遺構と著しく類似することや出土遺物から考えてほぼ同時期の近世段階と考える。

性格 SD-18のようなしっかりした掘り込みはないにしても、山道として使用された可能性が推測されるが、判断材料が乏しいため断定は出来ない。



挿図93 SD-20遺物実測図

### SD-21 (挿図91)

位置 調査地の南東寄り、H-6、G・H-7グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高187.7m~188.9m付近に位置する。

本遺構の北端部にはSD-20の分岐した部分が接するように位置する。主軸が多少ふれるものの、東側約1mにはSD-18、西側約2mにはSD-22が本遺構と平行するように位置する。

形態 検出規模は、全長10.20m、幅0.30m~0.90m、深さは最大0.27mを測る。遺構の走向はN-49°-Eである。

埋土 埋土は2層に分層できる。基本となる埋土は灰褐色粘質土である。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 埋土の土質・走向が、SD-18をはじめとする周囲の遺構と著しく類似することから、ほぼ同時期の近世段階と考える。

性格 SD-18のようなしっかりした掘り込みはないにしても、山道として使用された可能性が推測されるが、判断材料が乏しいため断定は出来ない。

### SD-22 (挿図94)

位置 調査地の南端、F・G-7グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高189.1m~189.7m付近に位置する。

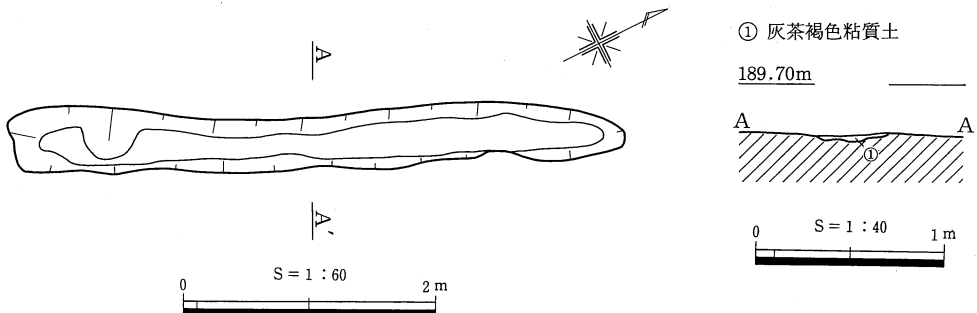
本遺構は尾根筋に対してほぼ平行する。東側約2mにSD-21が主軸が多少ふれるものの平行するように位置する。

形態 検出規模は、全長4.90m、幅0.40m~0.52m、深さは最大0.05mを測る。遺構の走向はN-51°-Eである。

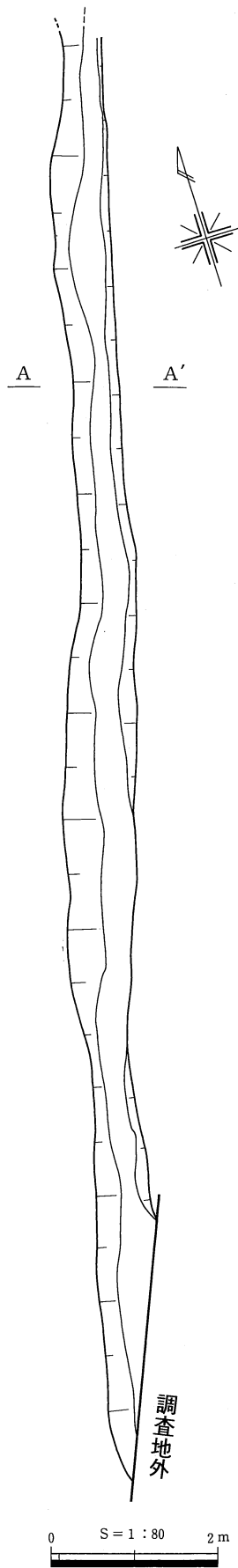
埋土 埋土は灰茶褐色粘質土の単層である。

遺物 遺物は出土しなかった。

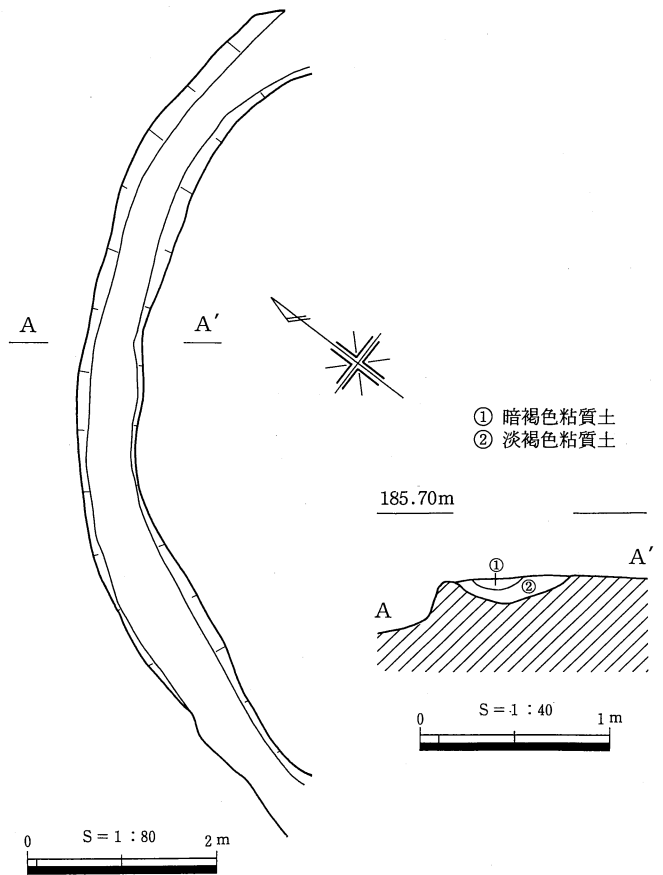
時期 埋土の土質・走向が、SD-18をはじめとする周囲の遺構と著しく類似することから、ほぼ同時期の近世段階と考える。



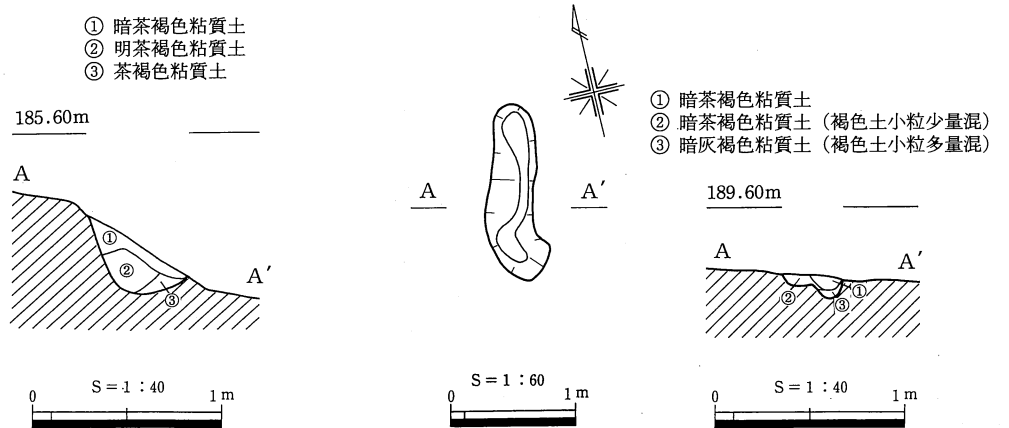
挿図94 SD-22遺構図



挿図95 SD-23遺構図



挿図96 SD-24遺構図



挿図97 SD-25遺構図



性格 SD-18のようなしっかりした掘り込みはないにしても、山道として使用された可能性が推測されるが、判断材料が乏しいため断定は出来ない。

#### SD-23 (挿図95)

位置 調査地の東端から南東端、I-5~7グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根筋の東側斜面で、標高184.0m~185.5m付近に位置する。

本遺構の西側約2mにSD-17、西側約1mには直交するようにSD-19が位置する。

形態 遺構北端部分が攪乱を受けているため本来の規模は不明であるが、検出規模は、全長15.80m、幅0.40m~0.86m、深さは最大0.42mを測る。遺構の走向はN-12°-Eである。ほぼ斜面に沿うように掘り込まれており、部分的にテラス状を呈する箇所が見受けられる。

埋土 埋土は3層に分層できる。流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 特定できない。

性格 調査地の東側は現在使用されている集落の山道が通り、この道で調査地は区切られている。本遺構の南端部はその現在の山道に接しており、地形に沿うような走向を呈しているため、かつての山道として使用された可能性が推測される。

#### SD-24 (挿図96)

位置 調査地の北東端、I-4グリッドの中央から北西端にかけてにまたがり、緩やかに北東から東に向けて地形が下がっていく標高184.9m~185.7m付近に位置する。

本遺構は土壌墓SK-36が検出されたSS-01内に作られている。西側約2.5mにはSD-15が位置する。南側約9mには本遺構とつながるような位置関係にSD-23が位置し、本来は1つの遺構であった可能性が推測される。

形態 東端部・南端部ともに攪乱を受けているために本来の規模は不明である。検出規模は、全長9.40m、幅0.50m~0.84m、深さは最大0.13mを測る。本遺跡内においては溝状遺構の走向は直線状のものがほとんどであるが、本遺構は弧を描くような平面形である。

埋土 場所によって異なるが埋土は1~2層に分層できる。本遺構の埋土は暗褐色粘質土が基本である。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 本遺構はSS-01内に作られていることから、同時期のものと考えられるが時期の特定は出来ない。

性格 断定はできないが、SD-23と同じく山道として使用された可能性が推測される。

#### SD-25 (挿図97)

位置 調査地の中央部、E-5グリッドの東側で、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高189.2m~189.3m付近に位置する。

本遺構の東側約4mに主軸が多少ふれるものの平行してSD-06が位置し、南側約2.5mには直交するようにSD-08が位置する。

形態 検出規模は、全長1.40m、幅0.36m、深さは最大0.15mを測る。遺構の走向はN-7°-Eである。

埋土 埋土は3層に分層できる。基本となる埋土は暗茶褐色粘質土である。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 特定できない。

性格 本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

## 第5節 段状遺構

SS-01 (挿図98・99 図版11・15)

**位置** 調査地の東端、J-4グリッド南西部を中心とする標高186.0m付近に位置する。

本遺構は、調査地の東側に存在する谷部に向けて地形が下がり始める地形変換点の肩部付近に位置する。

本遺構の北東側約3mにSS-02、西側約2mにはSD-15があり、遺構内のテラス部にSD-24、穴6を切ってSK-36が位置する。

**形態** 平面形は、検出面・底面ともに半円形状を呈し、断面形は「L」字状である。東側は現在の道を作る時に破壊を受けている。

検出規模は、北東-南西方向10.2m、東西3.4m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.6mを測る。

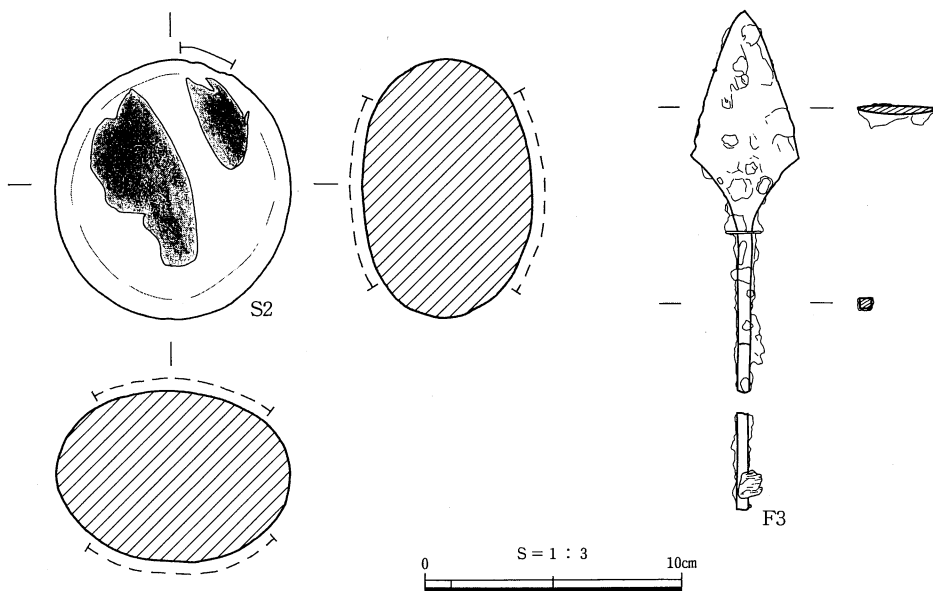
本遺構には西側の壁に沿って7つの穴が存在する。埋土の切り合い関係から、穴の掘り下げには時期差が存在しているが、穴の位置関係には規則的な配列が認められることからSS-01に伴う穴と考えた。その規模(長軸×短軸-深さ)は、穴1(68×36-39)cm、穴2(112×80-70)cm、穴3(94×85-64)cm、穴4(108×98-28以上)cm、穴5(109×102以上-52以上)cm、穴6(120以上×30以上-30以上)cm、穴7(120×91-78)cmを測る。

**埋土** 穴1~7の埋土を除くSS-01の埋土を2層に分層した。上方にあるのが淡黒褐色土、北東側底部付近にあるのが褐色土である。穴の埋土は様ではなく、穴1・2・6はそれぞれ1層であるが、それ以外の穴は複数の土層からなり、特に穴3には焼土や炭が混じる層が存在した。

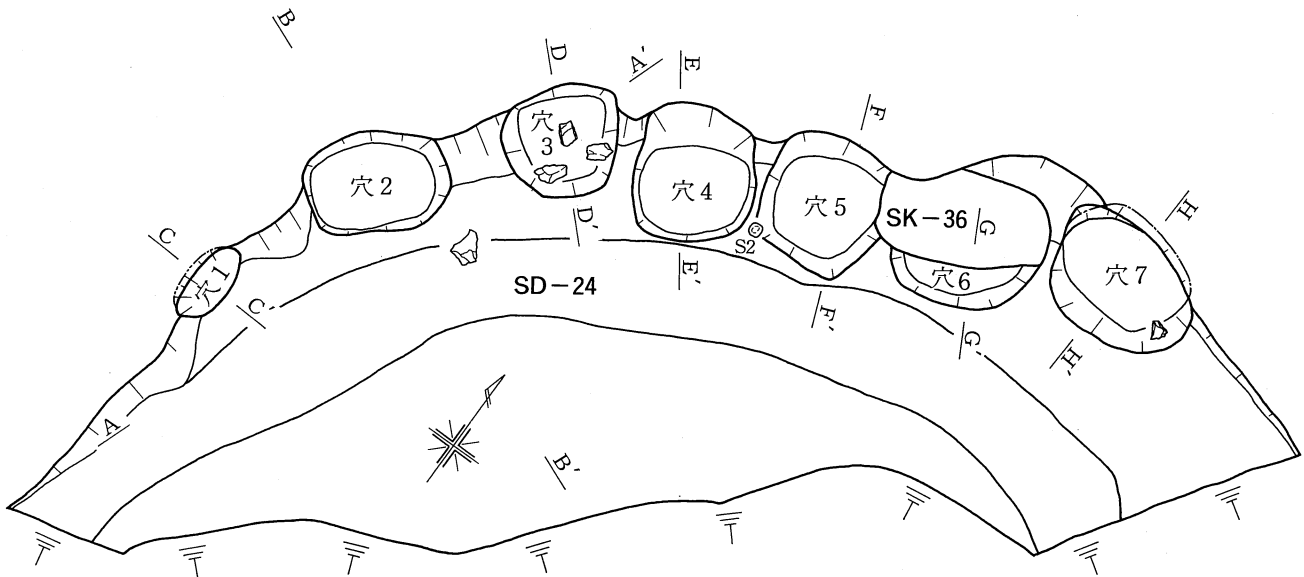
**遺物** 埋土中の上部近くから磨石S2が出土した。S2には煤の付着が認められた。本来はSS-01に伴うものではなく流れ込みによると考えられる。また、穴3の埋土中から鉄鎌F3が出土した。F3は大形の柳葉式鉄鎌で環状関筥被のものである。

**性格** 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。埋土の切り合い関係から穴には時期差が存在することが推測され、その埋土にも相違があるため、穴の性格は様ではなく異なる性格を持つことも考えられる。

**時期** 穴3から出土した鉄鎌は12~13世紀ごろのものと考えられる。よってSS-01は12~13世紀ごろを中心とする中世の遺構と推測される。

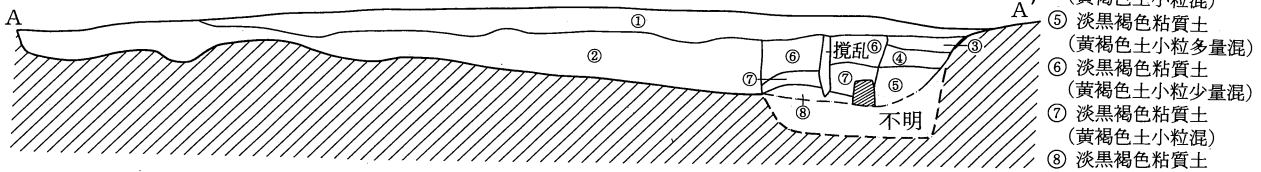


挿図98 SS-01遺物実測図



- ① 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土小粒混)
- ② 淡黒褐色粘質土
- ③ 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土小ブロック多量混)
- ④ 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土小粒混)
- ⑤ 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土小粒多量混)
- ⑥ 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土小粒少量混)
- ⑦ 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土小粒混)
- ⑧ 淡黒褐色粘質土

186.20m



- ① 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土小粒混)
- ② 淡黒褐色粘質土
- ③ 暗褐色粘質土 [SD-24埋土]
- ④ 褐色粘質土 (黄褐色・暗褐色土大粒混)

- ① 淡黒褐色粘質土

186.30m

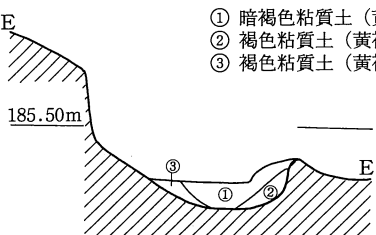
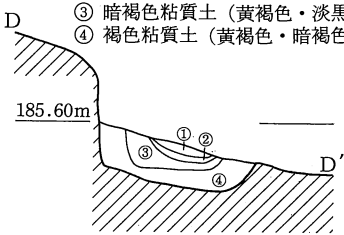


- ① 暗褐色粘質土 (炭混)
- ② 暗赤褐色粘質土 (褐色土小ブロック混)
- ③ 暗褐色粘質土 (黄褐色・淡黒褐色土小ブロック混)
- ④ 褐色粘質土 (黄褐色・暗褐色土大ブロック混)

- ① 暗褐色粘質土 (黄褐色土小粒少量混)
- ② 褐色粘質土 (黄褐色土粒少量混)
- ③ 褐色粘質土 (黄褐色土小粒少量混)

185.60m

185.50m



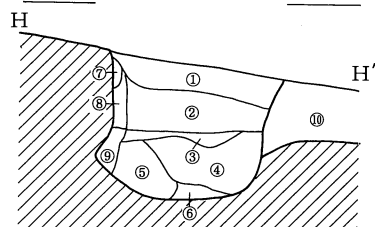
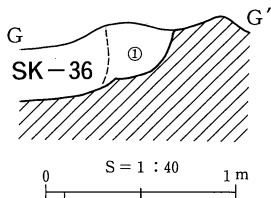
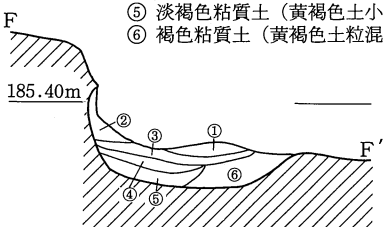
- ① 淡黒褐色粘質土
- ② 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土小粒混)
- ③ 淡褐色粘質土 (黄褐色土小ブロック多量混)
- ④ 褐色粘質土 (黄褐色土大粒混)
- ⑤ 淡赤褐色粘質土 (黄褐色土小粒多量混)
- ⑥ 暗褐色粘質土 (黄褐色・淡黒褐色土大粒混)
- ⑦ 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土小粒混)
- ⑧ 黄褐色粘質土
- ⑨ 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土小粒多量混)
- ⑩ 褐色粘質土 (黄褐色土大粒少量混)

- ① 褐色粘質土 (黄褐色土小粒少量混)
- ② 褐色粘質土 (黄褐色土小粒多量混)
- ③ 淡黒褐色粘質土 (黄褐色土大粒混)
- ④ 黄褐色粘質土
- ⑤ 淡褐色粘質土 (黄褐色土小粒多量混)
- ⑥ 褐色粘質土 (黄褐色土粒混)

- ① 暗褐色粘質土 (黄褐色土小ブロック混)

185.40m

185.70m



S=1:40 1m

挿図99 SS-01遺構図

SS-02 (挿図100・101 図版11・15)

位置 調査地の東端、K-4 グリッド北西隅付近の標高185.2m付近に位置する。遺構の北側は調査地外に続いている。

本遺構は調査地の東側にある谷部に向けて地形が下がりつつある斜面途中にあり、谷に対し主軸が平行する。

本遺構の南西側約3mにはSS-01、東側約7mにSK-25が位置する。

形態 平面形は、検出面・底面ともにやや不整な長方形状を呈し、断面形は浅い「L」字状である。底面の西側には不整な起伏が認められる。

検出規模は、南北方向2.80m、東西方向は1.86m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.19mを測る。底面には2つの舟底状のくぼみが存在する。その規模(長軸×短軸-深さ)は、北側が(131×50-19)cm、南側が(109×44-15)cmである。南側のくぼみ内には3つの石が存在した。

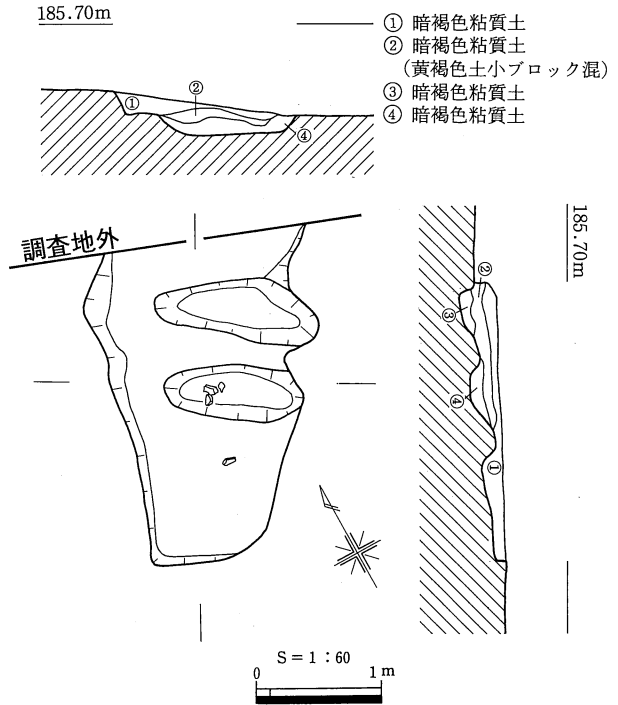
本遺構は、東側に壁体が存在しないため段状遺構と判断したが、遺構の東側は後世の削平を受けて段となっており、そのために土坑状の遺構の東側壁体が削平されている可能性も否定できない。

埋土 埋土は全体で4層に分層した。このうち、③・④層はくぼみ部分の埋土である。

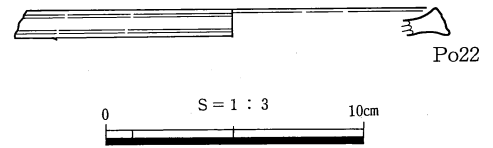
遺物 埋土中より弥生土器の壺と推測される口縁部Po22が流れ込みの状態出土した。Po22は表面の風化が激しいものである。

性格 形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時期 出土した土器は弥生時代中期中葉から後葉頃のものであるが、流れ込みの状態での出土のため遺構の時期を判断する資料とはならず、時期を特定することは出来ない。



挿図100 SS-02遺構図



挿図101 SS-02遺物実測図

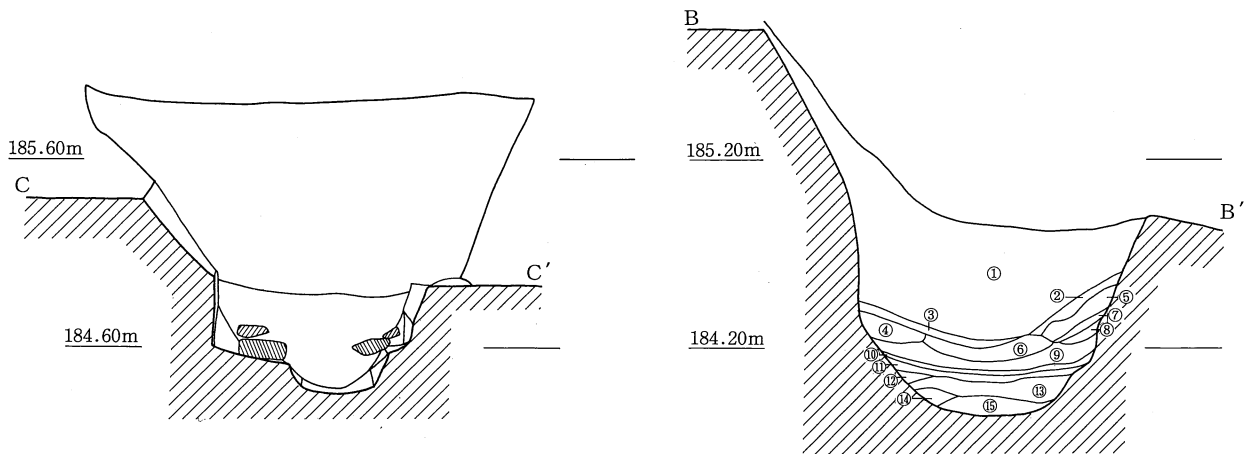
## 第6節 窯状遺構

### 窯状遺構 (挿図102・103 図版12・16)

位置 調査地の南東隅、H-8 グリッド東端の標高185.9m付近に位置する。

形態 窯状遺構は主軸がほぼ東西方向で、等高線に直交する主軸方向である。焚口は谷部に面する東側である。天井部はすでに崩落しており、調査前の遺構部分は窯体部分が窪地となっていて明瞭に識別できる状態であった。遺構北側は「クロボク」と呼ばれる黒褐色土を掘り込んで造られており、当初は土取り跡と考えて地山まで土を除去したため上部を調査することが出来なかった。なお、南側の遺構肩部には板状の石が存在していた。

炭化室の形状は、焚口側に三日月形の段を経てほぼ水平な底面となる。底面は長方形であるが、壁体部では楕円形を呈し、炭化室の前面(東側)がすぼまって焚口となる。壁体は、縦横断面に表されるように底部がすぼまる逆「ハ」字状に立ち上がる。焚口の左右には幅約18cmの「L」字状に掘り込まれた溝があり、そこでは2段に積まれた石が検出された。これより、焚口は積石で構築されていたものと推

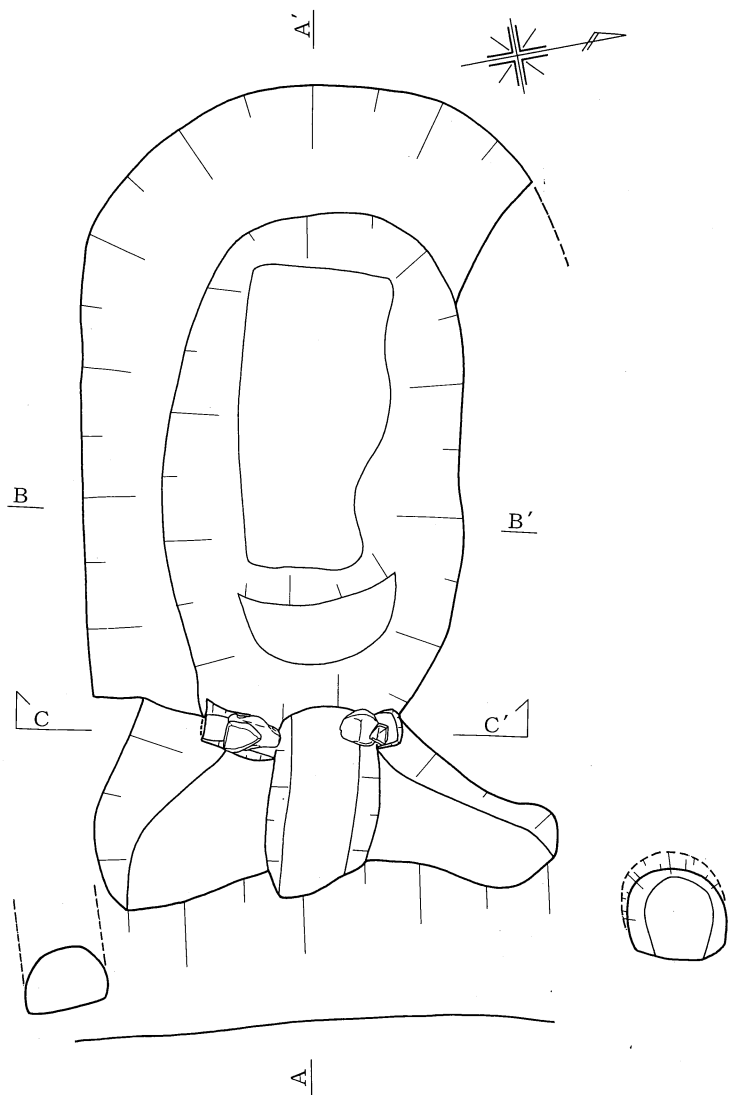


- ① 暗褐色粘質土
- ② 黒褐色粘質土
- ③ 暗褐色粘質土 (暗赤褐色土小粒混)
- ④ 暗黄褐色粘砂土
- ⑤ 赤黄褐色粘質土
- ⑥ 暗褐色粘質土 (赤黄褐色土ブロック混)
- ⑦ 赤黄褐色粘質土 (暗褐色土小粒少量混)
- ⑧ 淡黒褐色粘質土 (赤黄褐色土小粒少量混)
- ⑨ 黄褐色粘質土 (暗褐色土ブロック少量混)
- ⑩ 黒褐色粘質土 (炭片少量混)
- ⑪ 暗灰褐色粘質土 (炭片混)
- ⑫ 灰褐色粘質土 (赤褐色土ブロック混)
- ⑬ 赤褐色粘質土
- ⑭ 暗灰褐色粘質土 (赤褐色土ブロック混)
- ⑮ 暗黄褐色砂質土
- ⑯ 暗褐色粘質土 (暗赤褐色土ブロック混)
- ⑰ 淡黒褐色粘質土 (暗赤褐色土大粒少量混)
- ⑱ 暗赤褐色粘質土
- ⑲ 暗黄褐色粘質土 (暗褐色土小粒少量混)
- ⑳ 暗灰褐色粘質土 (暗褐色土小ブロック混)
- ㉑ 褐色粘質土 (赤褐色土小粒少量混)
- ㉒ 褐色粘質土 (赤褐色土大粒少量混)
- ㉓ 暗褐色粘質土 (淡黒褐色土ブロック少量混)
- ㉔ 暗灰褐色粘質土 (淡黒褐色土小ブロック混)
- ㉕ 淡黒褐色粘質土 (暗赤褐色土小ブロック少量混)
- ㉖ 淡黒褐色粘質土 (暗赤褐色土大ブロック少量混)
- ㉗ 暗赤褐色粘質土 (淡黒褐色土小ブロック混)
- ㉘ 黒褐色粘質土 (暗赤褐色土小ブロック少量混)
- ㉙ 淡黒褐色粘質土 (黄褐色・暗赤褐色土ブロック混)
- ㉚ 暗褐色粘質土 (暗赤褐色土ブロック少量混)

- ㉛ 暗褐色粘質土 (暗赤褐色土小ブロック混)
- ㉜ 暗褐色粘質土
- ㉝ 灰褐色粘質土 (黄褐色土小ブロック少量混)
- ㉞ 淡黒褐色粘質土 (暗赤褐色土小ブロック少量混)
- ㉟ 赤褐色・黄褐色土ブロック混在
- ㊱ 暗褐色粘質土 (黄褐色土ブロック混)

185.20m

184.20m



挿図102 窯状遺構遺構図

測される。焚口前面は「ハ」字状に削り出してテラス部となっている。そのテラス部には炭化室に向けて溝状の掘り込みがある。テラス部を挟む南北には径約50cmのピットが1基ずつ存在した。北側のピットはいびつな碗状であったが、南側のピットは横穴状に掘り込まれていた。ともに土器・炭等の遺物は出土しなかった。

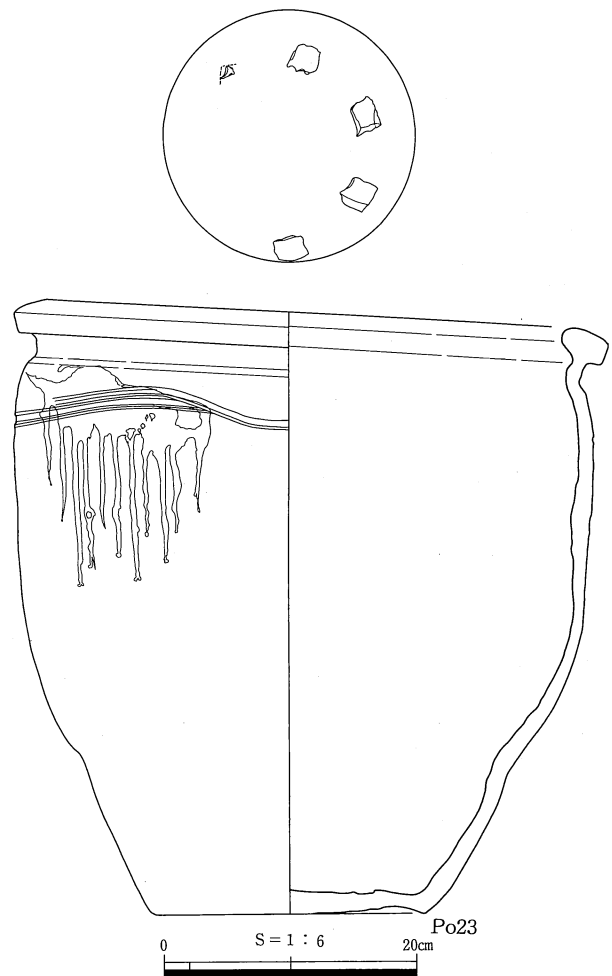
規模は、炭化室の最大長は上面3.30m・底面1.58m、最大幅は上面2.00m以上・底面0.80m、最大高は2.16m、焚口部の溝幅1.04m・最大高0.39m。テラス部の最大長0.75m・最大幅2.26m、溝状掘り込みの最大長0.99m・最大幅0.58m・最大高0.15mを測る。

**埋土** 埋土を36層に分層した。底面直上の⑮層は細かな砂質土であり、炭化室内の水分を処理するためのものであろう。⑮層直上の⑭層は天井部が陥没したと考えられるもので下方が高熱を受けて赤色化している。両層の間に炭層は認められないが、炭焼き後には炭化室内を清掃したためと考えられ、複数回の使用が推測される。⑩・⑪・⑫層は流入土と天井崩落土が混じったと考えられる層であり、奥壁側から徐々に天井部の崩壊が進んでいったと推測される。なお、

⑭層陥没後も天井部を修築して炭焼きを再開したことが⑨・⑫層からわかるが、⑧層に認められるように2度目に天井部が陥没するに及んでこの遺構は放棄されたものと推測される。

**遺物** 埋土上面から甕Po23が出土した。埋土中からは図化はしていないが「大日本麦酒」銘のガラス瓶や陶磁器類が若干出土した。現代のゴミ穴となっていたようである。なお、遺構内ではないが焚口部の前面付近から「寛永通寶」C1が1点出土した。C1は裏面に「元」字がある。

**時期** 操業年代は不明であるが、地元の方が知る限りではこの窯状遺構が使用されたことはないということであり、少なくとも大正期以前のものである。



挿図103 窯状遺構遺物実測図

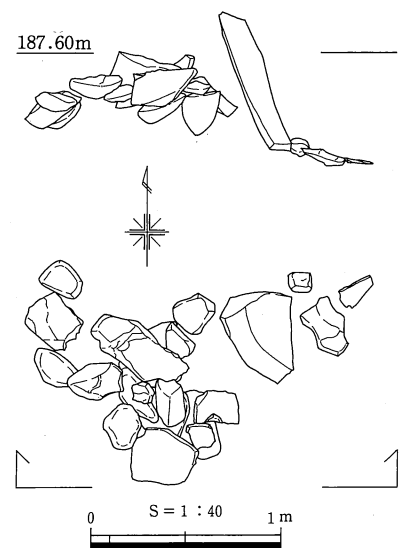
## 第7節 集石遺構

**集石遺構** (挿図104)

**位置** 調査地の北端、F-1グリッド南西隅の標高187.6m付近に位置する。

本遺構は南側約1mにSK-01、西側約2mにSK-16が位置する。

**形態** 集石は山桜の根元部分から検出された。長さ30cm程度のものを中心に20個以上の石が存在した。遺跡地は基本的に石が存在しない所であり、人為的に石が運ばれて来たことが推測される。表面がなめらかな転石もあるが、東側にある立てられた石のよ



挿図104 集石遺構遺構図

うに人為的に面取りされたものや角張るものも存在する。

遺物 集石遺構からは土器の小片などがわずかに出土したが、図化できたものはない。なお、表土剥ぎ時に集石遺構の周辺から完形に近い陶磁器類が出土しており、関連する可能性がある。

性格 地元の方によれば、「塞の神さん」と呼んで信仰の対象であったという。本来は石像なども有ったらしいが移転されている。

時期 集石が形成された時期は不明である。

## 第8節 不明遺構

今年度の調査で不明遺構として扱った遺構は1基である。本遺構はマウンド状に盛土が施されたもので、その下からSK-28をはじめとする土坑が6基検出された。ここでは土坑群についても触れながら報告する。

### SX-01 (挿図105 図版12)

位置 調査地の南西端近く、G・H-7グリッドにまたがり、緩やかに北東から東に向けて地形が下がってからさらに傾斜が急になる地形変換地点の標高187.1m~188.1m付近に位置する。本遺構は北西半分をSD-18に切られている。またSK-28~30・32・34・35の土坑群を本遺構の下から検出した。

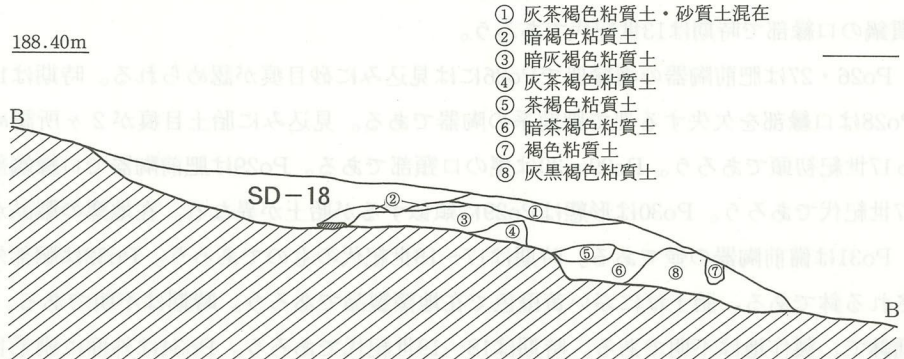
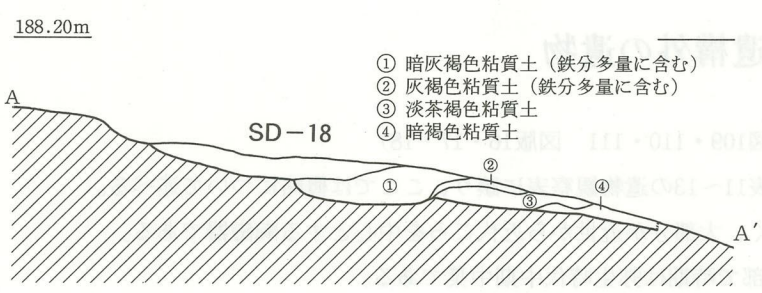
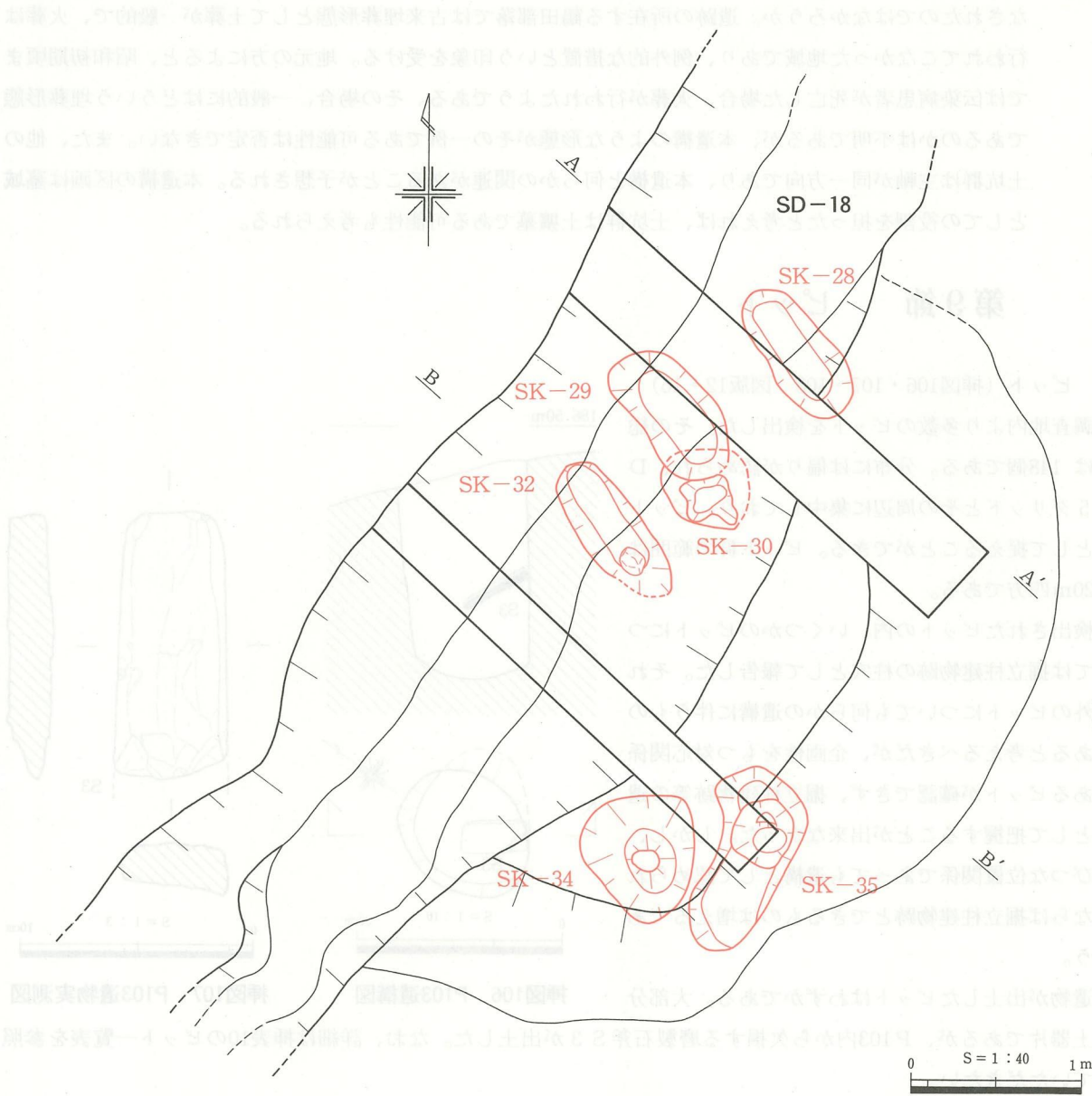
形態 緩斜面から急斜面になる地形変換点にマウンド状の盛り土を施し、頂部をテラス状に造り出している。本遺構をSD-18が切っているため、本来の形態は確認できなかったが、検出面では楕円形を呈すると考えられる。規模は長軸5.50m×短軸3.67mであり、主軸はN-49°-Eである。

埋土 SD-18との切り合い部分を除くと、4~8層に分層できる。断面Bより、斜面に堆積している黒褐色系の土が本遺構の場合最下層に位置しており、その上に暗灰褐色粘質土あるいは灰褐色系の土が堆積している。これは土を盛って造り出されたことを示している。また断面Aの①層はSK-28の埋土で、本遺構を切っていることが認められる。断面Bでは②層がSK-32の埋土にあたり、本遺構を部分的に切っていることが認められ、さらに砂質土が混在する①層が覆っている。付近の他遺構の埋土やいわゆる地山の性質から考えても砂質土は見受けられないことから、①層は人為的に盛られたものと考えられる。

遺物 検出後と掘り下げ中に陶磁器の小片・鉄製品が出土したが図化することはできなかった。また人骨片が少量出土した。

時期 本遺構に内包される土坑群の時期を含めて考えると、本遺構と切り合い関係が認められたのはSK-28とSK-32である。断面Bの①層が人為的に盛られたとするならば、本遺構の築造過程は二時期にわたることが考えられる。本遺構は、最初に盛土が施され、その後にSK-32が掘り込まれ、最後に断面B①層が盛られたと考えられる。それぞれの相対的な新旧関係は、SK-28・29・30は主軸がほぼ同一方向であることからSK-32と同時期、SK-34は盛土が施される以前、SK-35はその検出が断面B①層除去後であるから、SK-32等と時期は前後するだろうがほぼ同時期と考えられる。そして、本遺構は近世初頭に位置付けられるSD-18に切られることから、本遺構と土坑群はそれ以前の遺構ということが出来る。しかし、埋土の土質が周囲の溝状遺構と類似していることから、特定はできないが時期は近世初頭からそれほど遡らないと考えられる。

性格 SK-35出土の人骨片は、他所で茶毘に付してから二次的に埋納されたものとするで考えたが、SD-18の埋土中に炭片が混じる層が認められ、また本遺構内でも人骨片が少量出土していることから、本遺構内で茶毘に付された可能性が考えられる。盛土は二時期にわたると考えたが、最初の盛土の後に遺体を茶毘に付し、二度目の盛土は砂質土を含む土質から考えて、清める意味を込めて砂をまくことが



挿図105 SX-01遺構図



なされたのではなかろうか。遺跡の所在する鶴田部落では古来埋葬形態として土葬が一般的で、火葬は行われてこなかった地域であり、例外的な措置という印象を受ける。地元の方によると、昭和初期頃までは伝染病患者が死亡した場合、火葬が行われたようである。その場合、一般的にはどのような埋葬形態であるのかは不明であるが、本遺構のような形態がその一例である可能性は否定できない。また、他の土坑群は主軸が同一方向であり、本遺構と何らかの関連があることが予想される。本遺構の区画は墓域としての役割を担ったと考えれば、土坑群は土墳墓である可能性も考えられる。

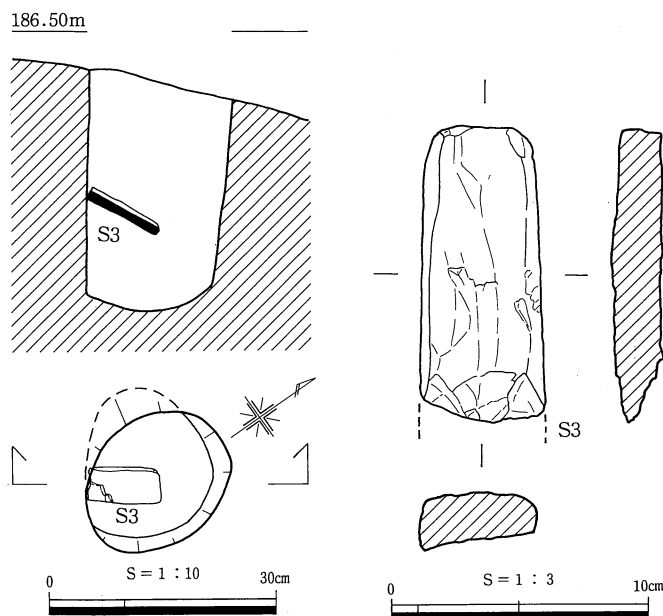
## 第9節 ピット

ピット (挿図106・107・108 図版12・16)

調査地内より多数のピットを検出した。その総数は148個である。分布には偏りが認められ、D-5グリッドとその周辺に集中しており、ピット群として捉えることができる。ピット群の範囲は約20m四方である。

検出されたピットの内、いくつかのピットについては掘立柱建物跡の柱穴として報告した。それ以外のピットについても何らかの遺構に伴うものであると考えるべきだが、企画性をもつ対応関係にあるピットが確認できず、掘立柱建物跡等の遺構として把握することが出来なかった。しかし、いびつな位置関係であっても遺構として認められるならば掘立柱建物跡とできるものは増えるであろう。

遺物が出土したピットはわずかである。大部分は土器片であるが、P103内から欠損する磨製石斧S3が出土した。なお、詳細は挿表10のピット一覧表を参照していただきたい。



挿図106 P103遺構図

挿図107 P103遺物実測図

## 第10節 遺構外の遺物

遺構外出土遺物 (挿図109・110・111 図版16・17・18)

個々の遺物の詳細は挿表11~13の遺物観察表に譲り、ここでは概略について述べる。

出土遺物の量は多くなく、大部分が近世から近代ごろを中心とする陶磁器である。

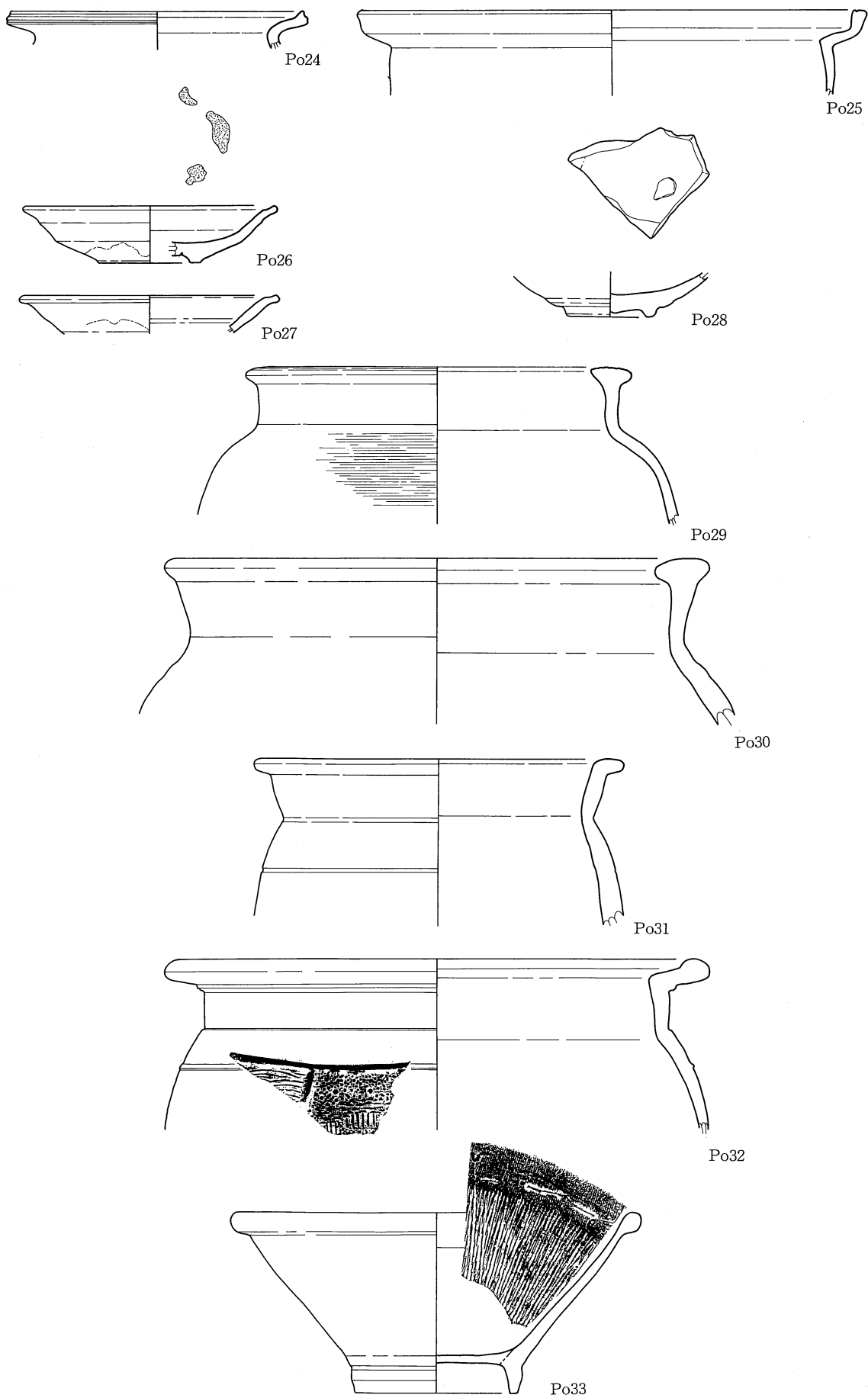
Po24は弥生土器の口縁部で時期は弥生時代中期中葉である。

Po25は瓦質鍋の口縁部で時期は13世紀代であろう。

陶器では、Po26・27は肥前陶器の溝縁皿でPo26には見込みに砂目痕が認められる。時期は17世紀前半代と考えられる。Po28は口縁部を欠失する皿で肥前系の陶器である。見込みに胎土目痕が2ヶ所認められる。時期は16世紀末から17世紀初頭であろう。Po29・30は甕の口頸部である。Po29は肥前陶器で口縁端部を内外に拡張する。時期は17世紀代であろう。Po30は形態はPo29に類似するが胎土が異なる。在地窯の製品か。時期は17世紀代であろう。Po31は備前陶器の壺である。時期は17~18世紀代のものであろう。Po32は胴部外面に型押しによる文様が施される鉢である。胎土はにぶい黄橙色で在地窯製品であろう。時期は不明である。Po33は密な卸目が施される挿鉢で、製作地は不明である。時期は18~19世紀代であろう。Po34は外面に刷毛目状の白色釉が施



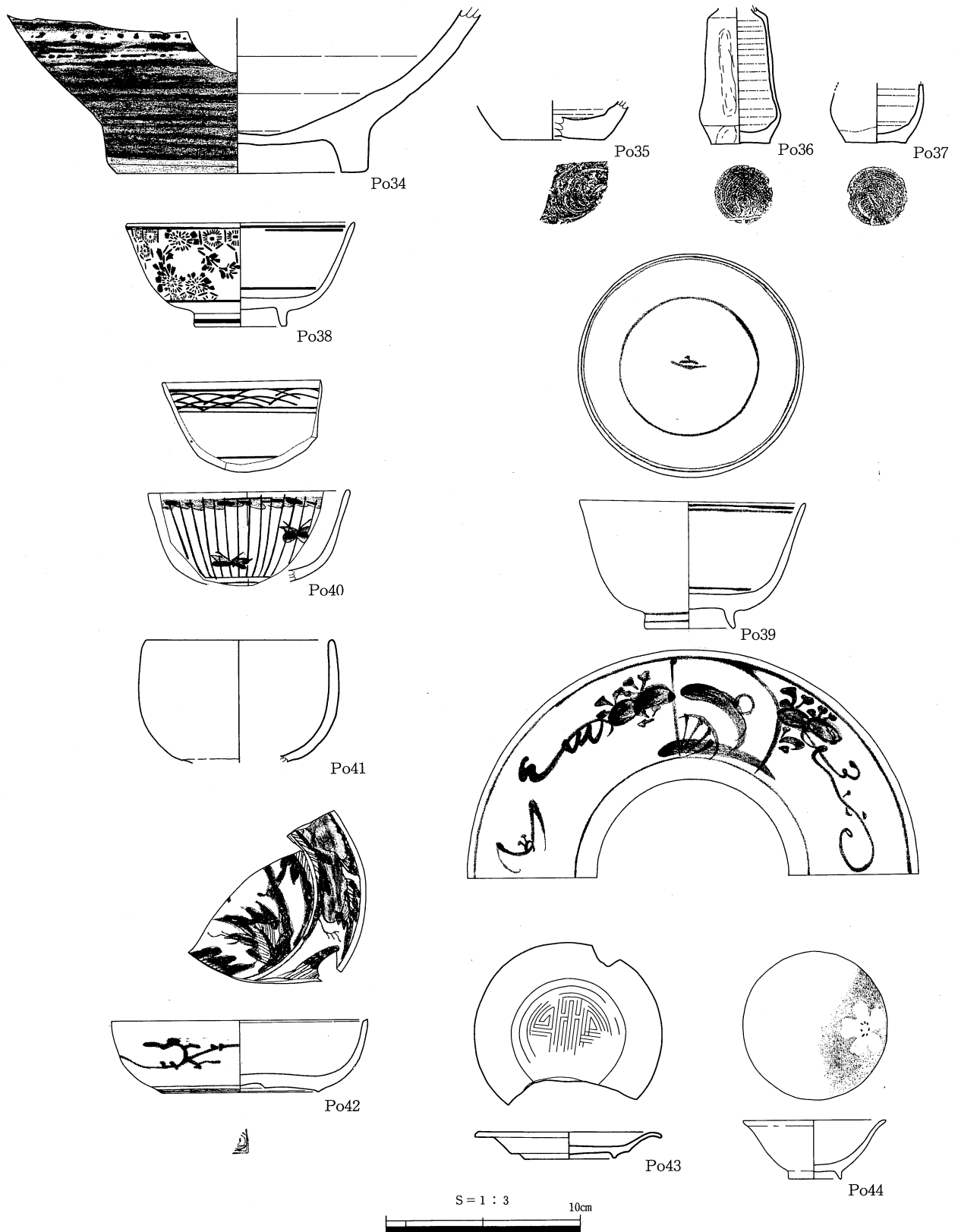
挿図108 ピット位置図



0 S = 1 : 3 10cm

挿図109 遺構外出土遺物実測図(1)

された大鉢の底部である。製作地は不明で、時期は18～19世紀代であろう。Po35は回転糸切り痕が残る平底の底部である。肥前陶器であり、時期は18～19世紀代か。Po36・37は陶器製の茶入れである。ともに底部は回転糸切りされている。江戸時代のものである。



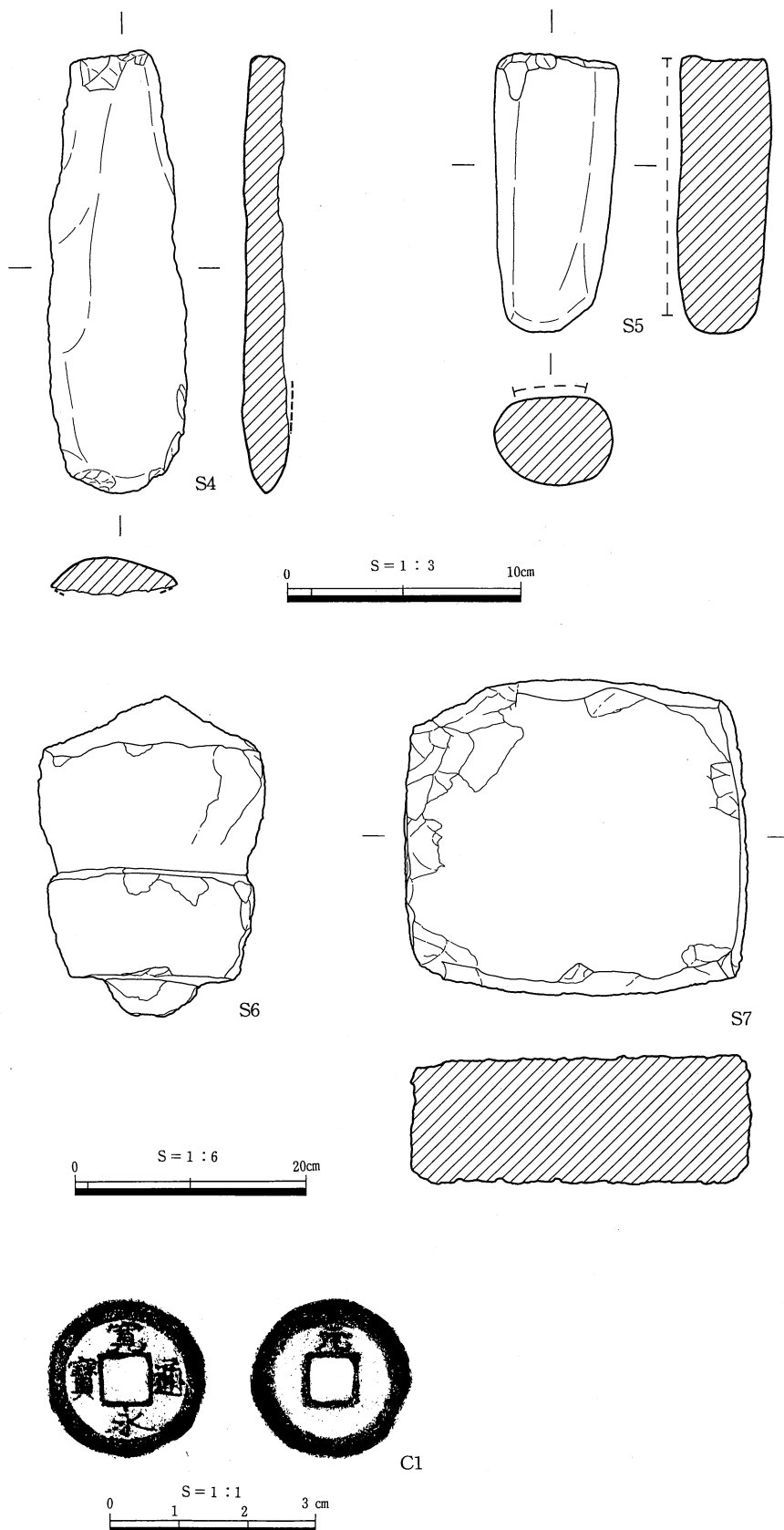
挿図110 遺構外出土遺物実測図(2)

磁器では、Po38~41は碗である。Po38は外面の文様の草花を型紙摺りによって描き、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。肥前磁器の染付で17世紀末~18世紀代のものであろう。Po39は外面に扇と草花を描くものである。多くは線書きであるが一部に濃みが使用される。肥前磁器の染付で18~19世紀のものであろう。Po40は外面に蝶らしき文様を描く。肥前系の陶胎染付で18世紀以降のものであろう。Po41は口縁部が直立するものである。肥前系の陶胎青磁で18世紀代のものであろう。Po42は五寸皿で、口縁部が短く直立気味になるものである。内面の意匠は良く分からないが枝葉状のものがかなり密に描かれる。外面にはやや退化した唐草文を巡らせる。高台は蛇ノ目凹形高台で、高台内の裏銘は二重方形枠内に「福」、いわゆる渦福である。時期は18世紀代であらう。Po43は見込みに雷文状の陰刻が施されている。肥前系の陶胎白磁で、18~19世紀代のものであろう。Po44は内面に吹墨により桜の花を描く猪口である。肥前磁器で17世紀前半のものであろう。

S4は剥離の認められる磨製石斧である。刃部は残るが調整は粗い。S5は折れた磨石である。擦り面は平滑で明瞭である。S6・7は集石遺構の近くにあった五輪塔である。S6は空風輪部である。空輪・風輪はその側面が直線状であるが、空輪部上方のとがりは大きくないことから室町時代後期~末のものであろう。S7の地輪は幅に対して高さが低い古い要素があり、室町時代後期でも早い段階のものであろう。よってS6・7は時期が異なる可能性がある。

C1は1741年を初鑄年とする寛永通寶である。

C1は1741年を初鑄年とする寛永通寶である。



挿図111 遺構外遺物実測図(3)

## 第11節 まとめ

鶴田中峯山遺跡から出土した遺物は多くはないが、注目すべき特徴的な遺物が遺構に伴って数点出土している。遺物については各遺構本文中でも触れているが、ここで改めて触れておきたい。

SK-21から土師質土器の碗Po8が出土している。SK-21は土壌墓の可能性を考えていたが、リン・カルシウム分析の結果ではその可能性がほぼ否定された土坑である。鳥取県における古代・中世の土器の様相は明確ではなく、県内の編年も確立していない。そのため、出土したPo8についても時期を明確に出来ないが、日本海側で土器様相が類似するとの指摘<sup>(1)</sup>がある。そこで、石川県立埋蔵文化財センターが調査・報告されている漆町遺跡の編年を援用することにする。Po8は口径16.4cm、底部径6.6cm、器高5.4cmを測る。形態は、口縁部が内湾することなく直線的に外方に伸びるもので、底部は静止糸切りである。この土器は漆町遺跡編年で「D2タイプ」とされているものに該当<sup>(2)</sup>する。このD2タイプは10世紀前半から11世紀前後にかけてに時期が限定されたとの年代観が与えられており、鶴田中峯山遺跡出土のPo8は形態が小型化していないことから10世紀でも中葉頃を中心とする土器と推測される。この時期は伯耆国庁跡の第3段階<sup>(3)</sup>に継続する時期に当たる。しかし、伯耆国庁跡の第3段階では、「法量が小さくなり、口縁部の形態は丸みを増して」いく傾向が指摘されており、Po8とは様相を異にしている。よって、この土器は律令期の土師質土器生産とは系譜が異なるのではなからうか。

SK-20から鉄製の鎌F1が出土した。F1は土坑底面直上に刃先を南に向けて置かれていた。遺構本文中でも触れたが、この鉄鎌は墓に伴うと考えられるものである。類例としては長瀬高浜遺跡のSX'15で底面直上から鉄鎌や鉄釘に伴って人骨や歯が出土している例があり、時期は中世期と考えられている<sup>(4)</sup>。

古墳時代の鉄製品については、古墳出土の鉄製品を中心として多くの資料があり、数多くの研究が発表されている。しかし、古代以降の鉄製品については必ずしも十分な研究が行われているとは言い難く、古代以降の鉄鎌についてもその形式分類・編年が東日本で精力的に進められているもの<sup>(5)</sup>の、西日本では資料的制約もあり十分な検討は加えられていない。鉄鎌においては、刃部が破損しても研ぎ直して再利用されるため出土した時点の形態は製作時の形態とは異なる可能性を考慮する必要があり、形式分類には一層の注意が必要である。

古代の鉄鎌は、鍛造で無茎、基部折返しを有するもので、有茎鎌は平安時代に至ってもまだ一般的ではなかったらしい<sup>(6)</sup>。中世以降の鉄鎌については、断片的な資料は存在するものの良好な資料が少なく、十分な検討がなされているとは言えないのが現状であり、「中世になるとほぼ今日の鎌の原型が完成した」<sup>(6)</sup>ため、その形式分類は困難となっている。鶴田中峯山遺跡出土の鉄鎌も形態から中世以降の遺物であると推測されるが、時期がいつまで下がるのか不明である。

SK-37から铸造の鉄鍋F2が出土した。口径は推定31.2cm、残存する器高は12.5cmである。この遺物は検出・取り上げまでは良好な状態を保っていたのであるが、取り上げ後急激に腐食が進み、破片の多くが径1cm前後の粒状に割れてしまった。

F2は口縁部に屈曲が付くものであるが底部は残っていない。河内型鉄鍋で五十川伸矢氏の分類の鍋A<sup>(7)</sup>に当たる。時期は13世紀後半から14世紀にかけての幅で捉えられるものである<sup>(8)</sup>が、口縁部の形態は古い形態を呈する。鉄鍋は破損した場合には回収されて素材として再利用されたため遺存資料が少なく、そのうち全体形が判明するものはさらに限られる。類例は西日本に散発的に存在するようであるが、鳥取県内には管見の限りでは見当たらないようであり、本例が県内唯一の例であろう。鳥根県では富田川河床遺跡の建物跡SB031から鍋Aが1点・鍋Bが2点まとまって出土<sup>(9)</sup>している。富田川河床遺跡から出土した鍋Aは、口縁部の屈曲がほとんど無くなっているもので、鶴田中峯山遺跡出土のF2よりも時期の下るものであり、このF2は山陰地方に搬入された鉄鍋の初期の遺物の1例であろう。

SS-01の穴3から鉄鏃F3が出土した。西日本においては、鉄鏃の研究は古墳出土の鉄鏃を対象とするものがほとんどで、古代以降の鉄鏃を対象とした検討はほとんどなされていない。古代以降の鉄鏃については、関東地方を中心に集落跡から出土したまとまった資料に基づいた型式分類・編年案が提示<sup>(10)</sup>されている。しかし、中

世の鉄鎌は資料数が少なく、型式分類・編年は十分なものとはなっていない。そのうえ、関東地方を中心とする東日本の編年をそのまま西日本にも適用できるのかについては検討が必要である。

本例については鎌身部が大型であり、茎部が長くなっていること、篋被が環台形を呈することから鎌倉時代以降の遺物と推測されるが明確にはできない。

註

- (1) 橋本久和「各地の土器様相 山陰」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995
- (2) 田嶋明人「9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『漆町遺跡 I』  
石川県立埋蔵文化財センター 1986
- (3) 『伯耆国片跡発掘調査概報 (第5・6次)』倉吉市教育委員会 1979
- (4) 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 IV』財団法人鳥取県教育文化財団 1982
- (5) 山口直樹「関東地方土師時代後・晩Ⅰ・晩Ⅱ期における農具について」『駿台史學 45』 1978  
鶴間正昭「武蔵国における鉄鎌の形式分類とその編年的予察」『法政考古学 10』 1985  
古庄浩明「古代における鉄製農工具の所有形態」『考古学雑誌 79-3』 1995
- (6) 松井和幸「鉄鎌について」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会編 1993
- (7) 五十川伸矢「古代・中世の鉄製農具」『国立歴史民俗博物館研究報告 第46集』 1992
- (8) 菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告 第19集』 1989
- (9) 五十川伸矢氏の御教示による  
『富田川河床遺跡発掘調査報告書 III』鳥根県教育委員会 1983
- (10) 平野修「奈良・平安時代集落出土の鉄鎌をめぐる若干の問題」  
『帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第1集』 1989  
津野仁「古代・中世の鉄鎌」『物質文化 54』 1990  
松崎元樹「丘陵地における古代鉄器生産の諸問題」『東京都埋蔵文化財センター研究論集 VIII』 1990  
飯塚武司「鉄鎌」『東京都埋蔵文化財センター研究論集 X』 1991
- (11) 類例の存在を知った。鳥取市にある渡辺美術館に、出土地不明であるが形態・規模がよく類似する鉄鎌が1点所蔵されている。

挿表6 竪穴住居跡一覧表

( ) 推定値

遺構名	挿図 番号	図版 番号	グリッド	形態	規模 (m)	床面積 (m <sup>2</sup> )	残存壁高 (m)	支柱穴 (本)	遺物	時期
SI-01 A	26・27	5・13	F-3・4 G-3・4	円形	(6.8)×(6.8)	36.2	0.08	6	弥生底部	
6										
SI-02 A	28・29	5・13	F・G-3	円形	(7.1)×(6.8)	37.8		6	弥生甕	弥生中期中葉
4								土器片		

挿表7 掘立柱建物跡一覧表

遺構名	挿図 番号	図版 番号	グリッド	桁×梁 (間)	規模(桁) (m)		規模(梁) (m)		主軸方向	遺物	時期
SB-01	30	6	G・H-3	1×1	4.3	4.1	3.9	3.8	N-24°-E	土器片	弥生時代?
SB-02	31	6	E・F-2	3×1	4.2	4.1	2.3	2.1	N-19°-E	土器片	弥生時代?
SB-03	32	6	D・E-2	3×1	7.7		3.7		N-40°-E		

挿表 8 土坑・土壇墓一覧表

( ) 残存値

遺構名	挿図 番号	図版 番号	グリッド	平面形	規模(長軸-短軸)cm		深さ (cm)	長軸方向	遺物	備考
					検出面	底面				
SK-01	33		F-2	楕円形	90-41	45-25	75	N-42°-E		落し穴
SK-02	34		F-2	隅丸長方形	95-47	75-36	97	N-36°-E		落し穴
SK-03	35		E-2	不整な楕円形	107-54	90-25	20	N-81°-E		
SK-04	36		E-2・3	隅丸長台形	114-54	107-48	32	N-25°-E		土壇墓
SK-05	37	7	G-2	隅丸長方形	130-70	100-45	102	N-15°-W		落し穴
SK-06	38		G-2	楕円形	127-93	91-78	92	N-13°-E		土壇墓
SK-07	39		F-3	隅丸長方形	65-52	50-38	31	N-32°-E		
SK-08	40	7	F-5	隅丸長方形	114-87	92-64	107	N-38°-E		落し穴
SK-09	41・42	7・13	F-2	楕円形	99-63	87-61	35	N-70°-W	陶器皿	土壇墓
SK-10	43		G-2	楕円形	116-86	84-56	25	N-S	土器片	
SK-11	44・45	13	G-3	不整形	134-99	117-65	20	N-27°-E	弥生甕	
SK-12	46・47	8・13	G-2	不整な楕円形	177-57	145-36	29	N-68°-W	弥生甕・壺	
SK-13	48		H-6	隅丸長方形	128-95	94-62	108	N-46°-E	土器片	落し穴
SK-14	49		D-4	楕円形	74-60	40-34	19	N-19°-E		
SK-15	50		F-2	隅丸長方形	68-50	55-32	32	N-11°-W		
SK-16	51		F-2	隅丸長方形	95-68	73-56	40	N-55°-E		
SK-17	52		F-7	隅丸長方形	97-64	87-48	14	N-24°-W		
SK-18	53		G-6	楕円形	81-68	45-35	38	N-72°-W		
SK-19	54		F-2	楕円形	50-39	33-24	16	N-S		
SK-20	55・56	8・13	C・D-5	隅丸長方形	119-80	94-57	30	N-17°-E	鉄鎌	土壇墓
SK-21	57・58	8・14	C-6	隅丸三角形	81-68	61-52	43	N-35°-W	土師質土器碗	
SK-22	59		G-7・8	楕円形	117-59	84-22	42	N-50°-E		
SK-23	60		E・F-5	隅丸長方形	110-64	66-48	35	N-78°-W		
SK-24	61・62	14	K-4	隅丸長方形	96-65		45	N-57°-W	土人形、陶器灯明皿 陶器・磁器片	
SK-25	63・64	14	K-4	隅丸長方形	104-68		42	N-46°-W	陶器油壺 陶器・磁器片	
SK-26	65		G-5	楕円形	83-41	54-21	28	N-50°-W		
SK-27	66		C-5	楕円形	108-90	90-71	36	N-64°-W		
SK-28	67・105		H-7	楕円形	88-40	67-18	14	N-33°-W		
SK-29	68・105		H-7	楕円形	86-46	63-25	23	N-35°-W		
SK-30	69・105		H-7	円形	59-(47)	23-13	33	N-60°-W		
SK-31	70		G-2	楕円形	75-57	55-31	24	N-S		
SK-32	71・105		H-7	楕円形	95-36	72-19	14	N-39°-W		
SK-33	72		C-4	半円形	100-(68)	80-(50)	26	N-66°-E		
SK-34	73・105		H-7	隅丸三角形	74-68	38-30	22	N-6°-W		
SK-35	74・105	9	H-7	いびつな楕円形	107-60	91-32	24	N-29°-E	人骨	
SK-36	75	9	J-4	楕円形	136-90	115-75	60	N-65°-E	人骨	土壇墓
SK-37	76・77	9・14	C-6	円形	47-41	27-24	12	N-S	鉄鍋	



挿表9 溝状遺構一覧表

遺構名	挿図 番号	図版 番号	規模 (m) 全長×幅-深さ	主軸方向	遺物	時期
SD-01	78・80	10・14	31.80×0.40~1.80-0.45	N-30°-E	陶器土瓶・陶器土瓶蓋・砥石	近世
SD-02	79・80	15	9.60×0.60~0.84-0.15	N-36°-E	弥生壺	
SD-03	80		11.00×0.60~0.90-0.15	N-30°-E		
SD-04	80		3.80×0.44~0.60-0.08	N-87°-W		
SD-05	80		6.40×0.34~0.90-0.19	N-75°-W		
SD-06	81		7.80×0.30~0.70-0.20	N-20°-E		
SD-07	80		1.90×0.50 -0.20	N-73°-W		
SD-08	81		36.00×0.24~1.60-0.25	N-67°-W N-38°-E	土器片	
SD-09	81		21.10×0.30~0.80-0.25	N-47°-W	土器片	
SD-10	81		5.30×0.40~0.50-0.03	N-24°-E		
SD-11	82		4.40×0.24~0.74-0.15	N-67°-W		
SD-12	84		12.20×0.18~0.36-0.08	N-68°-W		
SD-13	83・85	15	12.30×0.30~0.90-0.08	N-59°-W	陶器	近世
SD-14	87		1.46×0.30~0.42-0.20	N-25°-E		
SD-15	86・88	10・15	27.60×0.40~1.40-0.45	N-21°-E	陶器	近世
SD-16	89		2.80×0.20~0.34-0.08	N-15°-E		
SD-17	90		5.44×0.40~0.84-0.20	N-40°-E		
SD-18	91・92	12・15	27.00×0.50~2.10-0.60	N-55°-E	肥前陶器・陶器壺・磁器・鉄片	近世
SD-19	91		4.10×0.30~0.40-0.08	N-67°-W		近世
SD-20	91・93	15	8.40×0.34~0.60-0.15	N-58°-E	陶器	近世
SD-21	91		10.20×0.30~0.90-0.27	N-49°-E		近世
SD-22	94		4.90×0.40~0.52-0.05	N-51°-E		近世
SD-23	95		15.80×0.40~0.86-0.42	N-12°-E		
SD-24	96		9.40×0.50~0.84-0.13	弧状		
SD-25	97		1.40×0.36 -0.15	N-7°-E		

挿表10 ピット一覧表

柱穴 番号	グリッド	規模 cm		層	土色・土質	柱根 有無	備考
		長径×短径-深さ					
1	C-5	19×18-25		1	暗褐色粘質土(黄褐色土小粒混)	×	
2	C-5	16×15-13		1	淡黒褐色粘質土(黄褐色土小粒混)	×	
3	C-5	24×22-17		1	淡黒褐色粘質土(褐色土小ブロック少量混)	×	
4	C-6	21×18-28		1	黒褐色粘質土	×	
5	C-6	35×24-33		1	黒褐色粘質土	×	
6	C-6	21×19-21		1	黒褐色粘質土	×	
7	C-6	20×19-23		1	黒褐色粘質土	×	
8	C-6	31×23-40		1	褐色粘質土	×	
9	C-6	28×25-13		1	暗褐色粘質土(黄褐色・淡黒褐色土小ブロック混)	×	
10	C-6	22×18-22		3	①黒褐色粘質土 ②黄褐色粘質土 ③黒褐色粘質土	×	
11	C-8	23×21-17		1	黒褐色粘質土	×	
12	C-8	25×22-25		1	黒褐色粘質土	×	
13	C-8	25×20-32		1	黒褐色粘質土	×	
14	C-8	25×20-30		1	黒褐色粘質土	×	

柱穴 番号	グリッド	規模 cm	層	土 色・土 質	柱根 有無	備考
		長径×短径-深さ				
15	D-2	29×24-20	1	黒褐色粘質土	×	
16	D-2	22×21-21	1	暗褐色粘質土	×	
17	D-2	37×35-60	1	暗褐色粘質土	×	
18	D-3	27×24-60	2	①黄褐色粘質土 ②暗褐色粘質土	×	
19	D-3	15×14-15	1	淡黒褐色粘質土	×	
20	D-3	17×15-16	1	淡黒褐色粘質土	×	
21	D-4	21×19-18	1	黒褐色粘質土	×	
22	D-4	35×21-24	3	①淡黒褐色粘質土 ②淡褐色粘質土 ③淡黒褐色粘質土	×	
23	D-5	26×22-19	1	暗褐色粘質土	×	
24	D-5	25×25-29	1	黒褐色粘質土 (暗褐色土小ブロック少量混)	×	
25	D-5	21×20-21	1	暗褐色粘質土 (褐色土大粒混)	×	
26	D-5	24×21-19	1	黒褐色粘質土 (黄褐色土小粒少量混)	×	
27	D-5	21×19-16	1	淡黒褐色粘質土	×	
28	D-5	22×20-16	1	暗褐色粘質土	×	
29	D-5	23×19-27	1	黒褐色粘質土	×	
30	D-5	24×18-23	1	黒褐色粘質土	×	
31	D-5	22×18-18	1	淡黒褐色粘質土 (黄褐色土粒少量混)	×	
32	D-5	25×19-26	1	黒褐色粘質土 (黄褐色土小ブロック少量混)	×	
33	D-5	25×20-22	1	淡黒褐色粘質土 (暗褐色土ブロック混)	×	
34	D-5	23×20-23	1	黒褐色粘質土	×	
35	D-5	22×16-18	1	黒褐色粘質土	×	
36	D-5	19×18-22	1	黒褐色粘質土	×	
37	D-5	21×20-14	1	黒褐色粘質土	×	
38	D-5	22×19-29	1	黒褐色粘質土 (黄褐色土小粒混)	×	
39	D-5	22×20-20	1	淡黒褐色粘質土	×	
40	D-5	18×16-20	1	暗褐色粘質土	×	
41	D-5	27×26-17	1	淡黒褐色粘質土	×	
42	D-6	22×20-25	1	黒褐色粘質土	×	
43	D-6	28×21-31	1	淡黒褐色粘質土	×	
44	D-6	20×20-20	1	暗褐色粘質土	×	
45	D-6	24×20-19	1	黒褐色粘質土	×	
46	D-6	19×15-16	2	①淡黒褐色粘質土 ②暗褐色粘質土 (黄褐色土小粒多量混)	×	
47	D-6	30×22-31	1	黒褐色粘質土	×	
48	D-6	20×20-27	1	黒褐色粘質土	×	
49	D-6	20×19-15	1	黒褐色粘質土	×	
50	D-6	21×17-28	1	黒褐色粘質土	×	
51	D-6	19×17-24	1	淡黒褐色粘質土	×	
52	D-6	25×20-19	1	淡黒褐色粘質土 (黄褐色土大粒少量混)	×	
53	D-6	26×25-33	1	黒褐色粘質土	×	
54	D-6	24×19-15	1	淡黒褐色粘質土	×	
55	D-6	35×33-30	1	黒褐色粘質土	×	
56	D-6	24×18-19	1	褐色粘質土	×	
57	D-6	22×17-16	1	暗褐色粘質土 (黄褐色土粒少量混)	×	
58	D-6	22×20-12	1	暗褐色粘質土	×	
59	D-6	31×30-28	1	褐色粘質土 (淡褐色土小ブロック少量混)	×	
60	D-6	24×21-24	1	黒褐色粘質土	×	
61	D-7	32×25-16	1	暗褐色粘質土	×	

柱穴 番号	グリッド	規模 cm	層	土 色・土 質	柱根 有無	備考
		長径×短径-深さ				
62	D-7	22×21-20	1	黒褐色粘質土	×	
63	D-7	30×24-28	1	黒褐色粘質土	×	
64	D-8	22×19-27	1	黒褐色粘質土	×	
65	D-8	16×14-16	1	黒褐色粘質土	×	
66	D-8	17×15-19	1	黒褐色粘質土	×	
67	E-2	18×15-13	1	暗褐色粘質土	×	
68	E-2	31×26-42	1	暗褐色粘質土 (褐色土混)	×	
69	E-2	20×19-20	1	暗褐色粘質土 (黄褐色土小ブロック少量混)	×	
70	E-2	26×22-13	1	暗茶褐色粘質土	×	
71	E-3	18×17-28	1	淡黒褐色粘質土	×	
72	E-4	22×22-17	1	淡黒褐色粘質土	×	
73	E-4	16×14-13	1	暗褐色粘質土	×	
74	E-4	28×21-30	1	黒褐色粘質土 (黄褐色土ブロック少量混)	×	
75	E-4	18×17-23	1	淡黒褐色粘質土	×	
76	E-4	16×16-23	1	黒褐色粘質土	×	
77	E-4	22×18-25	2	①黒褐色粘質土 ②暗褐色粘質土 (褐色土粒混)	×	
78	E-5	16×16-20	1	暗褐色粘質土	×	
79	E-5	29×27-28	1	淡黒褐色粘質土	×	
80	E-5	25×23-20	1	淡黒褐色粘質土	×	
81	E-5	20×18-26	1	黒褐色粘質土	×	
82	E-5	21×20-19	1	暗褐色粘質土	×	
83	E-5	21×19-33	1	黒褐色粘質土	×	
84	E-5	25×25-22	1	黒褐色粘質土	×	
85	E-5	20×18-38	1	黒褐色粘質土	×	
86	E-5	25×21-31	1	黒褐色粘質土 (暗茶褐色土小ブロック少量混)	×	
87	E-5	23×19-28	1	淡黒褐色粘質土	×	
88	E-5	23×16-23	1	淡黒褐色粘質土	×	
89	E-5	17×16-15	1	暗褐色粘質土	×	
90	E-5	22×22-29	1	暗褐色粘質土	×	
91	E-5	22×21-29	1	暗褐色粘質土	×	
92	E-6	20×19-11	1	暗褐色粘質土	×	
93	E-6	18×18-28	1	黒褐色粘質土	×	
94	E-6	14×13-15	1	淡黒褐色粘質土	×	
95	E-6	21×16-23	1	黒褐色粘質土	×	
96	E-6	20×16-18	1	黒褐色粘質土	×	
97	E-6	34×31-22	1	褐色粘質土	×	
98	E-7	22×18-23	1	黒褐色粘質土	×	
99	E-7	20×18-19	1	黒褐色粘質土	×	
100	E-7	22×21-27	1	黒褐色粘質土	×	
101	F-1	24×20-30	1	黒褐色粘質土	×	
102	F-2	22×18-33	1	暗褐色粘質土	×	
103	F-2	20×18-29	1	黒褐色粘質土	×	
104	F-2	20×18-23	1	暗褐色粘質土	×	
105	F-2	19×18-22	1	黒褐色粘質土	×	
106	F-2	30×27-21	1	暗灰褐色粘質土	×	
107	F-2	22×20-10	1	暗灰褐色粘質土	×	
108	F-2	23×20-15	1	暗褐色粘質土	×	
109	F-3	14×13-16	1	淡黒褐色粘質土	×	
110	F-4	23×21-17	1	暗褐色粘質土 (黒褐色・黄褐色土小ブロック混)	×	
111	F-4	28×24-45	1	黒褐色粘質土	×	

柱穴 番号	グリッド	規模 cm		層	土 色・土 質	柱根 有無	備考
		長径×短径-深さ					
112	E-5	20×19-27		1	暗褐色粘質土	×	
113	F-6	21×16-14		1	淡黒褐色粘質土	×	
114	F-7	19×16-18		1	淡黒褐色粘質土	×	
115	G-1	20×19-13		1	暗褐色粘質土	×	
116	G-1	27×23-23		1	黒褐色粘質土	×	
117	G-1	19×17-28		1	黒褐色粘質土	×	
118	G-2	31×31-34		1	黒褐色粘質土 (褐色土小ブロック多量混)	×	
119	G-2	29×23-62		1	暗褐色粘質土	×	
120	G-3	18×17-20		1	暗褐色粘質土	×	
121	G-3	19×19-18		1	淡黒褐色粘質土	×	
122	G-3	24×21-13		1	暗褐色粘質土	×	
123	G-3	23×15-21		1	暗褐色粘質土	×	
124	G-3	28×21-11		1	褐色粘質土	×	
125	G-3	24×22-16		1	暗褐色粘質土	×	
126	G-4	22×19-9		1	黒褐色粘質土	×	
127	G-4	22×19-15		1	暗褐色粘質土 (黄褐色土小ブロック少量混)	×	
128	G-4	28×24-24		1	淡黒褐色粘質土	×	
129	G-5	29×24-19		1	黒褐色粘質土	×	
130	G-5	21×20-35		1	黒褐色粘質土 (黄褐色土ブロック少量混)	×	
131	G-5	21×21-20		1	淡黒褐色粘質土	×	
132	G-7	23×20-17		1	黒褐色粘質土	×	
133	H-1	21×16-20		1	黒褐色粘質土	×	
134	H-1	27×22-17		1	黒褐色粘質土	×	
135	H-2	23×19-13		1	暗褐色粘質土	×	
136	H-2	26×25-24		1	黒褐色粘質土	×	
137	H-3	27×20-19		1	淡黒褐色粘質土	×	
138	H-3	22×19-15		1	淡黒褐色粘質土	×	
139	H-3	22×22-27		1	淡黒褐色粘質土 (黄褐色土小粒少量混)	×	
140	H-4	20×19-13		1	暗褐色粘質土	×	
141	H-6	20×19-15		1	黒褐色粘質土	×	
142	H-7	50×40-27		2	①褐色粘質土 (暗灰褐色土混) ②暗灰褐色粘質土	×	
143	I-4	21×17-17		1	淡黒褐色粘質土	×	
144	I-4	27×23-23		1	淡黒褐色粘質土	×	
145	I-4	23×23-48		1	淡黒褐色粘質土	×	
146	I-5	20×15-15		1	淡黒褐色粘質土	×	
147	J-3	22×22-14		1	暗褐色粘質土	×	
148	J-4	21×21-28		1	暗褐色粘質土 (褐色土小ブロック多量混)	×	

挿表11 土器・土製品観察表

S I - 0 1

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種 類 器 種	法 量 (cm)	形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
1 26 13	196	弥生土器 底部	② 5.6△ ③ 4.8※	平底。	内外面ともに風化のため調整不明。	やや粗 細砂粒含む	良	内面暗灰黄色 外面明褐色	表-9

S I - 0 2

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種 類 器 種	法 量 (cm)	形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
2 29 13	170	弥生土器 甕	①16.8※ ② 1.0△	口縁端部を上方に拡張し、外面に 1条の凹線と刻み目を施す。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面ともに橙 色	外面スス付 着 表-7

## SK-09

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
3 42 13	125	備前陶器 皿	①13.5 ②3.0 ③4.5	口縁端部近くで段をもつ溝縁皿。 内面底部3ヶ所に砂目痕が残る。	内面…回転ナデ。施釉。 外面…回転ナデ。高台付近まで施 釉。高台左回転での削り出 し。	密	良好	内外面ともに明 赤褐色	清水-4

## SK-11

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
4 45 13	119 130	弥生土器 甕	①16.7※ ②5.2△	「く」の字状に屈曲する口縁。端 部はやや肥厚し、1条の凹線を施 す。	内面…ナデ。 外面…口縁部ヨコナデ。胴部タテ ハケ。	密 細砂粒少量含 む	良好	内外面ともにに ぶい橙色	表-4

## SK-12

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
5 47 13	132	弥生土器 甕	①17.6※ ②3.9△	「く」の字状に屈曲する口縁。口 縁端部はわずかに上方に拡張する。	内面…口縁部ヨコナデ。胴部タテ ハケ。 外面…口縁部ヨコナデ。胴部ナ メハケ。	密 1~2mmの石 英を少量含む	良好	内外面ともに橙 色	南條-5
6 47 13	132	弥生土器 壺	①20.2※ ②1.6△	大きく開く口縁部。口縁端部に3 条の凹線と刻み目を施す。残存部 に3つの円形浮文が認められる。	内面…ヨコ・ナナメヘラミガキ。 外面…ナデ。	密	良好	内外面ともに明 黄褐色	表-10
7 47	132	弥生土器 底部	②3.1△ ③5.6※	平底。	内面…胴部タテナデ。底部不整方 向ナデ。 外面…胴部タテヘラミガキ。底部 不整方向ナデ。	密 細砂粒少量含 む	良好	内面にぶい褐色 外面橙色	表-1

## SK-21

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
8 58 14	204	土師質 土器 碗	①16.4 ②5.4 ③6.6	口縁部は内湾することなしに直線 的に外方に伸びるもので器壁は薄 い。底部は静止糸切り。	内面…底部不整方向ナデ。外は回 転ナデ。 外面…回転ナデ。	密	良	内外面ともに浅 黄褐色	ずし-6

## SK-24

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
9 62 14	68 107	陶器 灯明皿 受け皿	①11.7※ ②2.1 ③4.2	皿の内面に上皿を重ねるための低 い突起が巡り、その一部に指押え によるくぼみをつくる。	内面…施釉。 外面…上半回転ナデ。他は回転へ ラケズリ。	緻密	良好	内外面ともに灰 白色	トウサン式 清水-11
10 62 14	110	土製品 土人形 (顔)	②9.8△	「泥天神」と呼ばれる土人形の顔。 2次的に火を受ける。		密	良	外面橙色	清水-10
11 62 14	110	土製品 土人形 (体部)	②8.6△	土人形の体部。武者人形か。		密	良好	内外面ともに橙 色	清水-9

## SK-25

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
12 64 14	61 64 100 142	陶器 油壺	②18.2△ ③10.4※	平底。胴部最大幅部を挟んで2条 の沈線を施す。	内外面ともに回転ナデ。	1~2mmの石 英を少量含む	良好	内面オリーブ褐 色・黒色 外面暗赤褐色	備前焼 南條-3

## SD-01

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
13 78 14	136	陶器 土瓶	①9.6 ②8.1	胴部中央付近に最大幅を持つ土瓶。 一方に注口がつき、その上に耳が つく。相対する側にも耳があった と思われる。口縁立ち上り部内面 の釉は剥ぎ取られる。	内面…回転ナデ。口縁立ち上り部 黄白色釉剥ぎ取り後、胴部 肩付近まで透明釉。口縁端 部釉剥ぎ取り。 外面…施釉。	密	良好	内外面ともにに ぶい黄褐色	清水-7
14 78 14	136	陶器 土瓶蓋	①10.4 ②2.4	宝珠状のつまみを持つ土瓶蓋。外 面に草類の文様を施す。	内面…回転ナデ。 外面…施釉。	密	良好	内外面ともにに ぶい黄褐色	清水-6

## SD-02

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
15 79 15	123	弥生土器 壺	①18.4※ ②1.4△	大きく開く口縁部。口縁端部に3条の凹線と粗い刻みを施す。残存部に2つの円形浮文が認められる。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面ともににぶい暗橙色	表-11

## SD-13

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
16 83 15	160	陶器 底部	②1.9△ ④4.9	高台を削り出す底部。内面底部に3つの砂土目が残る。2ヶ所に高台部が軸着する。	内面…施釉。 外面…上端部回転ナデ。他はケズリ。	緻密	良好	内面オリーブ灰色 外面にぶい黄褐色	チリメン高台 南條-12

## SD-15

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
17 88 15	162	陶器 底部	②2.3△ ④10.3※	高台の付く底部。高台内面に工具痕が残る。	内外面ともに施釉。	緻密	良好	内面施釉部淡黄色、露胎部にぶい黄褐色 外面にぶい赤褐色	南條-14

## SD-18

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
18 92 15	153	肥前陶器 底部	②1.3△ ④4.1	高台を削り出す底部。内面底部に3つの砂土目が残る。	内面…施釉。 外面…回転ナデ。高台内ケズリ。一部に釉がたれる。	緻密	良好	内面オリーブ灰色 外面明青灰色	南條-11
19 92 15	165	陶器 壺	①7.0※ ②2.3△	口縁部はほぼ直立し、端部は平坦面をなす。	内面…露胎。 外面…施釉。	緻密	良好	内面淡黄灰色 外面淡黄色	南條-10
20 92 15	165	磁器 口縁	①10.0※ ②2.2△	口縁端部は外側に肥厚する。	内面…口縁端部施釉。他は露胎。 外面…施釉後色絵。	緻密	良好	内面灰白色 外面淡黄灰色	南條-18

## SD-20

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
21 93 15	138	陶器 底部	②2.4△ ③8.2※	平底。外面には白濁の釉が波状に施される。	内面…回転ナデ。 外面…施釉。	緻密	良好	内面オリーブ灰色 外面褐色	南條-15

## SS-02

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
22 101 15	141	弥生土器 壺	①16.6※ ②1.1△	口縁端部を上下にやや拡張し面を持つ。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面ともににぶい橙色	表-6

## 竈状遺構

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
23 103 16	31 47 103	陶器 大甕	①41.4※ ②49.7 ③21.0	口縁端部を内外に肥厚する。胴部下半に弱い屈曲を持つ。内面底部に方形の胎土目が残存で5つ認められる。胴部肩に1条の波状のハケ目を施す。2つ以上の流し釉が認められる。	内面…回転ナデ。 外面…施釉。	密	良好	内面灰色 外面暗赤褐色	清水-5

## 遺構外

遺物番号 押印番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
24 109 16	6	弥生土器 甕	①15.7※ ② 1.9△	「く」の字状に屈曲する口縁。口縁端部を上方に拡張して面を持ち、2条の凹線を施す。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面ともににぶい橙色	表-8
25 109 16	119	瓦質土器 鍋	①27.2※ ② 4.5△	口縁上半部の屈曲が受口状を呈する。	内面…ヨコナデ。 外面…口縁上半部ヨコナデ。下半部はヨコナデ後指押えか？	密	やや良	内面暗青灰色 外面暗灰色	外面スス付着表-5
26 109 16	46	肥前陶器 皿	①13.4※ ②3.05△ ④ 5.4※	口縁端部近くで段をもつ溝縁皿。内面底部に砂目痕が残る。	内面…回転ナデ。施釉。 外面…回転ナデ。中位付近まで施釉。高台削り出し。	密	良好	内外面ともににぶい黄褐色	清水-3
27 109 16	98	肥前陶器 皿	① 9.9※ ② 2.0△	口縁端部近くで段を持つ溝縁皿。	内面…施釉。 外面…上半部施釉。露胎部下端ケズリ。他は回転ナデ。	密	良好	内外面ともに淡褐色	南條-6
28 109 16	82	陶器 底部	② 2.4△ ④ 4.4	高台を貼り付けた底部。内面底部に2つの胎土目が残る。	内面…施釉。 外面…回転ナデ。	緻密	良好	内面オリーフ灰色 外面にぶい黄褐色	南條-7
29 109 16	99 100	肥前陶器 甕	①20.6※ ② 8.2△	口縁端部を外内に拡張し、上部に平坦面をつくり、5条の凹線を施す。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面ともに暗褐色	表-17
30 109 16	63	陶器 甕	①28.6※ ② 8.6△	口縁端部を外内に拡張し、上部を平坦状にする。	内外面ともにナデ。	緻密	良好	内外面ともに暗赤灰色	南條-13
31 109 16	61 99 109 110	備前陶器 油壺	①17.4※ ② 8.9△	口縁端部を外側へ水平方向に張り出し、丸くおさめる。頸部と胴部に沈線を施す。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面ともに極暗赤褐色	清水-1
32 109 16	59 62	陶器 鉢	①29.0※ ② 9.0△	「く」の字状に開く口縁部。胴部には型押し文様を施す。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面ともににぶい黄褐色	南條-1
33 109 17	100 108	陶器 挿鉢	①22.0※ ④ 8.6※	口縁端部は外方に肥厚し、底部には高台が付く。おろし目は密に施される。内外面に鉄釉を施す。	内面…施釉。 外面…高台部露胎。他は施釉。	緻密	良好	内外面ともに暗赤褐色	南條-2
34 110 17	32	陶器 大鉢	② 8.6△ ④13.2	高台をもつ底部。	内外面ともに回転ナデ。外面には粗いハケ目の白色釉が施される。	密	良好	内外面ともににぶい赤褐色	表-3
35 110 17	23	肥前陶器 底部	② 2.1△ ③ 5.4※	平底。	内面…回転ナデ。 外面…胴部回転ナデ。底部回転糸切り。	密 砂粒を含む	良好	内外面ともににぶい赤褐色	表-2
36 110 17	21	陶器 茶入れ	② 7.1△ ③ 3.1	胴部の3ヶ所をナデてくぼませる。	内面…回転ナデ。鉄釉。 外面…胴部回転ナデ。上半部鉄釉。底部回転糸切り。	緻密	良好	内面暗赤褐色 外面施釉部暗赤褐色、露胎部淡黄色	南條-9
37 110 17	21	陶器 茶入れ	② 3.1△ ③ 3.2	胴部の3ヶ所をナデてくぼませる。	内面…回転ナデ。鉄釉。 外面…胴部回転ナデ。上半部鉄釉。底部回転糸切り。	緻密	良好	内面暗赤褐色 外面施釉部暗赤褐色、露胎部橙色	南條-8
38 110 17	28	肥前磁器 染付碗	①11.8※ ② 5.5 ④ 4.8※	直線的に外傾し、端部を丸くおさめる。底部に高台を貼り付ける。内面は蛇ノ目釉剥ぎを行う。文様は型紙摺りによる。	内面…施釉。底部は蛇ノ目釉剥ぎ。 外面…施釉。型押し。	緻密	良好	内面…明青灰色 外面…灰オリーフ色	陶胎磁器南條-20
39 110 17	34	磁器 碗	①11.8 ② 6.9 ④ 4.7	直線的に外傾し、端部を丸くおさめる。	内外面ともに施釉。	緻密	良好	内外面ともに灰白色	ずし-9
40 110 17	68 84	肥前磁器 染付碗	①10.6※ ② 4.3△	直線的にやや外傾する口縁部。端部は丸くおさめる。	内外面ともに施釉。	緻密	良好	内外面ともに灰色	陶胎染付南條-17
41 110 17	95	肥前磁器 碗	① 9.7※ ② 6.7△	口縁部はほぼ直立して端部にいたり、丸くおさめる。	内外面ともに施釉。外面下端に露胎部。	密	良好	内外面ともに青灰色	陶胎青磁清水-2

遺構外

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種 器 類 種	法 量 (cm)	形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
42 110 17	68	肥前磁器 五寸皿	①13.4※ ② 3.8 ④ 8.2※	内湾する口縁部。端部は内傾する丸みをもつ平坦状になる。底部外面は蛇ノ目釉割ぎされる。裏銘は、二重方形枠内に草書体の「福」字である。	内面…施釉。 外面…底部蛇ノ目釉割ぎ。他は施釉。	緻密	良好	内外面ともに灰白色	蛇ノ目凹形高台表-14
43 110 18	19	肥前磁器 小皿	① 9.9 ② 1.5 ④ 4.9	口縁部は大きく外反する。内面底部には不鮮明ではあるが、雷文状の陰刻が施される。	内外面ともに施釉。	緻密	良好	内外面ともに灰白色	陶胎白磁表-12
44 110 18	73	磁器 猪口	① 7.5 ② 3.1 ④ 2.8	内面に吹墨技法によって桜の花を表現する。	内外面ともに施釉。	緻密	良好	内外面ともに灰白色	吹墨技法南條-16

挿表12 石製品観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	出土位置	器 種	石 材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備 考
S 1	78	14	137	SD-01	砥 石	硬砂岩	8.2△	4.5	3.7	220	ずしー1
S 2	98	15	194	SS-01	磨 石	角閃石安山岩	10.4	9.5	6.9	945	ずしー2
S 3	107	16	135	P103	磨製石斧	花崗閃緑岩	11.8△	5.0	2.1△	235	ずしー4
S 4	111	18	70	遺構外	磨製石斧	石英質緑色片岩	19.7△	6.1△	1.9△	343	ずしー5
S 5	111	18	50	遺構外	磨 石	閃緑岩	12.2△	5.5	4.0	480	ずしー3
S 6	111	18	203	遺構外	五輪塔空風輪	花崗斑岩	28.6	19.3		7560	表-15
S 7	111	18	202	遺構外	五輪塔地輪	角閃石黒雲母石英安山岩	27.9	28.8	11.5	14320	ずしー8

挿表13 鉄製品観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	出土位置	器 種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	備 考
F1	56	13	134	SK-20	鉄 鎌	25.9	3.7	1.9	南條-19
F2	77	14	200	SK-37	鉄 鍋	12.5△	31.2※	0.4	清水-8
F3	98	15	193	SS-01 穴3	鉄 鎌	19.5△	4.3	0.5	表-3